２０２４年１月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１８日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、「ＮＨＫ経営計画　2024-2026 年度」の概要についての説明があり、議事に入った。

会議ではまず、事前に視聴した、いちおし！九州沖縄　かごスピ「わが町の映像アルバム～奄美大島・徳之島編～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に２月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	古荘　貴敏	（株式会社古荘本店代表取締役社長）
副委員長	西野　友季子	（株式会社ニュー西野ビル代表取締役）
委　　員	いのうえちず	（株式会社 suikara　取締役）
	大館　真晴	（宮崎県立看護大学　教授）
	久保田　正廣	（西日本新聞社こどもタイムズ編集長　兼　特別論説委員）
	合原　万貴	（マルマタ林業株式会社　取締役）
	陳　優継	（株式会社 四海楼　代表取締役社長）
	増村　雅尚	（九州産業大学　人間科学部　スポーツ健康科学科　教授）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社５代目技術継承者　デザイナー）
	吉水　請子	（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜いちおし！九州沖縄　かごスピ「わが町の映像アルバム～奄美大島・徳之島編～」（総合　１２月２６日(火)放送）について＞

○　３０代から８０代までの幅広い世代の人たちが出演していて、世代間の会話がおもしろかった。奄美大島ゆかりの歌が４曲連続で披露された、昭和３８年の紅白歌合戦の映像は特に貴重だと感じた。また、復帰から１０年あまりの徳之島の空港で、観光客にソテツの冠をかぶせている映像を見て、現代の人たちがまたやってみたらどうかと話していたのが印象的だった。伝統文化や伝統工芸を引き継ぐのとはまた異なる点で、世代を超えて地域の歴史を分かち合うような取り組みは大切だと思う。

このようなアーカイブ映像を活用した番組を、各地域にも展開してほしい。

○　昔の映像をただ流すのではなく、その映像について現代の幅広い世代の方々が語り合うことで、化学反応が起きていて感動した。奄美大島の占領下で、貧困を生き抜くために毒性のあるソテツの実を干している学生たちの姿からは、当時の厳しい状況がよく分かった。また、復帰から１０年あまりの徳之島の空港の映像で、出迎えた観光客にソテツの冠をかぶせる様子を見た現在の人々がしきりに感心していて、平和な時代になったことが感じられた。そのようなソテツの実の対比などから、昔と今の人々の考えや思いの違いが感じられて興味深かった。ただ一方で、奄美大島の仮装行列について、余興文化という説明で終わっていたが、徳之島の豊作祈願の祭り「ムチタボリ」でも仮装して家々を回っていたということで、２つの島には共に仮装の文化があったという点を関連させて説明していれば、復帰２日目に仮装行列をしていたことの意味がより分かりやすかったかのではないかと思った。

○　ＮＨＫならではの膨大なアーカイブ素材を利用した番組で、制作方法にも工夫が見られ、楽しめる内容であり、今後も各放送局で実施してほしい取り組みだと感じた。ただ、演出面においては歴史を理解していない若者層もいることから、奄美にも米軍政府による占領の歴史があったことをもう少し説明したほうがよかったのではないか。出演者の人選は年代のバランスが取れていて、中には映像に出てくる当事者もいたことから、過去と現在がつながるなど、話に濃淡や緩急が付いていてよかった。今回、出演者を選んだ際に苦労したことがあれば教えていただきたい。一方で、映像に出てくる本人の話はやや冗長な自慢話のように聞こえるのではないかとも感じた。また、奄美ならではの苦難や、貧困等を背景にした差別の問題などについても、もう少し掘り下げてほしかった。元ちとせさんの登場で初めて奄美出身だと胸を張れるようになったという話などをもう少し掘り下げていたら、陰影がついてより訴求力のある番組になったと思う。

（ＮＨＫ側）

人選については、制作の過程である方に声をかけて、番組の趣旨に賛同して積極的に発言していただけるさまざまな世代の方をご紹介いただいた。島に対する差別などについては、復帰７０年を機に鹿児島ローカルのニュースなどの放送では取材を積み重ねてきている。ただ、今回の番組ではそのような点について深く踏み込んで発言していた方がいなかったことから、取り上げることはなかった。自慢話に聞こえるという点について、徳之島の部分では、町長選挙で分裂してしまった島を出演者の１人でイベント

プロデューサーの丸野清さん がどのようにまとめていったか、島の人たちも知らなかったその事実自体に感心していた人が多かったことから、番組で伝えることにした。

○　冒頭の「奄美のガンジー」と言われた泉芳朗さんの万歳の様子に感動し、その後の展開に期待を抱きながら視聴した。徳之島の闘牛の映像は、現代ではあまり見られない熱狂する人々の様子や独特な雰囲気がすばらしかった。伊仙町の町長選挙の映像に対する「これ闘牛ですか？」というコメントもおもしろかった。出演者の人選については、３０代の役場勤務の方が出ていたが、同じ３０代の奄美大島で起業している方や、先祖代々の店を継いでいる方がいてもよかったのではないか。まちづくりに関わってきたさまざまな世代の方が、この番組の場で初めてつながって会話できたという点も興味深かった。2010 年の徳之島の映像で、米軍普天間飛行場の移転に反対する住民のデモの様子があったが、奄美大島のクロウサギや自然遺産にも影響がないのか気になった。

（ＮＨＫ側）

奄美大島を含む南西諸島で自衛隊基地や駐屯地の建設が進んでいることは事実で、番組のテーマとして今後取り上げたいと考えている。また、クロウサギや自然環境への影響について、今回の制作にあたっての鑑賞会ではこのことについて語る方はいなかった。番組では、奄美大島が世界自然遺産になったことの背景に、イギリスのエジンバラ公爵フィリップ殿下がいたという、島の多くの人たちが知らなかった事実そのものと、その映像がＮＨＫアーカイブスとして残っていたことから、それらを題材として話を展開させていった。

○　過去の映像に出てくる本人や身近な人が追想することで、当時の振り返りの内容が深いものになっていると感じた。出演者の人選は、年代についてもそれぞれの方の活動内容についても適切だと感じた。画面を分割して当時の映像と鑑賞会での会話を同時に見せる演出は、うまくまとまっていておもしろかった。イギリスのエジンバラ公爵フィリップ殿下や泉重千代さん、元ちとせさんなどの著名な方の話題があったことで、鹿児島の歴史を知らない人も引き込まれたのではないかと思う。歴史を学校の授業などで学ぶとき、過去の歴史というのは自分にとってはただの物語でしかないという感覚があるが、当事者を交えて昔の映像について語り合う出演者たちは、若者も含めて歴史の参加者となっているように見えた。そのことを、番組の魅力としてもっとアピールしてもよかったのではないか。また、日本に復帰する直

前の奄美大島の貴重なカラー写真は、どのように発見されたのか気になった。

（ＮＨＫ側）

カラー写真は鹿児島大学の客員研究員がアメリカで見つけたもので、鹿児島の奄美支局の記者の取材で去年９月にニュースとして放送した。歴史の一員として映像を見るという考え方は、今後の番組の制作にあたっても意識していきたい。

○　奄美大島が日本に復帰してからの７０年間の出来事がテンポよく時系列に沿って構成されていて、楽しく視聴した。画面を二つに分割してアーカイブ映像と現在の鑑賞会の様子を同時に見せる演出はユニークで、出演者と一緒に見ているような感覚になることができた。映像に知人が出ていると言っていた出演者もいて、島ならではの人の距離感やつながりを感じられた。人選のバランスがよく、若い世代の方たちが当時を知る人と一緒に古い映像を見ることで新しい気付きを得ていて、視聴者としてもさまざまな気付きが得られた。かつての庶民の人々の映像は、写真で見るよりも新鮮でおもしろかった。鹿児島県民であっても奄美の復帰７０周年という認識をしている人は少ないと感じることから、もう少し歴史の解説があってもよかったのではないかと思う一方で、全体として復帰後の明るいイメージで作られていたことから、興味深く見ることができた。ＮＨＫならではのアーカイブ映像を生かしたすばらしい番組だった。

○　島から旅立つ人が乗る船を港で見送る昔の映像では、今は見ることのない大量のカラーのテープを使って別れを惜しむ様子が映っていて、島ならではのシーンとして印象的だった。一方で、歴史の中での島独自の苦難についての紹介もあった方が、日本復帰という事実が冒頭の泉芳朗さんの印象的な万歳コールにつながりやすかったのではないか。また、徳之島の映像に切り替わった際にハイビスカスと海の映像が挿入されていたが、もっと徳之島ならではの映像にしてもよかったのではないかと感じた。さらに、徳之島の島民のロックバンド「まぶらい」の映像は印象深かったが、コメントの音声が少し音割れしていたのが気になった。

○　画面を二つに分割してアーカイブ映像と現在の鑑賞会の様子を同時に見せる演出と、出演者の年齢層を幅広く集めていた点がよかった。一方で、会話の内容は思い出話や当時を懐かしむものが多く、島の将来を語り合うような場面があればもっと見応えがあったのではないかと感じた。当事者ではない視聴者からすると、地元にしかわからない話題を、地元の方たちが懐かしんでいるという印象が強くなってしまい、少し置いてきぼりにされている感覚であった。若い参加者もいる中で、このアー

カイブ映像を見て今後、島をどのようにしていきたいのか、幅広い年代の方々と一緒に島の将来について活発に語り合うような場面があれば、当事者ではない視聴者も自分の出身地を思いながら見ることができたのではないか。

○　本土復帰や泉重千代さんなど、取り上げられたトピックスが地元の方々の島に生まれた自信や誇りを高揚させているのが伝わってきて、すばらしいマーケティング力だと感じた。政治経済、自然環境、サブカルチャーなど、僅かな時間の中に数多くの項目が盛り込まれている中で過剰な印象を受けなかったのは、これらのトピックスが人々の思い出として、心象風景のように構成されているおかげだと感じた。それぞれの話題に直接関わっていた方を出演者として選んだことで、その人の記憶の扉が開かれていく様子が分かり、重要な効果を生んでいた。その土地に生まれたことに自信を感じられるかどうかは、生活していく上での幸福感、ひいてはまちづくりの原動力や経済的な成長にも大きな影響を与える要因だと思う。鑑賞会に若い世代が加わることで、そのような土地に対する自信の高揚感を共有することには、大きな意義があったのではないかと感じた。一方で、冒頭のタイトルロゴについて、文字の部分が小さく静止しても読めなかった点や、参加者紹介の一覧も非常に見づらかった点については、改善の余地があったのではないかと思った。

○　いわゆる内輪で盛り上がっている番組は、地域の外の人が見るとしらけてしまいがちだが、今回の番組は取り上げた一つ一つのコンテンツが強烈だったことから、興味深く見ることができた。徳之島の闘牛は現在も行われているということだが、動物愛護団体からの指摘はないのか気になった。全体として、今回紹介されていた一つ一つのコンテンツが興味深く、それぞれのストーリーは単独で県外向けのＰＲ番組としてそのまま成り立つのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

徳之島に対して、動物愛護団体からの指摘があるということは聞いたことがない。闘牛をはじめとして、昔から今も続いている島の風景の価値をこれからも伝えていきたい。今回の番組では、単純に項目を並べるのではなく、どのように組み合わせていくか、構成は慎重に検討を重ねたものである。徳之島の伊仙町長選による島の分裂について扱うことについては議論もあったが、その歴史を乗り越えて、徳之島の今があるということを若い世代に伝えたいという思いからこのような構成となった。頂いた意見は今後の番組に生かしていきたい。

（ＮＨＫ側）

出演者の自然な会話に委ねる部分が多い構成になったのは、番組のねらいに沿った形で和気あいあいとした雰囲気を演出するためにはやむをえなかったように思う。全く別の地域や時代の話でも、自分事として自分の地域を捉えるきっかけにもなるという点で、アーカイブ映像の力を感じた。頂いたご意見を参考に、今後もこのような番組を制作していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　「ＮＨＫ経営計画　2024-2026 年度」の内容について、前田晃伸前日本放送協会会長が、パブリックコメントにて厳しい評価を含む意見書を寄せたことが報道されている。評論家や学者ではなく、前の経営者が意見することは、多くの人々にとっては戸惑いを感じる事象であることから、このことについて説明していただきたい。

（ＮＨＫ側）

どのような立場の人であってもパブリックコメントにおいて意見を出すことは可能である。現体制の計画の内容は、前会長が提言した改革から全く逆転しているわけではなく、前体制が掲げた改革を検証と発展という形で見直そうとしているのだと認識している。

○　１２月８日（金）の＠おおいた「ありがとう進撃の巨人スペシャルトークショーｉｎ日田」を見た。インタビュアーである松澤千晶さんの、進撃の巨人への愛あふれるインタビューがよかった。海外から来たファンを含めて、一人一人丁寧にインタビューされていて、ファンの方が進撃の巨人の作中のせりふと、自分の人生を重ねて語っている様子は興味深かった。

１２月１５日（金）のザ・ライフ「九州沖縄からボナペティート～イタリアントップシェフの挑戦～」を見た。九州と沖縄の素材を使ったピザを作りあげるイタリアンシェフの姿を追った番組で、実際にピザを食べてみたいと思わせる内容でよかった。

１月６日（土）の財前直見のおおいた暮らし彩彩「２０２３秋みのり」（総合 前7:35～8:00 九州沖縄ブロック）を見た。足踏み脱穀機によって米の脱穀をしている様子は興味深かった。また、1300年以上続いている大分県杵築市のどぶろく祭りの

様子を映像として見ることができておもしろかった。

１２月１７日（日）の日曜討論を見た。「ＮＨＫスペシャル　シリーズ　食の“防衛線”」と続けて見ることで、食糧危機について理解が深まった。生産性を拡大するということと、少数多品種にこだわるということの二つの路線が出されていてよかった。

○　１月１２日（金）の＃てれふく「のぞき見ドキュメント　中洲・人間劇場」を見た。今の中洲のリアルな姿を切り取っていて、印象深い番組であった。一般の方々が行き交う場所に数多くのカメラを設置することは、大変な取材交渉が必要だったかと思うが、苦労したことがあれば教えていただきたい。

○　１月１２日（金）の＃てれふく「のぞき見ドキュメント　中洲・人間劇場」を見た。夜の映像は少し画質が粗く感じたが、ゲイバーや坊主バーの入口の仏像など、夜の風景がよく撮影できていた。アバンの部分で、坊主バーで「人生ってうまくいかないよね」と言っていた女性客について、本編の出演シーンがなかったことが気になった。今後、中洲を支える今回取り上げたのとは別の職業の方たちにもフォーカスしていって、東京の新宿２丁目とは異なる、中洲ならではの文化や魅力について発信できる番組を制作していただきたい。

○　１月１２日（金）の＃てれふく「のぞき見ドキュメント　中洲・人間劇場」を見た。中洲という場所の選択がすばらしく、福岡らしいディープな部分が見られ、人の温かさがよく伝わってきた。５０台のカメラを設置する場所の選定については、幅広く適切なバランスで中洲が網羅されていると感じた。ただ、２５分の中に内容を詰め込んだような印象があったので、１か所ずつもう少し長く、さまざまな場面を見てみたかった。「ドキュメント７２時間」のような人間模様を掘り下げるような番組として、中洲を取り上げてもよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

以前全国放送の「１００カメ」を制作していたディレクターが担当し、そのノウハウを生かして今回は５０台のカメラで番組を制作した。許可を頂いたさまざまな場所にカメラを設置し、撮影された映像で作り上げる番組であるが、今回は飲酒している人が多い場所ということもあり、撮影中も撮影後も映っている人への確認を丁寧に行いながら制作を進めた。坊主バーの女性客については、番組冒頭で女性客も来店するような店であることを表した

かったことから、ご本人に許可を頂けた部分のみ放送した。

○　１月１２日（金）の長崎スペシャル「平和を仕事にしたいけど」を見た。タブー視される平和とお金の問題に切り込んでいるタイトルであり、本当に驚いた。ただ、タイトルや大澤新之介さんの「平和で稼げたらよくない？」という冒頭のことばから期待した展開にはなっておらず、ＡＤＨＤの障害がありながらも、平和活動に出会ったことで成長していくという物語に置き換えられていたという印象であった。むしろ、数字には強いが平和活動には興味がないと紹介されていた柏朱華さんにフォーカスしたほうが、タイトルに合わせた展開になったのではないか。若者が粗削りながらも画期的なビジネスを計画していく話であればおもしろかったと思う。長崎をはじめとしたあらゆる土地で行われている観光産業自体が平和ビジネスであって、その中で日常生活が営まれているのだということ、あるいは、日常行われている観光産業が平和だからこそ成り立つものだということに気付いていく、という着地点があればよかったのではないか。

１月１日（月）に能登半島地震が発災した直後の山内泉アナウンサーの呼びかけはすばらしかった。地震発生後についてもさまざまな専門家が出演し、被災地での健康リスクなどの対策について述べていたのはすばらしい報道であった。東日本大震災での経験や教訓から、正確で大事な情報をテレビで伝えることは重要であり、今後も維持していただきたい。

○　１月１２日（金）のプラスみやざき「クラシック　狩人たちの舞い　～奥日向　銀鏡神楽～」を見た。国の重要無形文化財である銀鏡（しろみ）神楽を取り上げた、昭和５８年に放送された「九州スペシャル」という番組を、現在の保存会の方々が見てコメントを述べるという番組であった。当時から変わったことだけでなく、４０年間神楽の舞いが変わっていないということに言及している人もいて、今後も時代に合わせてどのように神楽を継承していくか考えていきたいと話していた。アーカイブ映像は、人々の将来の活動を後押しする可能性があるものだと感じた。過去の映像を通して今を考えるという手法の番組が今後制作されていく中で、何に着目しどのように論じていくのかという点については、制作者の力量が試されているのだと思う。新たな手法を磨き上げることで、新しい気付きがもたらされる可能性を感じた。

○　１月１５日（月）の「クマロク！」内のコーナーである「今日も完食！稲塚喜一のグルメ旅」を見た。稲塚貴一アナウンサーのグルメリポートがすばらしかった。人柄

のよさが映像から伝わってくるとともに、視聴者が知りたいことを的確にインタビューしていて、そのやり取りに癒やされた。年末年始には見応えがある大型番組が多く全国放送されたが、ローカルに特化して人の温かさを感じるような番組もある幅の広さがＮＨＫの強みだと考える。今年も意欲的な番組制作をお願いしたい。

○　１２月１９日（火）の新日本風土記「那覇の坂道」を見た。坂道をキーワードにストーリーがつながっていく構成や、取り上げられているエピソードはおもしろかった。一方で、もともと違う町であり文化も違う首里の坂道が「那覇の坂道」としてまとめられていることには違和感があった。また、冒頭のナレーションでは沖縄のことばで坂のことを「ビラー」と言うとされていたが、これは日本語の「サカ」と同様に、接することばによって「ヒラ」「ビラ」と変化するものであり、違和感があった。制作の段階で簡単なネイティブチェックを入れてはどうかと思った。ほかにも首里の部分では、首里の文化ではないエイサーを踊る子どもたちの様子を、沖縄の伝統文化と紹介している点には違和感があった。一方で、栄町の取材は内容がすばらしく充実していたことから、複数の取材班によってそれぞれの部分をつなぎ合わせているような印象を受けた。

○　１２月２６日（火）の地球イチバン「地球イチバンｄｅｃａｄｅ　世界の“違い”と“同じ”を体感する旅へ！」（総合 後 10:00～10:59）を見た。タイトルの「世界の“違い”と“同じ”」が何を意味するものか、よく理解できなかった。取り上げられている三つの国それぞれの内容はよかったが、やや無理やりつなげている印象であった。その一方で、ペルーとボリビアにまたがるチチカカ湖の１０年間の変化の映像からは、環境の変化への危機感が感じられた。また、世界中で最も服にお金をかける人たちといわれるコンゴ共和国のサプールの中には女性もいて、その活動によって自分らしくいられると語っていたのが印象的だった。さらに、１０年後にサプールがどのようになっているのかについても興味深く感じた。それぞれの土地への強い思いを抱きながら、人々が未来の夢に向かっている姿を見ることができた番組であった。

○　１２月３１日（日）の「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」（総合 後 7:20～11:45）を見た。人気グループＹＯＡＳＯＢＩの「アイドル」の歌唱を、日本と韓国のアイドルたちがダンスで盛り上げるという演出は、今のＮＨＫでしか実現できない場面だと感じた。「ボーダレス　超えてつながる大みそか」というテーマは、障壁や制約を越えるという意味で、今の時代に求められているものであると思った。演歌や現在流行

している歌、そして昔の歌も披露され、今回のテーマにふさわしい番組であった。

１月１日（月）に発生した能登半島地震を報じたニュースの中で、山内泉アナウンサーが強い調子で避難の呼びかけを行ったことを高く評価したい。東日本大震災における初動対応の反省から、ＮＨＫアナウンサーが訓練を行っていることは知っていたが、今回実際に訓練通りの呼びかけができたことで、日本中の視聴者が事態の深刻さを悟ったのではないかと感じた。

１月３日（水）の「新春生放送！東西笑いの殿堂」（総合 後1:10～5:00）を見た。生放送ということで対応は難しかったと思うものの、震災被災地への配慮という点ではやや分かりづらく、全体として落ち着きがない印象を受けた。

１月７日（日）のＮＨＫスペシャル「世界に響く歌　日韓ＰＯＰＳ新時代」（総合後 9:15～10:04）を見た。紅白にも出演したＹＯＡＳＯＢＩとＮｅｗＪｅａｎｓが、日本と韓国のみならず世界の音楽シーンをにぎわせている背景について解説していて、紅白歌合戦での歌唱はこの番組の序章という意味合いもあったのではないかと感じ、ＮＨＫ全体としての番組制作の厚みを感じた。

○　１月７日（日）のこころの時代～宗教・人生～「“凡夫”のまま輝く　僧侶・アナウンサー川村妙慶」を見た。川村さんのこれまでの人生のさまざまな経験が紹介されていて、その経験が今のご本人をつくり上げてきたことがよく伝わってきた。悩んでいる方たちと同じ目線に立って、ただの人、“凡夫”として自分をさらけ出しながら、常に基本に忠実に学び続けている謙虚さには感銘を受けた。数多くの悩み相談を受ける様子から、自分の力を誰かのために役立てたいという使命感が番組を通じて伝わってきた。ストレス耐性が弱くなったと言われる社会のためにも、人々の内省をどのようにサポートしていくか示すような番組をこれからも制作していただきたい。

（ＮＨＫ側）

１１月１７日（金）の「ザ・ライフ　“可能性”を見極める～ホークスのスカウト最前線～」の内容について、１２月の番組審議会にて増村委員より２点質問を頂いた。１つ目は、投手が投球する際のリリースの角度として９２度と表現していたが、画像を見ると一般的なリリースの部分の映像ではなく、違和感があったという点であった。これはスカウトの発言で、「リリースまでの一連の動作」という意味でリリースということばを使っていたことから、インタビューの音声をそのまま生かしたものである。２つめは、ドラフトで２番目に指名した選手の練習風景の映像の出典

がソフトバンクホークスと記載されていたが、ドラフト前に接触があったのではないか気になったという点であった。この映像は、ソフトバンクが大学から正式なルートで入手したものであって、番組でも適切に使用したものである。

（ＮＨＫ側）

アーカイブ映像を活用する番組では、どのような素材を使って何を伝えたいのかという点に制作者の思いを乗せることが不可欠だと考える。異なる時代の映像を対比させることで視聴者が自分の立ち位置を再確認することにつなげるなど、演出を検討していきたい。今の時代を見据え、未来をよりよいものにしていくために、ＮＨＫの財産であるアーカイブスを視聴者と共有してどのように活用していくか、重要な局面になっていきていると受け止めている。

（ＮＨＫ側）

能登半島地震の報道での山内泉アナウンサーの呼びかけは、日頃からどのアナウンサーも災害に備えて、いつでも対応できるよう訓練していたことで実施できたものである。この訓練は東日本大震災における報道に対する反省の下に行っていたものであり、今後も災害報道を迅速で確実に伝えていくことに努めたい。復興・復旧までは長い時間がかかると言われている中で、被災地の状況を全国に伝えること、被災者に必要な情報を確実に届けることを続け、公共メディアとしての役割を果たしていかなければならないと考えている。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２３年１２月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１４日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、議事に先立ち、５月１５日（月）に放送した「ニュースウオッチ９」報道へのＢＰＯ意見について報告があり、議事に入った。

会議ではまず、事前に視聴した、いちおし！九州沖縄　長崎スペシャル「こども放送合唱団“わかば唱歌隊”～平和をつなぐ歌声～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に１月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	古荘　貴敏	（株式会社古荘本店代表取締役社長）
副委員長	西野　友季子	（株式会社ニュー西野ビル代表取締役）
委　　員	いのうえちず	（株式会社 suikara　取締役）
	大館　真晴	（宮崎県立看護大学　教授）
	久保田　正廣	（西日本新聞社こどもタイムズ編集長　兼　特別論説委員）
	合原　万貴	（マルマタ林業株式会社　取締役）
	陳　優継	（株式会社 四海楼　代表取締役社長）
	増村　雅尚	（九州産業大学　人間科学部　スポーツ健康科学科　教授）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社５代目技術継承者　デザイナー）
	吉水　請子	（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜いちおし！九州沖縄
長崎スペシャル「こども放送合唱団“わかば唱歌隊”～平和をつなぐ歌声～」
（総合　１２月２日(土)放送）について＞

○　戦争の場面がなくとも平和の大切さを考えさせられる新鮮な番組であった。岡山直さんの娘や教え子たちのインタビューから、彼の音楽と平和への思いが受け継がれていることがよく分かり、人物像も想像しやすかった。音楽とともに人生をおう歌している教え子たちの姿を通じて、岡山先生への心からの敬意が伝わってきた。たった一枚の写真から始まった番組であったが、脚本が明快で分かりやすく、静止

画像を多用していても問題なく見ることができた。また、金澤利夫アナウンサーのナレーションは現代的な雰囲気がありすばらしかった。中盤のインタビューの中で、阪本孝子さんがわかば唱歌隊の歌を歌う場面は、現代の長崎児童合唱団の面々が歌う最後の場面に向かって、期待を高めてくれる伏線になっていた。これからもさまざまな視点から、平和について考えさせられるエピソードを見つけ出して伝えていただきたい。

○　戦争の中でも平和を願っていた方の思いについて丁寧に取材されていて、まとまりがあった。出演者のインタビューからは、岡山直さんのあたたかい思いが伝わってきた。また、その思いが歌を通じて現代にも残されていることを感じ、彼の歌が歌い継がれるという結末には感動した。時代が進むにつれて当時を知る人の高齢化も進んでいる中で、このような番組が制作されることで戦争を知る人々の思いを伝え、忘れ去られることなくつながっていく。人々の気持ちに訴えかけ、考えさせるきっかけとなるという意味でも、今回のような番組の制作はテレビの大切な役割であると感じた。

○　資料として出てきた写真のすべてに出典が明記されていて、分かりやすかった。一方で、岡山直さんの生い立ちや、合唱団創設のきっかけについてはもう少し詳しく知りたかった。平和についての話題で原爆が出てきたのは、長崎の番組らしい構成だと感じたが、同時にやや唐突にも感じた。平和のあり方については、さまざまな形で描かれていてもよかったのではないかと思っている。当時の教え子たちにとって、わかば唱歌隊の活動がどのような点で生きがいとなっていたのか、もう少しインタビューで聞きたかった。また、わかば唱歌隊の活動の経歴について、時系列的なテロップや文字情報があればよかった。

○　戦時中に戦争の話はせず、子供たちが楽しく歌うことだけを大事にするということは、簡単なことではなかったと思う。出演している方がみな「わかばの歌」を口ずさんでいたのが印象的で、音の記憶というものは人々の記憶の中によく息づいているのだと感じた。年齢を重ねても音楽を続けている人のインタビューからは、当時の人々の思いが次の世代へと受け継がれていることがよく分かった。復元された「わかばの歌」が現在のＮＨＫの児童合唱団によって歌われるという最後の場面は、過去から未来へと希望をつないでいるようにも見えてすばらしかった。岡山直さんの「さまざまな国の人たちと音楽を介して平和な世の中を作ることができる」という思いのように、今後もこのような平和への思いをテーマにした番組が制作されることを期待している。

○　戦争や原爆に翻弄された歴史に埋もれた事実を掘り起こし、平和を問う貴重な番組だった。当時を知る高齢の方々の証言の明瞭さに驚きを覚えると同時に、貴重な映像記録になっていると感じた。岡山直さんが、戦争に対して拳を上げて反対を表すのではなく、歌を通してあらがっていたということが印象的であった。当時の教え子たちが高齢になってもそれを覚えているということから、岡山さんの信念が伝播したのだと感じた。ところで、ＮＨＫにも資料が残っていなかったというわかば唱歌隊について、どういった経緯で今回の番組を制作しようと考えたのかをお聞きしたい。

（ＮＨＫ側）

被爆者への取材を続ける中で、太平洋戦争初戦の真珠湾攻撃の際の魚雷を製造していた工場である、長崎の三菱兵器製作所大橋工場に行き当たった。当時魚雷の製造に関わっていたという方に会いに鹿児島県垂水市に行ったところ、その方が持っていた資料に記されていた「三菱兵器製作所の歌」を作ったのが岡山直さんだった。岡山さんが長崎で被爆していてふるさと福島に戻った　という経歴を知ったのが興味を抱くきっかけとなり、その後取材を深めていくことで今回の番組制作に至った。

○　岡山直さんについての数々のインタビューを通して、平和の中で生きていけること、音楽で幸せを感じることはすばらしいことだという価値観を持つ人を数多く育ててきた方であることがよく分かった。岡山さんの「教育は技術ではなく信念だ」という言葉には感銘を受けた。師範学校で岡山さんに音楽の教えを受けた築城昭平さんが、戦中は岡山さんを周囲の評価に合わせて頼りない先生だと思っていたが、今思えば平和の尊さを真に伝えてくれていたのだと振り返っていたことばが印象的であった。戦時中にこのような行動をしていた人に着目して、番組を制作することはすばらしいことだと感じた。その一方で、昭和８年から２０年まで１２年間のわかば唱歌隊の活動についてはもう少し時系列で知りたかった。

○　長崎のローカル番組ということで地元に密着した内容なのかと思っていたが、原爆や広島の話題、アメリカで歌手になっている方の出演もあり、さまざまな意味で広がりのある番組であった。緩急のつけ方や場面の切り替えがすばらしく、出演者の方々のことばが明確かつ的確で、２５分間集中して視聴することができた。一方で、タイトルについては「音楽教師」や「指導者」といった、戦争の中で奮闘した音楽教師の岡山直さんをイメージできるようなことばがあれば、さらによかったのではないかと感じた。周りの先生が軍国主義に邁進する中で、平和への信念を貫き通

したということについては、当時の学校の先生たちが置かれていた環境についてもう少し描かれていたら、岡山さんの信念がより立体的に見えてきたように思う。また、今回の番組では多くの高齢者の方々に取材していたが、ことばを引き出すうえで工夫したことがあれば教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

出演していただいた方々はこちらが何も言わずとも、わかば唱歌隊の歌や岡山先生の教えについて話をして下さった。岡山先生の教えが当時の子どもたちにも強く、９０年以上にわたって浸透していたのだと思う。

○　埋もれていた生活文化の歴史を見事に掘り起こしたすばらしい番組だった。出演している方々が９０歳近くの高齢になっても、何らかの形で音楽に関わりながら豊かな生活を送っていて、人間の形成において幼少期の体験は重要なのだと実感した。昭和８年から２０年までの１２年間の「わかば唱歌隊」の活動について、ラジオから流れる子どもたちの歌声は戦時下において大きな価値があったのではないかと考えるが、長崎の方々はどんな印象で聞いていたのかが分かれば教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

頻度は不明だが、当時は夕方６時台の「少国民の時間」という番組内でわかば唱歌隊の歌を放送していたと思われる。元わかば唱歌隊のみなさんからは、ラジオが一家に１台あるかないかという時代で、家族が聞いて喜んでいたと聞いた。音楽の普及においてラジオが大きな役割を果たした当時において、子どもたちの歌声も重要なコンテンツであったことが分かった。

○　戦前、戦中に子ども時代を過ごした方はみな、歌というものを大事にしていて、戦場への道すがら軍歌を歌って自分を鼓舞したという人もいる。音楽の自由がなくなっていく時代に、軍歌や戦争の歌を子どもたちに歌わせなかったという岡山直さんのエピソードからは反骨精神を感じた。元わかば唱歌隊のみなさんの「わかばの歌」は跳ねるように歌っていたのが印象的であったが、現在のＮＨＫ長崎児童合唱団は流れるような歌声であった。これについて、何か演出の意図はあったのかが気になった。また、原爆については近現代を描く際には避けては通れないものとしてあったという印象で、この番組ではあまり強調していないように感じた。いずれにせよ、ローカル番組に留める内容ではなく、２５分に収まらなかった部分もあればそれも含めて、ぜひ全国放送してほしい番組であった。

（ＮＨＫ側）

歌唱方法については演出の意図はなかった。岡山直さんの娘である荻原晶子さんが記憶を頼りに制作した楽譜に､｢自由に歌ってください」というメッセージを添えて、今のＮＨＫ長崎児童合唱団に渡した。よって、流れるような歌声は彼らなりの歌い方によるものだと思われる。また、原爆については出演している９０歳以上の方々はそれぞれが被爆者であったが、今回は２５分という時間の制約がある中で音楽について焦点を絞ったことから、原爆に関するエピソードが強くなり過ぎないことを意識した。

○　歴史上名前は知られていなくとも、すばらしい人々が日本を支えてきたのではないかという気づきを、今回の番組を通じて得ることができた。粘り強い取材のおかげで､岡山直さんという存在が見いだされたことは価値がある。また､一人の教師の影響がどれほど大きいかということも実感した。８０年以上前の先生のことを強烈に覚えているという状況はなかなかないことで、教員不足と言われる現代でも、人を導く存在は重要だと改めて考えさせられた。｢わかばの歌」を復活させて、現在の児童合唱団が歌うことで過去と現在をつなぐという演出はすばらしかったが、このアイデアはどのような経緯で生まれたのかを教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

「わかばの歌」を復活させるというアイデアは、全局体制で開催している長崎局の番組提案会議の中で、事業の担当者からコロナ禍のため活動がなかなかできなかったＮＨＫ長崎児童合唱団に、番組の中で歌を歌う機会が設けられないかと提案があったことから生まれた。これを機に、今後も関係性を広げていきたいと考えている。

（ＮＨＫ側）

戦争の記憶を掘り起こし、現在、そして未来につなげていくことが、ＮＨＫとして大切だという評価を頂いた。再来年には原爆投下８０年という節目を迎え、まもなく被爆者がいなくなる時代を迎えようとしている。どのように戦争の記憶をつないでいくのかということは、長崎のみならず日本の課題でもある。ＮＨＫだけではなく、さまざまな企業や市民のみなさまたちと連携して、どのようにして戦争の記憶を未来につなぎ、平和へのメッセージ

を伝えていくか、引き続き考えていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１１月１７日(金)のザ・ライフ「“可能性”を見極める～ホークスのスカウト最前線～」を見た。３点ほど気になるところがあった。まず、投手が投球する際のリリースの角度として９２度と表現していたが、画像を見ると一般的なリリースの部分の映像ではなく、違和感があった。続いて、ドラフトで２番目に指名した選手の練習風景の映像の出典がソフトバンクホークスと記載されていたが、ドラフト前に接触があったのではないかと気になった。最後に、スカウトが選手の目の輝きが大切と発言していたが、スカウト自身が「やる気は人一倍あったが技術がなくプロを引退した」と発言していて、矛盾があるのではないかと感じた。今回の番組で取り上げた選手について、継続した取材を期待したい。

（ＮＨＫ側）

番組は、ソフトバンクに密着してスカウトのデータ分析と昔ながらのスカウトの目で選ぶという二つのポイントについて取り上げている。ご指摘いただいたリリース部分の説明と、練習風景の映像の出典については、内容を確認したうえで後日回答したい。また、選手の目の輝きについては、スカウトの担当者の思いということで、今後に期待をしていただきたい。

○　１１月２４日(金)「サトリポ～アジア留学生リポート～　ウズベキスタン」（総合　後11:00～11:25九州・沖縄ﾌﾞﾛｯｸ）を見た。大分県にある私立大学の学生が里帰りして、自分のふるさとを案内していくというもので、映像が美しく、旅番組として質の高いものになっていた。大分の大学の留学生がウズベキスタンとつながっているという実態を知ることができてよかった。

１１月２６日(日)のＮＨＫスペシャル「シリーズ“食の防衛線”主食コメ・忍び寄る危機」を見た。大規模な農家が経営に失敗して破産したという冒頭の内容にはインパクトがあった。担い手の減少について、大分県豊後大野市のスポットワーカーや特定技能外国人労働者に働いてもらっているという工夫の解説は分かりやすかったが、米の流通や価格の問題について、もう少し掘り下げてほしかった。また、流通の解決策として、有機米を小・中学校の給食用として市が買い取っているという事例はよかったが、その背景にあ

る事実などをもう少し説明してほしかった。さらに、スイスの所得補償の最後の結論づけについても、どのような経緯で国民の総意が得られたのか、もう少し詳細な説明が必要だと感じた。米の問題は５０分に収まらない重要なテーマでもあることから、３回シリーズくらいで伝えてほしいと思った。

○　１１月２６日(日)のＮＨＫスペシャル「シリーズ“食の防衛線”主食コメ・忍び寄る危機」を見た。働き手の高齢化に伴って米の自給率が危ぶまれていることについて、その経緯をひもとくような内容だったが、番組を視聴して自分の考えを持つには、もう少し掘り下げが必要だったように感じた。生産農家の方々の窮状を伝える事例は豊富だったが、背景の説明が不足していると感じた点があった。そもそも食糧法が施行された後、なぜここまで生産性が向上してこなかったのかなど、また別の番組でも知りたいと思った。非常に難しい背景のあるものを取り上げた番組で、考えさせられる点が多く、自分で調べていきたいと思うきっかけになった。改めてこの問題を取り上げた番組があれば、ぜひ視聴したい。

○　１２月２日(土)のＮＨＫスペシャル「龍がとぶ島　奄美」を見た。「この島には龍が出る」というナレーションと台風で荒れる海の映像の冒頭には引きつけられた。また、自然の脅威である台風が日常となっている島の人々のたくましさを感じた。「破壊は創生の準備」ということばが印象的で、台風によってもたらされる災害と恵みをさまざまな映像を通して知ることができた。プロサーファーであり素潜り漁師でもある碇山勇生さんの素潜りの漁のシーンは、ＮＨＫならではのカメラワークで迫力があった。一方で、奄美では龍が台風であると伝えられているということについては、本当に全島の人々がそのように話しているのか疑問に思った。田中泯さんのナレーションは淡々としていて深みがあり、番組に彩りを与えていた。今回の番組では、さまざまな台風を追っていて長期にわたる取材だったかと思うが、どのように撮影していたのか興味深く感じた。碇山さん以外の奄美の人々の暮らしについても掘り下げてもよかったと思うが、すべてにおいて見応えのあるすばらしい番組だった。

○　１２月７日(木)のＢＳスペシャル「特攻４０００人　生と死そして記憶」(　ＢＳ後 10:40～11:39) を見た。ＣＧが非常に分かりやすく、日本全国の特攻隊で亡くなった方々の本籍地を地図上にプロットするＣＧはとくに魅力的なデザインだった。１５年という長期間にわたって特攻の取材をしてきたというディレクターが、特別に閲覧を許可されたという江田島の術科学校の資料は非常に興味深かった。また、今だから可能になった解析によって米軍の記録や日本軍の記録を照らし合わせ、機体

に乗っていた人を特定したという研究者の話はおもしろかった。さらに、公文書の公開制度は民主主義を支える根幹と捉えているが、それらを後日きちんと公開するというアメリカの公文書館の制度には、改めて感銘を受けた。全体的に構成がよく、さまざまな伏線を最後に回収する流れが見事で、特攻特有のエモーショナルな雰囲気が理由なのか、数多くの登場人物も容易に把握することができた。ただ一方で、この番組は特攻についての事実を淡々と述べていたが、結論をどう受け取るかは視聴者に委ねられていることから、特攻に対して賛否どちらとも捉えられる番組になっている点については、危うさも感じた。戦後８０年を２年後に控える中、戦争を知る人の取材は今がラストチャンスとよく言われるが、一方で戦後５０年ぐらいではまだ生々しくて語れなかったということもある。その意味では、今だからこそできた検証による番組だと感じた。

○　１２月８日(金)の長崎スペシャル「ユクサキナガサキ　見つけたい私たちの未来」（総合 後 7:30～8:13 長崎県域）を見た。県内の大学生たちが「若者が暮らしたくなる長崎に変える」アイデアを生み出すことを目標に討論し、発表するという内容だった。ある学生たちが、広島への視察で謎解きまち歩きをしながら「謎解きに集中し過ぎると周囲をあまり見ないので、まち歩きという本来の目的ができない」と気付く場面があった。大学生のメンバーが、まちづくりやまちおこしに長く関わってきた大人と全く同じ気付きを得ていて驚いた。大学生の中には、長崎から離れようとは思っていないという人だけでなく、逆に長崎を早く出たいと言っている人もいて、実体験がある私自身の立場としては、地元を離れてふかんして見ることも大切なことだと感じた。最終的な発表の内容は、期待したような奇抜なアイデアではなかったが、協議をする機会があったこと自体に価値があったのだと思う。ただ、まちおこしで一番大切なのは自分たちが課題を発見することであり、その意味では大学生にお題を与えて解決策を考えてもらうのではなく、課題を発見させることに注力してもよかったのではないか。

○　１２月８日(金)プラスみやざき「離島で発見！　ラストファミリー宮崎・島民４人の島」を見た。島民４人、平均年齢７７歳の串間市の築島という島が、丹念な調査と文献資料の的確な提示によって紹介されていて、深みのある番組だった。江戸時代まで無人島だった島が昭和４８年には島民 114　人となった過程を、学校の校史や系図などを的確に示して伝えていて、島の発展の経緯がよく分かった。視聴者が新たな気付きを得られるような番組だと感じた。今また無人島になろうとしているこの島の行方を、今後も継続して取材してほしい。

○　１２月８日(金)のくまもとの風「よみがえる阿蘇の魂　～楼門復旧への７年～」を見た。震災を扱った番組は暗いものになりがちだが、震災によって得られるものもあるという前向きなテーマがよく伝わってきた。歴史的建造物は、いつの間にかあって当たり前のものとなっていて、なくなったときの喪失感によって初めて、自分の中で重要だったと見直す機会になるのだと感じた。また、身近な建造物が壊れて、それを修理する建設業界の人たちの姿を放送で伝えることで、人手不足の建設業界を志望する若者が増える効果もあるのではないかと思った。特に、宮大工の與那原幸信さんの若手技術者の育成方法は、若者にとっても魅力的なものではないかと感じた。７年間にわたって取材し続けたことは、ＮＨＫならではのすばらしい点であった。ところで、今回の放送では番組の途中で生放送に切り替わる演出になっていたが、その意図について教えていただきたい。

（ＮＨＫ側）

今回の番組は現存していなかった楼門の設計図を新たに制作したというエピソードや、昔の技術が今に引き継がれていく様子など、単に修復するだけではなく、未来へどうつなげていくかという形で描いた。生放送については、番組の演出上の関係で変化をつけるための工夫であった。

○　１２月１３日(水)のナンブンノイチ「（２）１００分の１のヒトって？　１年以上「育休」をとった男性」（Ｅテレ　後 7:55～8:00）を見た。昔と比べれば男性も育児休暇を取得しやすくなっているように思うが、この番組で紹介されている男性は１年取得したということで、夫婦の話し合いの様子や育児休暇取得の背景など、もっと詳しく知りたくなった。父親が子供と一生懸命に向き合っている姿がリアルで心を打たれ、共感できる子育てや家族の優しい風景が多く、心が温かくなる番組であった。一方で、地方で暮らす同じ境遇の方の実際の生活を取材すれば、視聴者はもっと身近に感じることができたのではないかと思った。このような番組を多くの人が視聴することで、育児休暇についての意識が変わっていってほしい。

○　最近「ニュース７」などの定時ニュースにおいて、ＡＩアナウンサーの活用が広がっている印象があるが、アナウンサーという仕事には、経験を積み重ねた技術が必要であると考えている。一つのテーマをじっくり聴くことができる「ラジオ深夜便」や、ひきこもり当事者の悩みを受け止めるアナウンサーの表情などが映像でもわかる「みんなでひきこもりラジオ」は、アナウンサーの技術の大切さが感じられ、これからの時代に求められる番組だと感じている。また、ＡＩの新技術を導入する

と、若い職員が経験を積む機会が奪われるのではないかという議論もある。ＮＨＫとして今後ＡＩの活用をどのように広げていくのか、計画があればお聞きしたい。

ＮＨＫ放送文化研究所の塩田雄大研究員「変わる日本語、それでも変わらない日本語　ＮＨＫ調査でわかった日本語のいま」を読んだ。放送文化研究所の活動はインターネットでも閲覧できるが、より多くの一般の視聴者が利用できるように展開する計画があれば伺いたい。

（ＮＨＫ側）

ＡＩの活用については、リソースに限りがあるというのが背景にあるが、在留外国人の方に向けて日本語のニュースを英語やポルトガル語など多言語でお届けすることができるというメリットもあるので、開発と研究を重ねていく。一方で、緊急報道などの対応についてはアナウンサーの技術と経験が不可欠である。生身の人間が経験を積み、専門性を高められるような機会を確保していくことを引き続き考えていきたい。

放送文化研究所は、一般の視聴者の方も研究内容が分かる月報などをホームページに掲載している。放送 100 年に向けて、文研のさまざまな知見を社会に還元できないか、可能性を探っている段階である。

さまざまなご意見を頂き感謝する。課題も含めていただいたご意見については制作現場とも共有し、番組の改善に役立てて、今後も期待に応えられるようにしていきたい。

（ＮＨＫ側）

県域放送の番組を含め、今回も貴重なご指摘やご意見を頂き感謝している。なお、制作現場への確認が必要なご意見については、次回以降の審議会の場で回答できたらと考えている。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２３年１１月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１６日（木)、ＮＨＫ福岡放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、令和５年地上基幹放送局の再免許にあたっての総務大臣の要請の紹介があり、議事に入った。

会議ではまず、事前に視聴した、いちおし！九州沖縄　プラスみやざき「ふるさとは遠きにありて ～私の中の“ミヤザキ”～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に１２月の番組編成の説明､視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	古荘　貴敏	（株式会社古荘本店代表取締役社長）
委　　員	いのうえちず	（株式会社 suikara　取締役）
	大館　真晴	（宮崎県立看護大学　教授）
	久保田　正廣	（西日本新聞社こどもタイムズ編集長　兼　特別論説委員）
	合原　万貴	（マルマタ林業株式会社　取締役）
	陳　優継	（株式会社 四海楼　代表取締役社長）
	増村　雅尚	（九州産業大学　人間科学部　スポーツ健康科学科　教授）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社５代目技術継承者　デザイナー）
	吉水　請子	（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜いちおし！九州沖縄
プラスみやざき「ふるさとは遠きにありて ～私の中の“ミヤザキ”～」
（総合　１０月２８日(土)放送）について＞

○　宮崎県人会がブラジルにあって活動しているということが驚きであり、新鮮でもあった。各地の県人会では、世代が重なるにつれて若者の参加者が少なくなってきていると聞いている。日系人社会の中で課題になっている高齢化や、若者が不足しているという問題について、番組内でもう少し触れられるとよかったのではないか。古賀ラリッサ由美さんのふるさとへの思いについてはよく分かったが、県人会の活動内容や、世界大会とはどんなものなのか、もう少し詳細を知りたかった。また、宮

崎県からの移民の場所や規模がどのようなものだったのか、ふかんするような情報がもう少しあると、宮崎の移民史も知ることができ、ラリッサさんの思いにも深みが出るように感じた。

○　歌で通じ合う祖母と孫の様子から、歌というものは世代を超えた縦のつながりを生むことを感じただけでなく、カラオケ大会によって同郷の人々とのつながりが形成されていたというエピソードからは、歌は人々の横のつながりも生んでいることを感じた。海外へ移民した方々が歌を通して交流し、故郷を思い起こして心の支えとしていることがよく分かった。黒木美佐子さんが「日向岬」を歌う場面では、実際の日向岬の風景のインサートがあった方が、故郷を思っているということがより分かりやすかったように思う。さらに、「日向岬」は水森かおりさんが２０２３年に発表したばかりの歌であって、日本語の歌であるという点よりも、黒木さんが最新の宮崎の歌まで追い求めていることを強調した方が、望郷の気持ちが伝わったのではないか。また、県人会は助け合いの精神があったという説明の中で、保証人の紹介や、日本語の読み書きの教育機関としての役割など、公としての県人会の機能について紹介があったが、もう少し詳しく知りたかった。

○　番組全体としてはよくまとまってはいるが、やや小さくまとまっているという印象であった。宮崎からの移民はほかの県からの移民とどのような点が違うのか、ブラジルへ移住するにあたって、宮崎からの移民ならではの苦労があったのかということについての紹介があった方が、宮崎県以外の人にとっては番組を理解しやすかったのではないか。また、取材対象が話しやすいことを絶えず聞いているという印象を受けた。あえて本人が答えたくないようなことを聞いて、言葉の裏側にある本音や、思いもよらない表情や声を引き出すことができれば、番組により深みが出たのではないか。さらに、事前の番組案内の中で、「地球の裏側」という表現があったが、「地球の反対側」が妥当な表現ではないかと感じた。一方、この番組で印象に残ったのは黒木ニコラス成人さんのカラオケのシーンである。演歌のこぶしを習得することで、日本との、そして宮崎とのつながりを体感しているように感じた。

○　番組タイトルは「ふるさとは遠きにありて思ふもの…」という、室生犀星の言葉から引用されたものかと思いながら視聴した。事前の番組案内では、世代間の関係性が希薄になっているということだった。ただ、古賀ラリッサ由美さんや黒木ニコラス成人さんの祖母との会話の様子からはそのことがあまり感じられず、関係性が希薄となっている部分はどこなのかが見えてこなかった。宮崎局のキャンペーンの中で作られた番組ということだが、番組単体として見ると、県人会の説明が冒頭にあった方がよかったように思う。ラリッサさんが留学時にお世話になった方のコメント

はあったが、ラリッサさん本人が留学当時、どのような思いを持っていたのかについても知りたかった。また、黒木慧さんが移住先のブラジルでどのような苦労をして生計を立てていたのか、より詳細な情報を知りたかった。今後も引き続き、ラリッサさんの活動や宮崎とブラジルのつながりを伝えていってほしい。

○　この番組はサンバのようなＢＧＭで、「次世代につなげる」というテーマで明るく作られている印象を受けた。故郷のルーツを探しに行く際、自分が何を求めて行くのかわからないときは、古賀ラリッサ由美さんと同様に、先祖のお墓参りをするものであるが、今後はそのお墓をどのように守っていくのかという新たなテーマもあるように感じた。独立して家計を助けたいということで、ブラジルに行かれた黒木慧さんの話からは、いわゆる口減らしのために海外に出て行かざるを得なかったという事情は、世界のどこでもあったことなのだと感じた。黒木美佐子さんの２５年前の映像が残っていたことは、長く地域の取材を続けてきたＮＨＫだからこそできたのだと感じた。この番組で取材された家族や地域の人々にとっては、歌というものがよりどころであったのだと思うが、もっとさまざまな家族のよりどころを探っていくと、より広がりが感じられたのではないか。また、事前の番組案内には世代間のつながりが希薄になっているという言葉があったが、今回取材された２つの家族の２世、３世は日本語が堪能で、つながりが希薄になっている部分は感じられなかった。日本語が話せない家族や、あまりルーツというものを意識していない家族など、さまざまな家族を取材すると、比較対象としての明暗が出てくるのではないか。

○　宮崎県人会の映像から始まり、県人会の様子を伝える番組かと思ったが、実際の内容はその印象とは異なり、少し分かりにくかった。番組の最後では、黒木慧さん夫妻のブラジル移民が失敗だったのかという点をもう少し掘り下げてほしかった。移住先が農業に適さない難しい土地であったことなどの解説があれば、移民が不幸であったというだけの印象にはならなかったのではないか。また、タイトルからは、宮崎にルーツを持つ世界各地の方が県人会で集まることで、何らかの化学反応が起きるようなシーンが見られると想像し、海外の視聴者が宮崎県を誇りに思うことができるような番組と期待して視聴していた。そういった点をもう少し強く打ち出せるとよかったのではないか。

○　番組全体にまとまりがあり、出演されている方々の思いが伝わってきて、とても丁寧に取材をされていると感じた。一方で、県人会がどういうものなのかや、宮崎県人会独自の特徴について、概要の紹介があればよかったのではないかと感じた。また、世界大会の様子や結果についても触れられているとよかったのではないか。

○　この番組が宮崎をテーマにしているものということに全く気づかず、あくまでルーツという普遍的なテーマと捉えて最後まで視聴した。同じルーツの下に集まり、協力し、励まし合うことで、困難を乗り越えてきた世代のふるさとへの思いが、実際にそれを知らない若い世代にどう伝わっていくか、その様子に心が動かされた。ルーツは「探す」という言葉とともに使われることが多いが、「伝える」ものという側面があることに気づかされた。古賀ラリッサ由美さんの宮崎への思いというのは、祖母への思いそのものであり、その切実さが胸に迫ってきた。また、黒木美佐子さんの「日向岬」の歌の場面で、２５年前の映像が重なる部分では、時を経ても変わらぬふるさとへの思いが画面からあふれていた。黒木さんが歌を通してふるさとの風景を次世代に伝えようとしていることを、取材側がよく感じ取って編集しているように感じた。日頃ルーツに向き合うことのない自分にとって、ふるさとというものについて考えるよい機会を与えてくれた番組であった。

○　宮崎県からのブラジル移民の方々の生活について知ることはできたが、全体的に抑揚がなく、盛り上がりに欠ける印象であった。当時の移民政策について、ＮＨＫならではの取材によってもっと掘り下げてもよかったのではないか。また、世界大会の実際の様子の映像がなかったが、その後の取材はしているのか気になった。

○　世界大会に向かう前のシーンから始まり、最後は世界大会当日の映像を期待していたが、大会前で終わっていたので、もの足りなさを感じた。日本から南米へ移民した当時の人々に焦点を置く番組が多かったように思うが、今回は移民した日系３世の視点を中心に描かれており、異なる角度から描かれていることはよかった。ブラジルへ移民として渡った人々の孫として祖父母から宮崎の話を聞き育った３世の方々のエピソードからは、宮崎への思いも家族によってそれぞれなのだと興味深く感じた。古賀ラリッサ由美さんの祖母への愛と、ルーツである宮崎へ実際に訪れたことで宮崎とブラジル県人会との架け橋でありたいという思いが、番組を通してよく伝わってきた。県人会の存在は、当時の移民の人々の心の支えになっていたと感じた一方で、７０年以上歴史ある宮崎県人会にどのぐらいの人々がいて、今はどう変化しているのかなど、県人会についてもう少し説明があれば、番組がより深いものになったのではと感じた。世界大会での様子やその後が気になったが、続編として伝える予定はあるのか。世界中にいる日本にルーツのある日系の人々についてフォーカスした番組を今後も期待している。

（ＮＨＫ側）

放送が県人会世界大会の開催前であったため、もの足りなさはあったかと思う。また、ヒューマンドラマの要素が多くなってし

まい、県人会そのものの情報が不足していたこともご指摘の通りである。担当ディレクターはこの番組の撮影後、県人会の世界大会の本番や、古賀ラリッサ由美さんの宮崎での様子についても取材しており、「国際報道２０２３」の中で短いリポートとして放送した。この番組をきっかけに、日本とブラジルとのつながりなどさまざまなテーマが発見されたこともあり、番組化を見据えて引き続き取材していきたい。

（ＮＨＫ側）

さまざまな面から意見を頂き、番組を制作する意義を強く感じた。虫の目で取材した素材を、鳥の目でどのようにふかんしてまとめていくのかについては、工夫の余地があったように思う。宮崎県のみなさんに向けては、夕方のニュース等を通じて県人会の取り組みを多角的に放送しているが、この番組単体を見る視聴者に向けては、全体をふかんした説明をもう少し丁寧に行う必要があったと感じた。「地球の裏側」という表現については、ご指摘いただいた通り気になるところでもあり、コメント選びについては注意をしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１０月２０日(金)の「ロクいち！福岡」枠内の企画コーナー「追跡！バリサーチ」を見た。「おみくじは誰が書いている？」というテーマを粘り強く取材していて、おもしろかった。ふだん何気なく感じている疑問を追究していく中で取材過程をオープンにしていて、視聴者を引きつけるようなおもしろい構成であった。今後も注目していきたい。

１０月２２日(日)の衆議院議員長崎４区補欠選挙は、同日の参議院議員徳島高知選挙区補欠選挙とともに注目された選挙だったが、長崎局の当選確実の発表が非常に早く感心した。どのようなアプローチで当選確実の発表に至ったのか、教えてほしい。

１１月５日(日)のＮＨＫスペシャル「調査報道・新世紀　Ｆｉｌｅ１　中国“経済失速”の真実」を見た。調査報道の中でも、特別な技術がなくとも入手できる情報を組み合わせて、隠されているものを暴くという手法で、このシリーズにはたいへん期待している。ただ、初回の結論については、ほかのメディアがほかの手法で書いていることと、かなり重複している部分があると感じた。最先端の手法からどのような結論を導き出すのか、今後の調査報道に期待したい。

１１月６日(月)のＮＨＫニュース　おはよう日本を見た。福岡局の姫野美南アナウンサーが見事に朝５時台の代行キャスターを務めていた。

１１月１５日(水)のクローズアップ現代「職場の死をなくすには～働き方改革の“ひずみ”～」を見た。過労死等防止啓発月間ということで、記者の佐戸未和さんのことを再度フォローアップしており、過労死の問題をＮＨＫとして風化させないということを強く感じさせる内容で好感が持てた。

（ＮＨＫ側）

長崎局で選挙を担当したデスクは情勢を的確に読み、過去のデータの蓄積から論理的な積み上げによって当選確実を発表した。

（ＮＨＫ側）

姫野アナウンサーは現在隔週で出演している「ロクいち！福岡」で、一橋忠之アナウンサーからキャスターワークを学びながら、取材や制作にも取り組み、研修に参加するなどスキルの向上に努めている。評価いただいたことはそうした努力の積み重ねだと思っている。

○　１０月２０日(金)ザ・ライフ「いまも夢のまま　１５年目の笹井宏之」を見た。佐賀県有田町出身で、１５年前若くして亡くなった短歌歌人の笹井宏之さんの人となりと短歌の魅力を伝えた内容で、番組を見て初めてその存在を知ったが、笹井さんの空気感と優しさが感じられた番組であった。笹井さんの友人の思い出と短歌から静かに始まる冒頭は、友人をナレーションとして起用したこともあり、その思いが確かに視聴者に伝わる、引きつけられるものであった。高校生から病と隣り合わせで、家で過ごしていた笹井さん。登場する人それぞれの思い出と短歌、笹井さんの素顔が織り込まれた番組の構成が非常によかった。友人と携帯上で交わした短歌のやりとりを文字で会話をするように表現している点や、途中で差し込まれる映像と短歌、音のない間にも工夫があり、番組自体が歌集のように感じられた。制作担当者が、笹井宏之さんのことを深く理解しているからこそできた編集だったと思う。笹井さんが亡くなってから、お父さんが短歌を発信し続けていることや、短歌が紹介されるときの効果音がお父様の椀琴（わんきん）の音色だったという演出もすばらしかった。多くの人々を魅了し、その心を支えていた笹井さんの短歌に、改めて言葉の力を感じたとともに、優しい気持ちになれた番組であった。

○　１０月２１日(土)のＮＨＫスペシャル「超・人手不足時代　～危機を乗り越えるには～」と、１１月５日(日)に同じタイトルで放送された日曜討論を見た。連動して

放送された２つの番組で、経営者にとっては非常に勉強になる内容だと感じた。現在企業の経営においてさまざまな課題がある中で、働き手不足は最大の課題と捉えているが、この番組ではそのことについてよくまとめられていた。メインコメンテーターとして、過去いくつもの企業再生をてがけてきた冨山和彦さんをキャスティングした点も評価したい。実践に基づいた理論から、問題提起だけでなく提言までする冨山さんを中心に据えたことで、現実的なディスカッションを可能にしていたと感じた。日本政府は経営力がない会社が倒産するのを止めるべきではなく、よい人材がよい会社に移っていくことが重要だという冨山さんの発言から、経営者としては選ばれる会社にならなければならないと改めて思い知らされた。企業経営にとって重要な部分を捉えた二つの番組は、日本経済にとっても重要な提言をもたらしたのではないか。

１０月３０日(月)のクローズアップ現代「遅すぎた“救済”はなぜ　袴田再審・知られざる内幕」を見た。検察の裏側に迫るという、挑戦的ですばらしい番組であった。

○　１１月７日(火)の世界サブカルチャー史　欲望の系譜「スピンオフ　思考のオルタナティブ　無と向き合う世界観　モリス・バーマン」を見た。無というものを表現した映像や、社会批評家モリス・バーマンの語りに引き込まれた。アメリカをはじめとした海外から、無というものが日本特有の思考として着目されている点を突いた、おもしろい番組であった。禅を利用して戦争や利潤を得ていたというエピソードには驚いたが、その根拠となる資料も示してもらえればとも感じた。

○　１１月１０日(金)の「強いられた沈黙～発掘　米軍犯罪記録～」（総合 後 7:30～8:18 沖縄県域）を見た。ぜひ全国放送で取り上げてほしい番組だと感じた。復帰前の琉球政府の法務局に勤務していた方が残した米軍犯罪の膨大な記録を基に、どこでどのような犯罪が起きたかということを分かりやすく可視化していた。本土から移転してきた、主に海兵隊の基地の増加と犯罪の数の増加がリンクしていることなど、事実関係の積み上げが綿密になされている点には好感が持てた。戦後まもなく、県民の人権が保証されていない状態から改善してきたものの、現在も地位協定の壁はあるということまで描かれている点もよかった。ナレーションの宮城さつきさんは声のトーンが落ち着いていて、ＳＥやＢＧＭなど全体的な音声の演出についても好感が持てた。予算や要員に限りがある中で、この番組は沖縄問題を取り上げたすばらしいドキュメンタリーであり、ＮＨＫの良心を感じた。

○　１１月１０日(金)のぶんぶん探検隊「＃３　杵築市・護江小学校区でお宝発掘！」を見た。水産会社の跡継ぎの方について、番組に出演することで地元の大分県内の

人がその存在を知るのはよいことだと感じた。老舗旅館のお宝として出てきた鼓については、学芸員の方による解説があり分かりやすかった。また、番組に出てくるおけまるは魅力的なキャラクターであり、もっと存在感を出してほしい。９月２３日(土)のぶんぶん探検隊　ミニ　＃２「大分・玖珠町編」(総合　後0:40～0:42　大分県域) では、小学生が案内していくという演出が分かりやすかったことから、最初に小学校を訪ねるなど、もっと小学生を出演させてもよかったのではないか。

○　　１１月１０日(金)の長崎スペシャル「こども放送合唱団“わかば唱歌隊”～平和をつなぐ歌声～」を見た。残されていた資料から過去をひもといていく番組の構成はなじみ深いものであるが、ＮＨＫ長崎放送局には資料が全く存在していなかったという、わかば唱歌隊の１枚の写真から番組が始まっている点は興味深かった。音楽教師の岡山直さんの、音楽を介して平和な世の中をつくることができる、教育は技術ではなく信念であるという言葉が印象に残った。岡山先生の娘である荻原晶子さんが、記録の残っていないわかば唱歌隊の歌を、思い出を頼りに譜面を作って復活させ、当時と同じ場所で現在のＮＨＫ長崎児童合唱団が歌うという最後の場面は、非常に印象深かった。

○　　１１月１０日(金)のＹスペ！「関門橋５０年　探検！知られざる世界」(総合　後7:30～7:55　北九州・筑豊地方) を見た。関門橋の建設で使われた高度な技術や人々の情熱など、さまざまな角度から取材された充実した内容で、期待以上の番組だった。土木というジャンルの職業紹介として、子どもたちの教育に生かすような機会があれば、若い世代とＮＨＫとの出会いとなる可能性があるのではないかと感じた。冒頭の橋の案内を、企業側の広報担当者ではなく技術職の女性がしていて、多様性に配慮されたキャスティングだと感じた。企業側による配役なのか、ＮＨＫとしての演出だったのかが気になった。一方で、関門橋５０周年にあたり、なぜこの橋が作られたのか、橋の建設によってどんな変化がもたらされたのかという点については、もう少し説明があった方がよかったように感じた。北九州の視点から山口放送局の番組を見ることで、改めて関門エリアの結びつきの強さについて考えてみるきっかけとなった。

○　　１１月１０日(金)の「はなしちゃお！　～性と生の学問～　２０２３年秋号(１)」を見た。これまでテレビで見たことのなかったテーマで、性を学問として考えてみるという、おもしろく、意義のある番組であった。学問といっても堅苦しさはなく、気軽に性について話をしていて、さまざまな工夫を感じた。これまでの番組をすべて見返したくなったが、番組のサイト内に、過去作品ごとに短くまとめた動画が掲載されていてよかった。毎週は難しいかもしれないが、これからもこのような番組

の制作や、再放送の機会が増えることを期待している。

○　１１月１４日(火)のてげビビ！を見た。新県民体育館で、施工不良により観客席の壁からくぎが出ていたことが原因で、小学生がけがをしたというニュースがあった。小さな出来事かもしれないが事故に警鐘を鳴らすきめ細やかなニュースであり、非常に感銘を受けた。宮崎県では現在、２０２７年の国民スポーツ大会に向けてさまざまな設備が急ピッチで整えられているが、延岡市の新県民体育館の天井部分が落下して人に当たるトラブルなど、事件が立て続けに起きている。プロ野球のキャンプなど華やかなニュースが多くある中で、今後もこのような県民に注意喚起をするニュースを丁寧に行っていただきたい。

（ＮＨＫ側）

さまざまな角度から番組に関する意見を頂き、たいへん参考になった。視聴者のみなさまと対話をしながら番組を制作することを心がけてきたが、いただいた意見には多くの気づきがあった。制作担当者たちにも伝え、今後の番組制作に生かしていきたい。

（ＮＨＫ側）

月に１回、金曜夜７時３０分から放送している各地域局制作の番組に多く言及していただき感謝する。地域の課題を地域局で取材し、地域に伝えることに対する委員の皆様の期待を感じた。今後もその期待に応えられるよう、よりよい番組づくりを進めていきたい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２３年１０月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１９日（木)、ＮＨＫ福岡放送局において、８人の委員が出席して開かれた。
会議ではまず、事前に視聴した、「ドキュメント２０ｍｉｎ．おばあちゃんはアナウンサー」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。
最後に１１月の番組編成の説明､視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	古荘　貴敏	（株式会社古荘本店代表取締役社長）
副委員長	西野　友季子	（株式会社ニュー西野ビル代表取締役）
委　　員	大館　真晴	（宮崎県立看護大学　教授）
	久保田　正廣	（西日本新聞社　こどもタイムズ編集長　兼　論説委員）
	合原　万貴	（マルマタ林業株式会社　取締役）
	陳　優継	（株式会社 四海楼　代表取締役社長）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社５代目技術継承者　デザイナー）
	吉水　請子	（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜「ドキュメント２０ｍｉｎ．おばあちゃんはアナウンサー」
（総合　１０月２日(月)放送）について＞

○　明るく、少々のことにこだわらないおばあちゃんたちの姿に元気をもらえる番組であった。出演している女子アナの皆さんは、それぞれが際立った個性の持ち主であり、画面から彼女たちの自己肯定感やタレント性がよく伝わってきた。全体としてはおもしろく視聴したが、なぜこのテレビ局をテーマにしたのか、番組を通して一番伝えたかったのは何かといったことについては、よく分からなかった。実際のところ、テーマが地域振興や新しいスタイルの地域発信、世代交流など、どこに行き着くのだろうと思って見ていたが、最終的に最も強く印象に残ったのは「おばあちゃんたちがおもしろい」という結果となり、少しもの足りなく感じた。高齢者の出演する情報エンターテインメント番組を視聴した地域の人がどう感じ、何を得ているのかという視点を取り入れて、制作者側が本当に心を動かされたものとは何なのかについて焦点を絞ると、もっと影響力のある番組になったのではないか。

○　最初はなかなか全体をつかみきれなかったが、ドキュメント２０ｍｉｎ．のコンセプトが「新しいテレビの形を模索する」であることを念頭に置いて視聴すると、若者が動画を見るような感覚で、気軽な気持ちで見られる番組を目指しているように感じた。ただ、予告や題名のインパクトが非常に大きかったために、雑然とした印象を受けた。おもしろく、引き付けられる素材や内容で、もっとシンプルな構成でもよかったように感じたが、２０分という短い時間の中で、新しい形のドキュメントを実現するのは難しかったのではないかとも感じた。番組の目的が地域の紹介なのか、世代間交流を促すことなのか不明瞭ではあったが、気軽に、リラックスして見ることができる番組であった。

○　ショッキングピンクの衣装を着ているアナウンサーのおばあちゃんたちが映し出される冒頭の画面は非常にインパクトがあり、引き込まれた。独自のアドリブ感でおばあちゃんたちがリポートする姿はほほえましく、ゆったりとした気持ちで番組を見ることができた。ただ、取り上げられているテレビ局の社長である金子寛昭さんから、天草という土地の魅力を発信したいというコメントがあったが、この番組からはあまり魅力が感じられなかった。一方で、地方では高齢化や人口流出といった問題が特に大きい中で、このテレビ局がそうした弱みや課題をおもしろさにして発信していることは興味深く感じた。テレビ局の番組としての演出なのか、ＮＨＫの番組としての演出なのか分かりづらい部分もあったが、動画配信サイトを模したボタンの演出や、画面でのテロップの使い方など分かりやすく工夫されていた。また、視聴者目線のナレーションについても番組に合っていた

○　ゆったりと穏やかに視聴できる番組であった。お年寄りが出演する民放のバラエティー番組では、独特の間や反応のずれ などを笑っているようなイメージがあるが、この番組では、年齢を重ねたおばあちゃんから出てくる言葉や思いを穏やかに感じられる点がよかった。２０分という時間の限りのある中で、歴代のアナウンサーの方々を数多く紹介していて、少し雑多な印象を受けた。社長一人で運営しているこのテレビ局が今後どうなっていくのかを掘り下げて、事業の継続性に関するメッセージ性のある考えを提示するような番組も制作できそうに感じるなど、今後の展開が期待できる取材であった。

○　ネット世代にも見やすい番組であると感じた。テロップのタイミングがよく考えられていて、動画を見るような感覚でゆっくり見ることができた。このテレビ局の演出なのか、ＮＨＫとしての演出なのかが、少し分かりにくく、制作側の視点が見えにくいと感じた。新人のクロちゃんが女子アナウンサーになる前、みかん畑にさ

さげた人生についての語りは感動的でよかった。ただ、このテレビ局を知ってほしいということであれば、もっと多くの情報を紹介してほしかった。ところで、このテレビ局の番組は動画配信サイトで多く再生されているようだが、収益化はしているのか。

（ＮＨＫ側）

まだ収益化はしていないと聞いている。

○　ＮＨＫが新しいことをする、突き抜けたものをつくるということについては成功しているように感じたが、テレビ局そのもの、新人アナウンサーのおばあちゃん、歴代のアナウンサーなど、取り上げられているものが多く、番組の狙いやターゲットについて、やや散漫な印象を受けた。おばあちゃんアナウンサーのクロちゃんの「本当は大学に行きたかったが、さまざまな事情から泣きながらみかん畑で働いて、最後はそれが好きになった」という言葉がとても印象に残った。いまの８０代の方々は夢や希望があっても、さまざまな事情から家業を継ぐなどして、 人生を歩んできた人が多い。普遍性があり、同世代の多くの人が共感するエピソードだと感じたことから、これについて掘り下げて、「新人アナウンサーの人生８０年」というテーマで、人間ドラマとして成り立たせることもできたのではないか。あるいは、天草のようなある意味閉ざされたところで、インターネットテレビ局というものがどういうふうに地域に受け入れられて、どんなニーズを満たしているのかというところを、もう少し掘り下げてもよかったのではないかと感じた。ＮＨＫ熊本放送局がこのテレビ局の皆さんを定点観測的に追うことで、天草、そして地方の抱えている問題を継続的に取材していくという新しい番組として挑戦していけば、今後につながっていくのではないか。

○　さまざまな人との交流を通して生きがいを感じ、明るく生き生きしているおばあちゃんたちの姿に力をもらえる、本当によい番組だった。４３歳の時に東京からＵターンしたというこのテレビ局の社長は、設立時の２００１年から初代女子アナウンサーに８２歳の女性を起用して、同じような形式で２２年間もずっと番組を放送してきたことを知り、長く続けてきた活動が地域にどのような影響を及ぼしていて、どうやって活気を生み出しているのかということが知りたくなった。見ている中で知りたいことや疑問が次から次へと湧いてくる番組であったことから、少しでもそれらを解決する場面があるとよかったのではないかと思った。

○　高齢化が進むことが、あたかも悪いニュースのように取り上げられている。そのような中で、高齢の方たちの社会貢献への意欲や、若い子どもたちと触れ合うこと

が、子どもたちにとってもプラスであることなど、年を取るということは、実はこんなによいことなのだというメッセージを感じられる番組を放送することは、とても意味のあることだと感じた。いずれ、８０歳の人でも精力的にさまざまな仕事をする時代になっていくと思われる中で、高齢者の方たちに何ができるかということは、テーマとしてもおもしろいと感じた。最後に、このテレビ局の経営はどのように持続しているのか、分かる範囲で教えてほしい。

○　超高齢化社会を先取りするかのような発想とコミカルなタッチで、軽快な笑いをベースにした楽しい番組であった。おばあちゃんアナウンサーの活躍ぶりには、笑いあり、驚きあり、人生のドラマあり、新発見の企画力と実践力には、驚きの連続だった。おばあちゃんが引き寄せる自然発生の笑いが次々と起こって、自然と引き込まれていった。さらには、社長の人柄や編集力、企画力が番組に反映されて、地元の人たちの魅力や地方の魅力を上手く引き出していたように感じた。「天草は何もないところではない」という言葉に強いものを感じた。高齢者の社会進出や参加を促す紙芝居企画は、やりがいのある仕事作りや子どもたちとの交流事業として他の地域でも参考になるすばらしい取り組みだと感じた。やりがいのある仕事を引き出し、求められることで人は若返る力を秘めていることを再認識させてくれるよい番組であった。

○　取り上げた素材についてはおもしろく感じたが、ナレーションはなくてもよかったのではないかと感じた。個人の感想や独り言のようで内容が浅く、本来自由であるべき「見る側の感覚」を勝手にまとめられ、思考を阻害されているような気持ちになった。番組の流れを作る手法はナレーションだけではないと考える。今後の工夫に期待したい。クロちゃんのひとり語りの部分はよかったが、それはクロちゃんの人生を垣間見ることで、番組に奥行きが出たからではないだろうか。社長の金子寛昭さんの活動に対するモチベーションや、設立からどのようにマネタイズしてきたか、インターネットで動画を配信するビジネスモデルを早くから地方で展開していたことなど、単に「おばあちゃんが女子アナをしている面白いローカルチャンネル」だけではない奥行きがあると、ドキュメンタリーとしてもっと深く楽しめたのではないかと思う。このテレビ局の全体像がよく見えず、おばあちゃんが出演しない他の番組の雰囲気や、動画投稿サイトが存在する以前からの歩みのようなものがなかったのは残念であった。

（ＮＨＫ側）

おばあちゃんたちの魅力が伝わっていたことをうれしく思う。おばあちゃんアナウンサーという素材はよかったが、構成につい

ては散漫な印象があったという意見については率直に受け止めたい。何を一番伝えたかったのかということについては、力点をどこか一つに置けばよかったかもしれないが、今回の構成はある種のＮＨＫの番組にありがちな、先が見えてしまう構成に対する挑戦でもあった。次に続編をつくるときは、頂いた意見を参考に改善できるよう努力したい。

（ＮＨＫ側）

現在、このテレビ局には約 2,560 人の会員がいて、会員からの年会費と、ホームページの広告費、副業の収入などで運営している。おばあちゃんアナウンサーたちは全員ボランティアである。メッセージが不明瞭であったという意見を頂いたが、おばあちゃんの第１の人生、第２の人生がしっかり描けておらず、第３の新天地で明るく活躍しているというおもしろさが伝わらなかったように思う。新たな挑戦をした番組だったと考えているが、頂いた意見を受け止め、引き続き地域の取材を続けていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　９月２８日(木)のゾンターク～おどりのほし～を見た。最後のダンスの部分については、ダンスを学ぶ番組として、足元まで映したほうがよいと感じた。

１０月６日(金)のザ・ライフ「街の余白　福岡　移り変わる２０２３」を見た。再開発は長らく営まれてきた人の集合体をばらばらにする可能性を多く含んでいることを感じた。「街の余白」というタイトルがすばらしく、街から余白がなくなっていくことに対する郷愁を感じた。余白についてどう考えているのか、開発している側へのインタビューがあるとよりおもしろかったのではないかと思った。

９月２３日(土)の「日本人は農なき国を望むのか～農民作家・山下惣一の生涯～」（総合 前 6:10～6:53）を見た。生物多様性という考えを取り入れた、環境に優しい持続可能な農業についての山下惣一さんの主張が、彼の生涯を通して明確に捉えられていた。山下さんの発言が、政策やほかの農家にどのぐらい影響を与えたのかということについて知りたかった。このような番組は、さまざまな課題がある中で１次産業に従事している若い世代の人を勇気づけられるのではないかと思った。

○　９月２９日(金)ザ・ライフ「辺野古　沖縄敗訴の波紋　～この国の地方自治は～」を見た。タイムリーな話題を扱って生放送したことを評価したい。沖縄の米軍基地

をめぐる問題について、海外に視点を広げていて学ぶ点が多かった。東京工業大学教授の川名晋史さんの解説によって、イメージが変わった視聴者も多かったのではないか。

ＮＥＷＳ ＷＥＢ熊本で、人吉の災害公営住宅の建設をめぐるニュースを読んだ。県外に住んでいるとなかなか知ることが難しいニュースでも、コンパクトで分かりやすい活字のコンテンツを発信していることはすばらしい。地域放送局の記者が、地元で関心の高いニュースを的確に発信していることを評価したい。

９月１８日(月)の「ドキュメント記者会見」（総合 後 6:05～6:34）を見た。最近はインターネットで記者会見全体を配信することがあるため、その場の記者や主催者側の発言が、インターネットで第２、第３の反響を呼ぶことがある。以前は一方的に取材対象に迫る場だった記者会見という場の変化に注目して、記者会見そのものをドキュメントとして取り上げるという着眼点は、非常におもしろかった。ただ、会見の主催側として取り上げられたジャーナリストの安田純平さんが、この番組の制作にあたってＮＨＫに取材されていないことについて問題提起していた。番組の趣旨は質問をした記者の側を取り上げることにあって、あえて取材しなかったという意図を番組の中で説明していれば、そのような指摘はなかったのではないか。

９月２３日(土)の「日本人は農なき国を望むのか～農民作家・山下惣一の生涯～」を見た。ＮＨＫならではの番組だと感じたが、山下惣一さんが亡くなってから１年以上がたっており、もっと早い時期に放送することができなかったのかとも思った。

９月２３日(土)のレギュラー番組への道「危険なささやき」を見た。元信者の話や裁判の資料等から制作された、統一教会の信者の集め方についての再現ドラマだった。ただ、当初のタイトルの「悪魔のささやき」について、名誉棄損に当たるとして平和家庭連合から抗議があったと知り、「悪魔」ということばは避けるべきだったと感じた。どのような経緯でタイトルの変更があったのか教えていただきたい。

９月２４日(日)のＮＨＫスペシャル「“冤（えん）罪”の深相～警視庁公安部で何が～」（総合 後 9:00～9:54）を見た。警視庁公安部によるえん罪事件の経緯について、見事に分かりやすく伝えていた。ただ、この事件については検察庁が関わっているはずであり、当時の検察庁の考えについても取材していればさらによかったのではないかと思った。司法手続きの観点では、検察の対応について疑問が残っていることから、今後の取材や続編の放送にも期待したい。

１０月１７日(火)の「松本人志と世界ＬＯＶＥジャーナル」（総合 後 11:00～11:45）を見た。このような番組をＮＨＫが制作することは若い世代に求められているのだと感じており、今後の続編に注目したい。鈴木奈穂子アナウンサーは言葉遣いや司会のタイミングが非常に的確で、彼女をキャンスティングしたことを評価したい。一方で、松本人志さんの出演については、話題性はあったものの、いまひと

つ個性が生かされていない印象だった。続編ではぜひ、新しい側面を引き出してほしい。

（ＮＨＫ側）

レギュラー番組への道の「悪魔のささやき」から「危険なささやき」へのタイトル変更は、制作部局の総合的な判断によるものだと聞いている。

○　１０月６日(金)の「かごスピ　響け！僕らのハーモニー」を見た。部員８名の小さな合唱部に密着した番組で、ＮＨＫ合唱コンクールに向けて取り組む生徒たちの姿から、彼らのよい関係性が伝わってきた。コンクールを終えた生徒たちの表情がすがすがしく、高校生の成長や変化を番組の中で感じることができた。８人それぞれの個性がテロップで表現される演出はわかりやすく、鹿児島出身の上白石萌歌さんの語りも番組と合っていてよかった。ただ、多くの合唱部がＮコンに参加した中で、この高校を取り上げた理由については少し気になった。

１０月１日(日)放送のＤｅａｒにっぽん「会社員フォーエバー～新宿高層ビルのど自慢大会～」を見た。あるビル内の会社対抗ののど自慢大会を取り上げていて、ほほえましく、引き込まれる番組だった。番組の中で取り上げられた３人の参加者のエピソードからは、個人主義の人が増えていること、コロナ禍においてリアルなコミュニケーションが難しいことなど、今の社会の現状がよく表れていて興味深かった。コロナ禍をきっかけに働き方や考え方、コミュニケーションの形も変わってきている今日、社会や組織の中における人とのつながりというテーマが印象的な番組であった。

（ＮＨＫ側）

「かごスピ」でこの高校の合唱部を取り上げることにした理由は、ここ数年Ｎコンに出場していなかった高校であるということと、ほかにもいくつかの出場校を取材したうえで、ディレクターが一番魅力的に感じた高校であったからである。

○　１０月６日（金）の長崎セレクト９０「きょうの料理　大村ずし・長崎くんち料理」は、くんち料理と大村ずしを取り上げた、昭和５７年と昭和６０年の「きょうの料理」のアンコール放送であった。特に大村ずしはほとんど料理の様子を映しているのみのシンプルな映像で、さまざまなテロップを使っている現在の料理番組の演出は、視聴者が料理の再現をしやすいよう進化しているのだと感じた。長崎くんちの料理は、町内の人たちが集まって作るという慣習を後世に残そうとする取り組

みを追加で取材されていて、時代の流れがよく表されていた。

１０月１３日(金)の長崎スペシャル「長崎くんち２０２３　～十年の思いを乗せて～」（総合 後 7:30～8:42／長崎県域）を見た。４年ぶりに開催された長崎くんちについて、地元局である長崎放送局が力を入れて放送したことはすばらしいことだと感じた。今、長崎放送局は開局９０周年で、「ｇｏ　これからも長崎と」というキャッチコピーを使っている。今昔の比較だけにとどまらず、学びや気づきにつながるような、アーカイブを使った演出方法を開発してほしい。

ラグビーワールドカップ 2023 の中継や関連番組を多く視聴している。「情熱ラグビー」は１０分という短い時間の番組で、放送ですべて見ることは難しかったが、ＮＨＫプラスでシリーズを連続して視聴することができた。

○　１０月６日(金)のドキュメント７２時間「島根・黄泉比良坂　あの世との境界で」を見た。島根県松江市の黄泉比良坂で取材されていて、丁寧なインタビューがすばらしかった。さまざまな経緯で訪れた人たちの中で、身近な人の死という話題についても丁寧に聞き取っていて、優れた取材力を感じた。偶然会った人から話を聞いて、今という時代を切り取るということが趣旨の番組であるが、長い間人の奥底にあって変わらないものを感じることができた。

○　１０月６日(金)のザ・ライフ「街の余白　福岡　移り変わる２０２３」を見た。天神ビッグバンにより、街の再開発が進み、近代的にかつ機能的に生まれ変わる側面と天神、大名、新天町、それぞれの地域、エリアにある古きよき時代を象徴するような場所や伝統、人と人とのつながりといった文化が再開発とともに失われてしまうという視点を与えられたことは新鮮な感覚にさせられた。子どもたちにとって住みやすい場所、子どもたちの居場所はなくなってしまうのか、地域の人々が交流する場所とはかけがえのない財産であることを再認識させられた。登場人物も多彩で、多分野の方々の視点や目線、見解の違いを打ち出す丁寧な取材とコメントの奥深さがすばらしかった。街の余白というタイトルのとおり、スペースという意味合いと人の心のつながり、心の余白ということ、再開発事業の表と裏にある事情を考えさせられるよい番組だった。

○　１０月７日(土)、１４日(土)のブラタモリ「北九州～合体メガタウン！北九州市誕生の秘密とは？～」を見た。「５市合併のメガタウン」というキャッチコピーがすばらしく、出身地である北九州市を誇りに思えた番組であった。地図や町並みから歴史の変遷を読み取っていく番組の考察に比べて、自分の歴史の理解が表面的だったことがよく分かった。町の歴史的な出来事が、すべて豊前・筑前の国境問題につながっていくという、町の抱える課題の本質を突くロジックがとにかく理解しやす

く、番組を通じて知ったことを誰かに話して聞かせたくなった。後編の、国家プロジェクトとしてこの地に設けられた官営八幡製鉄所の写真が、広大な田畑の写真に重ねられた場面では、時代がこの地にもたらした役割の大きさを感じ取ることができた。世界でもまれな巨大な５市の合併へと進んだという部分では、自分の中にあった国境意識が消えて、北九州市民としてのマインドを自覚できた。番組を通して、改めて市への愛着が増し、この町が新たな産業で再生し盛り上がっていくように力を合わせていきたいと思わせてくれるすばらしい番組であった。

○　１０月１３日(金)のくまもとの風「わたしの“水俣日記”　～アナウンサー佐藤茉那　対話の旅～」を見た。若いアナウンサーが、「なぜまだ水俣病を伝えるのか」という同世代の友人の問いをきっかけに、熊本にいる人と、県外の人との水俣病に対する関心の温度差に着目して、取材を深めていったという切り口がよかった。水俣病訴訟で、救済策の対象外の原告全員を水俣病と認定するという判決が出たばかりで、タイムリーなテーマを取り扱ったよい番組だった。熊本在住の人にとっては現在の水俣はよいイメージのある土地だが、実情を知らない人も多い中で、語り部の杉本肇さんが語る言葉は重く感じられ、残していかなければならない取り組みだと感じた。「社会の大きな流れを変える、小さな発言を拾い上げることが大切だ」ということばには納得させられた。自分はずっと水俣と関わっていくのだろうと話す佐藤茉那アナウンサーに、杉本肇さんが「本当かな？」と笑いながら話している場面まで放送した点もよかった。ＮＨＫのアナウンサーという職種の評価の仕方について教えていただきたい。

（ＮＨＫ側）

熊本局では若い職員を中心に取材チームを作り、定期的に「クマロク！」で水俣病についての企画を放送していた。関心が高まっている今、これまでの取材をまとめて番組化しようという話になった。佐藤アナウンサーを主人公に立てる構成については、局内でも議論があったが、今回の番組は、水俣病を知らない世代がいかにして自分ごととして伝えるかというコンセプトだったことから、このような構成となった。母親の遺志を継いで語り部をしている杉本肇さんの出演は、番組のコンセプトにもマッチしていて、インタビューの内容も充実したものになった。

（ＮＨＫ側）

佐藤アナウンサーは人吉豪雨のときに赴任したアナウンサーで、熊本という土地について若い世代の目線で真摯（しんし）に向き

合ってきた。今回の番組でも、水俣病をこの時代に伝えていかなくてはという思いで、取材チームの代表として向き合う形になったと思われる。アナウンサーの評価は総合的な判断によるものであるが、そのように地域の課題について真摯（しんし）に向き合ってきた職員はきちんと評価していきたい。

○　１０月１３日(金)の小さな旅「島づくりの心つないで　沖縄　南大東島」(総合 後7:30～7:55／沖縄県域）を見た。ゴンドラにサトウキビ畑など、まさに南大東島という映像の冒頭から、老舗番組の安定感があった。沖縄文化の象徴として出てきた民謡教室の場面では、先生が勇退し亡くなった後も、その教えが弟子の方々に継承されている様子に感動した。弟子が島に帰ってきて子どもたちに教えていた点は、タイトルの「島づくりの心つないで」につながっていて、流れのよい構成だと感じた。南大東島の豊年祭を象徴する、おみこしと江戸相撲の場面では、中学卒業とともに島を離れる子どもと父親の切なさが淡々と描かれていた。父親の山城大輝さんが代々続くホテルの新しいオーナーである点もまた、番組タイトルへのつながりを感じた。観光地やグルメ情報の紹介ではなく、地域で暮らす人のドラマに入り込んでいくような構成で、自分がその場に行って見ているような感覚は他の番組にはないものであった。心が動く瞬間が各所に点在していて、余韻が残る番組であった。

○　１０月１７日(火)の「松本人志と世界ＬＯＶＥジャーナル」を見た。テレビではなかなか見ることのできない内容の番組で、正しい性教育という内容をＮＨＫが積極的に放送することについては意義があると感じた。スタジオの戸惑った様子は、今までになかった試みなので当然だと感じたが、今後はより積極的で気軽に話せる番組になっていくことを期待したい。気軽に話しているのみであると得られるものが少なく感じたことから、専門家が出演し学びを深める回も作るか、あるいは１回の放送の中で気軽に話す部分と学びを深める部分として演出を分ければよいのではないかと思った。もの足りなさについては、テーマを決めてしっかりと問題提起をすることで、より改善していけるのではないか。「性的合意」や「はどめ規定」などのことばの解説については、もう少し専門的な解説がほしかったが、正しくない知識については訂正のテロップが入っていたり、監修や取材協力のテロップが出ていたりしていて、安心して見ることができる番組であった。今後も改善を重ね、ぜひシリーズ化してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

さまざまな意見をいただき感謝している。これを励みにして、今後もよりよい番組を制作していきたい。

（ＮＨＫ側）

視聴番組の「ドキュメント２０ｍｉｎ.」のコンセプトのように、今後も番組制作においてチャレンジが必要であると感じている。また、過去の映像アーカイブはＮＨＫならではのものである。積極的に活用して、ただの過去の紹介にとどまらない、いま放送する意義を持たせて伝えられるような番組を放送していきたい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２３年９月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、２１日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、事前に視聴した、「流転　～沖縄　引き裂かれた集落～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に１０月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	古荘　貴敏	（株式会社古荘本店代表取締役社長）
副委員長	西野　友季子	（株式会社ニュー西野ビル代表取締役）
委　　員	乾　眞寛	（福岡大学スポーツ科学部教授）
	いのうえちず	（株式会社 suikara　取締役）
	大館　真晴	（宮崎県立看護大学　教授）
	久保田　正廣	（西日本新聞社　こどもタイムズ編集長　兼　論説委員）
	合原　万貴	（マルマタ林業株式会社　取締役）
	陳　優継	（株式会社 四海楼　代表取締役社長）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社５代目技術継承者　デザイナー）
	吉水　請子	（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜「流転　～沖縄　引き裂かれた集落～」

（総合　６月２３日（金）放送）について＞

○　戦争を題材にした番組では、戦争によって亡くなられた方々に重きを置くことが多いように思うが、この番組は生き残った方々の視点から描かれており、改めて戦争というものを考えるきっかけになった。ただ、当時移民となった沖縄の方々がなぜ南米という地域へ多く移住したのか、全体としてはどのぐらいの方々が、アメリカ軍の接収のために故郷を去らなければならなかったのかなど、全体状況に関する説明があるとより分かりやすかった。また、今回現地でインタビューした３人は、移住後も世代を重ねてうまく生活してきた方たちであったが、実際には大変な苦労をしてきた方々も多くいたのではないか。ただ単純に、現地で支え合い、助け合ったおかげで、今はうまく生活されているという面だけでは、南米に渡った移民たちの全

体像が見えづらかったように思った。今のウクライナの領土問題など、さまざまなことを考えるきっかけにはなったが、どこに焦点を当てたかったのかが分かりづらかった。

○　伊佐浜はアメリカ軍による土地の接収のあった場所として、沖縄では非常に象徴的な場所である。地元からの目線で見たときに、もう少し背景をしっかりと描いたほうがよかったのではと思った点がいくつかあった。まず、移民小唄の演出で、演奏者がバサージンと呼ばれる芭蕉布風な着物を着ていたが、戦後移民はこのような服装はしていなかったと思われる。本当に必要な演出だったのかと疑問に思った。また、タイトルは「引き裂かれた集落」であるが、沖縄に帰ってこられた方のエピソードもあったことから、「引き裂かれた」切なさはあまり感じられなかった。特に、「二度と帰りたくない」と発言されていた澤岻安信さんについては、「故郷はよかったが、帰りたくない」というギャップについて、もう少し掘り下げて描いてほしかった。また、制作担当者がこの番組を通して沖縄の助け合い、ゆいまーる精神の崇高さを伝えたかったと言っていたが、いま現在も世界各地にある沖縄県人会が強い絆で結ばれている背景には、日系人社会の中で、沖縄県系の方々が差別されてきたという歴史がある。そのような背景をもう少し描いてほしかった。

○　個人や家の歴史を丁寧に追いかけて取材されていると感じた。沖縄とブラジルに分かれてしまった人たちの当時と今の生活のありようがよく分かった。喜友名泉（ちゅんながー）という泉が出てきたが、そこは昔から古墳や遺跡があり、琉歌の歌枕になっている場所である。そのような背景の説明や地図の表示などがあれば、接収によって住んでいた土地を奪われただけでなく、古代から続いてきた歴史や文化もあわせて奪われてしまったという事実の重みが、より分かりやすく伝わったのではないかと感じた。また、伊佐浜の土地の接収による闘争が激しかった背景にも触れてほしかった。

○　地方局から海外への取材であっても多数の素材や証言を集めているところに、ＮＨＫの確かな取材力を感じた。ただ、接収という問題は沖縄以外の方に向けては丁寧に説明しなければならない一方で、一部の方々にとってはよく知られた事実であって、新しい見方を提供することが難しく、それらを両立させることに苦戦しているように感じた。沖縄基地、接収問題、移民という題材を三つとも取り込んだ、沖縄慰霊の日にふさわしい内容ではあったが、中途半端でもの足りない印象を受けた。どちらかの視点に徹して、「なんでおたくは今時分こういうことを聞きますか？」「もう遅いですよ」という番組の冒頭部分を軸に、「今、あなたたちに会いに来たのはなぜなのか」という答えを出すような構成にしてもよかったのではないか。戦争によっ

て住むところや家族が分断されてしまうということは、今も普遍的な問題であり、現実感をもって受け止められた。また、南米移民は沖縄固有の問題ではなく、当時の九州では多くあったことで、ほかの地域の南米移民と比べてどう違ったのかといった要素があると、もっと理解が深まったように思う。最後のナレーションでは、移民になって大変な苦労をした中で、悲運だけでなく、それを乗り越えた沖縄の人たちのたくましさがあったという、前向きなメッセージを出していく姿勢が感じられてよかった。ちなみに、この番組の制作における取材時の制作スタッフの人数や取材期間について教えてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

基地、接収問題、移民という題材を三つとも取り込んだ、沖縄ならではの番組と言える。突き詰めて掘り下げることなく終わったという指摘については、率直に受け止めたい。去年、本土復帰から５０年を迎え、再来年には終戦から８０年となる。これまで多くの番組が作られてきた中、新しい視点や発見について、取材、制作に関わる職員が、引き続き探求心と情熱を持って追求し続けていけるよう努力する。

（ＮＨＫ側）

４月に番組の制作が決まり、放送は６月だったこともあり、時間がとても限られていた。ブラジルロケは７日間、国内ロケは４日間ぐらいであった。伊佐浜の取材は、３名。ブラジルの取材は、沖縄局のディレクター１名のほか、現地スタッフが３名。期間、体制ともにコンパクトなロケであった。

○　伊佐浜という土地についても、接収についても初めて知った。非常に重い内容の番組で、沖縄の方に申し訳ない気持ちになり、戦争で負けるということの恐ろしさを実感した。番組の作りとしては、移民小唄の演出がなぜ入っていたのか分かりづらかった。また、当時の移民の方々が、琉球政府の勧めでブラジルに行き始めたという経緯や、なぜ日本政府が移民を受け入れなかったのかなどの背景についても、説明があるとよかった。終戦から本土復帰までの期間の沖縄の状況や、伊佐浜という土地の象徴性について若い世代の方たちは全く意識したことがない人も多いのではないかと感じた。こういった番組をぜひ定期的に作っていただきたい。最後にひとつ、番組冒頭の乗船名簿はどこで探したのか、確認したい。

（ＮＨＫ側）

サンパウロ在住の日系のコーディネーターの方にお願いし、公文書館で探していただいたものであった。

○　被爆者の父を持ち、祖先が華僑、すなわち移民の子孫である自分にとっては身近な内容だと感じ、取材を受けている側に感情移入して視聴した。今回の番組で最も印象に残ったのは、澤岻安信さんの「なんでおたくは今時分こういうことを聞きますか？」ということばであった。結論のようなものがあるか期待したが、彼らの人生を称した「悲運」と「支え合って生き抜いたたくましさ」という番組の締めのことばには、取材を受けている側の視点からすると、思い出したくない過去を掘り起こしておいて、これで終わったのかともの足りない気持ちになった。ただ、取材時間も番組の尺も限られていた中では、記録を残すという意味で、よく作っていただいたと思う。また、当時を実際に知る高齢な方々のことばを取材できたことは、大きな成果ではないかと感じた。

○　さまざまな道を選んだ家族がいる中で、それぞれの家族に丁寧に向き合って取材されており、過去と現在の記録や映像とがうまく構成されていた。取材を受けた方々にとって振り返りたくない過去ではあったと思うが、番組を通して証言してくださったのは、後世に残したいという強い思いがあったから、そして丁寧な取材に心を動かされたからではないかと感じた。戦後から今まで６世代にわたって、ブラジルの沖縄県人会としてその地に沖縄の伝統と文化が息づいている様子がとても印象的だった。南米にはほかにも移民が暮らす土地があり、接収によって奪われた集落はほかにもあったと思われるが、ブラジルと伊佐浜という集落にスポットを当てたのはなぜなのか。また、取材された皆さんを含め、当事者の方々がこの番組を見て、どのように感じるのか気になった。

（ＮＨＫ側）

なぜ伊佐浜なのかという点については、接収に際して代替地を琉球政府から示され、そこで手打ちになるというケースがほとんどの中、異国にまで行かざるを得なかったというケースは、伊佐浜のほかには見つけることができず、伊佐浜が特別なエリアになっていたのだと思っている。

○　澤岻安信さんの「もう遅いですよ」という率直な言葉がとても印象的だった。伊佐浜という土地が接収の象徴的な場所であることを知り、なぜ今、このタイミングでの取材になったのか改めて疑問に思った。この番組のような、忘れてしまってはいけない歴史を扱った番組はぜひこれからも多く制作し、放送していただきたい。そ

うすることで、私たちが戦争や平和について改めて考える機会につながると思った。

○　歴史の出来事として伝える部分と、当時を生きた人々の実体験から伝える部分の両方からのアプローチがあり、頭にも心にも残るものが多い番組だった。挿入されたライブラリー映像や写真の説明力が非常に高く、特に土地が接収されて、家に火が放たれている場面は本当に衝撃的であり、現存する湧き水の泉の映像からは、失われた水田の豊かな風景が伝わってきた。時間のない中での取材だったということだが、それぞれの人の故郷への複雑な思いを丁寧に取材していて、人々が引き受けさせられたものの不条理さ、無念さが胸に迫ってきた。導入の部分で、移民の方々がブラジルのコーヒー農園を目指して出発されたとあったが、最終的に目指したことがかなったのか、実際に皆さんが現在、どのように生計を立てているのか、少しでも言及があるとよかった。

○　戦争による沖縄の人々が抱える悲しみの上に、今日の我々の平和な生活が成り立っている事実を知ることはとても重要であり、その意味でもこの番組は大切なことを取り上げていると思った。また、沖縄米軍基地の移転問題について、沖縄県と国との対立関係が報道されているが、その背景には、このような根深い歴史があるのだと改めて感じた。今回の番組でいう接収のような、いわゆるタブー視されてきたような問題については、ここ最近ようやく番組として取り扱うことができるようになってきたような印象があるが、沖縄をめぐる日米の関係に影響を及ぼすことに配慮した報道規制のような話は過去にあったのか、教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

報道規制のようなものがあった事実はない。当事者の方の思いが深過ぎて、当時は取り上げられなかったことが、年月を経ることによって取り上げやすくなるということはあるかと思う。米軍に関する報道についても、沖縄という土地において、番組として取り上げにくいということはない。地元に本社を置くメディアと比較して、東京に本部のあるＮＨＫの位置づけというのは、確かに少し複雑な部分がある。ただ、ディレクターにしても記者にしても、一人のジャーナリストとして良心に従って自分が伝えたいこと、伝えるべきことを伝えていくという意味においては、ほかのメディアの皆さんと変わらない。

＜放送番組一般について＞

○　九州沖縄ブロックの「ザ・ライフ」は７月２１日(金)の「調査報告　指導死　子どもの命を守るために」、７月２８日(金)の「５５年目の夏～カネミ油症　次世代調査～」、８月４日(金)の「～人生はジャズとともに　齋藤悌子８７歳～」と、さまざまなテーマでクオリティーの高い番組を立て続けに放送している。特に、カネミ油症の問題は福岡県と長崎県にしか被害者がいないことからも、現地メディアが積極的に取材に取り組むべきものであって、次世代への問題を扱った今回の番組のアプローチは高く評価したい。

７月２３日(日)のどーも、ＮＨＫを見た。７月２４日は佐戸未和記者が過労死で亡くなった日で、ＮＨＫの働き方改革の原点とされていると聞いている。番組では勉強会や研修の様子が紹介されており、ＮＨＫがこの問題を重く捉えていることがよく分かった。マスコミ業界の長時間労働になりがちな実態は根強く残っており、このような内容を放送することは、視聴者に対しても二度と繰り返さないと宣言する証文のような効果を持つと思うことから、ぜひ今後も取り組んでほしい。

９月１１日(月)のクローズアップ現代「“ジャニーズ性加害”とメディア 被害にどう向き合うのか」を見た。番組のトーンは非常に厳しいものであったが、芸能・音楽コンテンツをつくる制作者としての観点から、ＮＨＫが自局を厳しく検証する姿勢が感じられ、好感が持てた。今後も当事者性を持ちながら検証していくことを期待したい。

特定危険指定暴力団工藤会トップの控訴審が始まった９月１３日(水)のおはよう日本で、福岡刑務所で行われている離脱指導を取り上げるコーナーがあった。暴力団を辞めた人をどうやって社会に戻すかという、身近に引きつけて考えられる問題を、控訴審のタイミングに合わせて全国の視聴者に伝えたことは評価に値する。

2020 年９月１１日(金)の「くまもとの風　日本一長く服役した　男」について、当時の熊本局の制作担当の記者とディレクターが、この番組の制作の舞台裏について書いた本がことし出版された。番組で取材された、強盗殺人で６１年服役した方の個人情報が、本を読めば詳細にわかるということで、資料を提供した方に懲戒処分が行われたという新聞記事を見た。非常に評価していた番組で、本もすばらしい内容だったが、制作時の資料の管理は適切なものだったのか、教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

工藤会控訴審のリポートは、北九州局の記者が取材・制作し、地域向けにも放送していた。出所した組員を組に戻らせないための取り組みは、極めて重要なものだと思っている。控訴審は続いているので、引き続き取材を継続していきたい。

（ＮＨＫ側）

資料の管理に関する事実関係については確認が必要であるが、「日本一長く服役した男」の番組制作時の取材については、適切に行われていたと認識している。

○　８月４日(金)のザ･ライフ「～人生はジャズとともに 齋藤悌子８７歳～」を見た。石垣島在住の８７歳の現役ジャズシンガーの齋藤悌子さんについては初めて知ったが、番組の冒頭から心に響く歌唱力に引きつけられた。沖縄の戦後というテーマにも、さまざまな切り口があるのだと感じた。齋藤さんの人生の物語として、ジャズとの出会い、伴侶との別れ、そして現在という３部に構成されており、分かりやすい構成であった。ベトナム戦争に行く兵士たちと接触ができず、手書きのリクエストカードでやり取りをしたというエピソードからは、アメリカ兵の人間らしい一面が見えて考えさせられた。「人生はジャズとともに」というタイトルは、本当にこの番組にふさわしく、ライブの映像から齋藤悌子さんの自然体な人柄が伝わってきた。心温まる番組であった。

○　８月４日(金)のザ・ライフ「～人生はジャズとともに 齋藤悌子８７歳～」はよい番組だった。沖縄局ではなく、福岡局制作だったのはなぜか。各局の要員の違いはあるのか、教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

ディレクターが関心を持って制作することが重要であり、福岡局のディレクターであっても、福岡以外のことをテーマにすることはある。とくに「ザ・ライフ」は九州沖縄ブロック向けの番組としてふさわしいテーマの番組を放送している。

（ＮＨＫ側）

今回の「～人生はジャズとともに 齋藤悌子８７歳～」を担当したディレクターは、ジャズというよりも、これまでずっと輝くお年寄りを追いかけていて、「＃てれふく」という福岡県内向けの番組でも、お年寄りのシリーズを制作していた。齋藤悌子さんという魅力的なお年寄りがいるというところから、番組制作が始まった。

○　８月９日(水)の歴史探偵「消えた原爆ニュース」を見た。広島と長崎に投下された原爆の被害について報道することが、戦後６年間にわたって禁じられていたということの背景について取材されていた。実際には禁止という形ではなく、ＧＨＱが仕掛けた巧妙な情報統制によって、さまざまなメディアが報道の自由をそんたくした形で報道が控えられてきた中で、京都大学の医学部の学生たちの勇敢な行動によって、その状況が打破されたということを初めて知った。当事者としては、６年も被害の実情が伏せられていたということを知って、本当にショックが大きかったが、当事者以外の目線からふかんして見ることの大切さも感じた。

○　９月６日(水)のてげビビ！を見た。今年の３月に宮崎市と日南市を結ぶ高速道路が開通したことに伴う、地域経済への影響について取材されていた。中心部同士の移動が大幅に短縮され、災害時にも役立てられて、日南市の人々は高速道路の開通を喜んでいる。道の駅は利用客が昨年より２割増加した一方で、従来利用されていた道路では、お店の前を通る交通量が７割以上減少したために、月の売上げが開通前の半分以下になった店舗があると紹介されていた。そのような現象が起こりうることは想像の範囲内であったが、その店舗が高速道路を利用して宮崎市に出張販売を行うことで、減少した売上げの８割を回復したという事例には驚いた。この事例のような、取材しなければ知り得ない情報をもっと発信してほしい。

（ＮＨＫ側）

「てげビビ！」は日南支局からのリポートであった。高速道路の開通に伴い、宮崎県南部の経済や観光など、多様な変化が起きている。引き続き、丁寧な取材を通して、見えてくる事実を掘り起こして伝えていきたい。

○　多くのスポーツにおいて日本のプレーヤーたちが世界基準で戦えるようになってきたことに伴ってなのか、ＮＨＫのスポーツ報道のスタンスに変化を感じている。９月９日(土)に開幕したラグビーワールドカップの試合の中継では、テロップやアナウンサーの読み上げによって、初心者には難しいルールが丁寧に説明されていた。また、データ放送のコンテンツの充実やＱＲコードによるＮＨＫプラスへの誘導など、あらゆる年代に対してのデジタルサービスの向上が見受けられた。さらに五郎丸歩さんなど、ワールドカップを経験した元選手の解説者の起用も多く見られ、ＮＨＫらしく内容の充実した中継となっていて今後にも期待している。サッカー女子ワールドカップの結果は残念だったが、ＮＨＫが放送権を得て中継したことはすばらしかった。９月１８日（月)の「ラグビーワールドカップ２０２３　１次リーグ・

プールＤ　日本✕イングランド(録画)」(総合 前 8:15～10:15)を見たが、そこまで熱心ではないラグビーファンにとっても視聴しやすい時間帯に放送されていてよかった。

先日知人に教わって、ＮＨＫラジオ「らじるらじる」の聴き逃しについて知ったが、よいサービスだと思った。ラジオとテレビともに、すばらしい番組を広められる聴き逃しや見逃しの仕組みを、今後も充実させていってほしい。

○　９月９日(土)の１００カメ「ラグビー日本代表 ついにワールドカップ開幕！大舞台に挑むチームの強化合宿に密着」、９月１７日(日)のＮＨＫスペシャル「“強者のラグビー”へ ワールドカップ日本代表」、「ラグビーワールドカップ２０２３　情熱ラクビー」(総合 後 11:45～11:50)などの番組や、特設サイトの取材レポート、分かりやすいルールの解説など、ワールドカップに関連するコンテンツが充実していて、非常によかった。試合の中継では副音声の「超ラグトーク」がすばらしく、１回目は主音声で、２回目は副音声と同じ中継を２回楽しむことができた。五郎丸歩さんや田村優さんという、日本代表経験者と一緒に試合を観戦しているような感覚になるなど、今までにないラグビー観戦になっていると感じた。Ｖ６の岡田准一さんのキャスティングもよかった。今回のワールドカップでは久留米出身の流大選手など、福岡出身の選手が多く選出されていて、より一層の盛り上がりを期待している。

○　９月１０日(日)の「ラグビーワールドカップ２０２３　１次リーグ・プールＤ　日本✕チリ」(総合 前 7:30～10:30)では、杉浦友紀アナウンサーの堂々とした仕切りが頼もしく、ラグビー愛にも好感が持てるなど、多様性に配慮したキャスティングが成功していると感じた。副音声の「超ラグトーク」は主音声を超える主役感があり、誘導にもきめ細やかな配慮があって、新しい取り組みが効果的に感じられた。

９月１７日(日)のＮＨＫスペシャル「“強者のラグビー”へ　ワールドカップ日本代表」見た。ルールや戦術を理解してラグビーの試合を楽しんで視聴したいという欲求に、新しい形で応えてくれる番組だった。ワールドカップ開催地とスタジオとをつなぎ、ＮＨＫならではの重厚感ある構成になっていた。前回大会からの４年間の強化戦略の現状把握や課題提示、解決策などが非常に分かりやすくまとめられていて、試合を見ていく上で重要な視点を得ることができた。また、過去の事例の紹介や、名選手たちのインタビューがぜいたくに使われていて説得力もあり、田村優さんや五郎丸歩さんのコメントが的確でかつ掘り下げた解説によって、一般視聴者にも選手の戦術理解の重要性といった内容がよく理解できた。

○　９月１５日(金)の「くまもとの風　おばあちゃんはアナウンサー～天草テレビが独特過ぎる件～」を見た。開局２０年以上たつインターネット放送局である天草テ

レビが、８７歳の高齢のおばあちゃんをアナウンサーとして起用して配信しているという内容だった。ＮＨＫがインターネット放送局を取り扱うこと自体が斬新だと感じるとともに、おばあちゃんがアナウンサーとして天草のよさを発信していることで、違う視点から得られるさまざまな気づきがあった。おばあちゃん自身もアナウンサーとしての仕事に喜びを感じている様子に、高齢化は悪いニュースとして伝えられがちだが、活躍できる場さえあれば仕事をしたい高齢者もいらっしゃるという新たな視点を得ることができた。このような事例は地域活性化の施策として、ほかの地方に展開してもよいのではないかと感じた。また、番組の最後に、制作スタッフの名前とともに顔写真も紹介されていた演出もよかった。

７月１４日(金)のくまもとの風「羽休めのアトリエ　色とりどりの思い」について、番組で取材されていた熊本市内のアトリエの存在をどのようにして知ったのか、なぜ番組にしようと考えたのか、追加でお聞きしたい。

（ＮＨＫ側）

制作したディレクターが、コロナ禍による重い閉塞感がある中で、心の安らぎの場の大切さをメッセージとして伝えたいという発想から、インターネットなどでこのアトリエの存在を知り、取材を始めた。

○　９月１６日(土)の「スピリチュアルジャパン　空手～沖縄　守礼の心～」(ＢＳ１後7:00～7:25)を見た。アイルランドと日本出身で空手の経験のある女性ショーナさんが、初めて琉球空手に触れていくという内容の番組であった。先生と１対１で稽古をしている様子がすばらしく、見ているだけで沖縄の空手の「空手に先手なし」という哲学が素直に理解できた。また、いわゆる琉球処分や、空手の４つの流派の違いなどの解説が端的かつ的確で非常に分かりやすかった。空手の先生でありながら三線の先生でもあるという方も出演されていて、音楽や踊りと空手という２つの面から沖縄文化の奥深さが伝わってきた。旅人の目を通して日本のすばらしさを学ぶという趣旨のバラエティー番組は数多くあるが、この番組は新しいアプローチで作られていると感じた。最後に番組内で流れていた「てぃんさぐぬ花」という曲について、沖縄のことばのあとにスペイン語でも歌われていて、よい演出だと思った。

（ＮＨＫ側）

沖縄はさまざまな課題を抱えているのと同時に、さまざまな魅力にあふれた地域でもある。本土復帰５０年、終戦８０年といった節目に限らず、常に地域の課題について、次の節目も見据えて取材を続け、発信していくことを継続していきたい。

（ＮＨＫ側）

ラグビーに限らず、さまざまなスポーツの魅力について今後も発信していきたい。いただいたご意見を参考に、これまで以上に、いつ、どの地域に向けて、何を伝えるべきなのかということを意識しながら、放送をお届けしたい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２３年７月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、２０日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「２０２３年度後半期の国内放送番組の編成」および「２０２３年度後半期の九州沖縄地方の番組」について説明があり、「２０２４年度の番組改定」や放送番組一般とあわせて活発に意見の交換を行った。

最後に８月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	古荘　貴敏	（株式会社古荘本店代表取締役社長）
副委員長	西野　友季子	（株式会社ニュー西野ビル代表取締役）
委　　員	乾　眞寛	（福岡大学スポーツ科学部教授）
	大館　真晴	（宮崎県立看護大学　教授）
	久保田　正廣	（西日本新聞社論説委員長）
	合原　万貴	（マルマタ林業株式会社　取締役）
	陳　優継	（株式会社 四海楼　代表取締役社長）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社５代目技術継承者　デザイナー）
	吉水　請子	（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜「２０２３年度後半期の国内放送番組の編成」
および「２０２４年度の番組改定」について＞

○　迷子になってしまったということばがしっくりするくらい、視聴者が見続けていた番組の放送時間が分からなくなることがないよう、視聴習慣を保てるような編成や、定時性を守るように整理するといった点は強化していただきたい。また、福岡局が制作したＺ世代の若者たちが今後のテレビの在り方について提言した４月２１日（金）放送の「ザ・ライフ」のような番組は、メディア自体が過渡期にある中で、まずはＮＨＫが自問するといった非常に価値のある取り組みだった。若者たちとともにテレビが変わっていくためにも、自分たちがどう変わっていくべきなのかを追究する自問番組を、これからも率先して取り扱っていただきたい。さらに、地域の討論

番組が活性化されつつあるように感じている。地域のコミュニティーや魅力、そして課題にいかに向き合っていくかといった番組はＮＨＫにしかできないことだと思っている。継続して取り組んでほしい。

○　子どもが生まれてからＥテレを見るようになったが、月曜から金曜まで毎日番組が変わり、５分や１０分といった短い番組がたくさんあることを最近知った。また、毎日番組が変わるため、慣れるのにとても時間がかかった。いろいろな番組があり多様性があるのはよいことだが、把握するのに時間がかかるのはもったいないように思えた。さらに、１０時台には「ＮＨＫ高校講座」を放送しているが、子どもが小さく朝からずっとＥテレを付けている中、小学生や高校生向けの番組が始まるとチャンネルを変えてしまう。１０時台は学校に行っている時間帯で、高校生はリアルタイムでは見ないのではないか。なぜあの時間帯で放送しているのかが気になっている。また、外出先などで幼児向け番組を見せるためにＮＨＫプラスを利用することがあるが、これをテレビでも見られるようになればより助かる。すでにサービスを開始していて見られるのであれば、方法などを積極的に周知していただきたい。

（ＮＨＫ側）

授業での活用等を想定して、小学生や高校生向けの番組を９時台１０時台に放送している。また、去年７月からＮＨＫプラスはテレビ向けアプリでも見られるようになったが、もっと丁寧に伝えて、皆様に利便性を高めていただくことが必要だと理解した。

○　ことしは災害が多かったこともあるが、ニュース防災アプリや番組の中で出すＱＲコードでの情報発信は、今後も推し進めていただきたい。取材力やドキュメンタリーに強いＮＨＫがよい番組をつくったとしても若者たちにはなかなか伝わらないことが多く、そこをいかに発信していくのかを今後突き詰めていく必要があると思っている。コロナも落ち着きインバウンドが増えてきている中、観光客だけでなく、日本に住んでいる外国の方などに向けた情報発信をどのように進めていくのかも気になっている。鹿児島局では今年度から、「かごスピＳｐｅｃｉａｌ」という地域で活躍している人たちが生放送の番組に出演し意見を出し合う番組が始まったが、とても挑戦的でよかったので続けていただきたい。「８・６水害」も発災から３０年ということで特集番組を予定していると聞いている。インターネットでも当時の様子などを動画も見られるようになっているのはよい取り組みであり、デジタルと連動した番組づくりも進めていただきたい。

○　ニュースを見ることが多く、最近では夕方の地域番組をＮＨＫプラスで見ること

ができるようになった。視聴する環境はよくなってきたと思っている。より多くの視聴者に見てもらうためには、視聴習慣をできるだけ守っていくという考えがある一方で、視聴習慣がない人に対してはどう届けていくかといった考えも必要だと感じている。その場合、ＮＨＫプラスといったインターネットなどで興味を引く番組を放送していることを知ってもらうしかないのではないか。若い世代は、無理にテレビから取り込もうとはせず、インターネットからＮＨＫを知ってもらってもよいのではないかと思った。

○　朝の時間帯について、子育て世代として６歳くらいまではＥテレを見せておくことができたが、子どもが小学生になってから見るような番組は少ないように感じている。一方で、子どもが学校に行っていなくなった９時台や１０時台のほっとした時間帯に、親世代の自分が見たい番組が放送されていることはよいと思っている。また、大河ドラマ「篤姫」がアンコール放送されているが、どういうニーズがあってアンコール放送されていくのかが気になっている。

（ＮＨＫ側）

大河ドラマ「篤姫」については、もう一度放送することで過去に放送していた番組の魅力を再発見してもらう、また、当時見ていなかった世代に届けていきたいという思いでアンコール放送を行っている。要望があったものすべてに応えられるわけではないが、アーカイブの中から何をいつどのように放送できるのか検討する際には、視聴者の皆様からの声も大切にしていきたい。

○　障害者から性的マイノリティーまで、いろいろな当事者が出演し、自分の個性に基づいて発信しているＥテレは、まさに革命的な変化をテレビとしては遂げているのではないのかと感銘を受けている。その一方で、これまで自分は仕事の関係もあり、朝７時と夜７時に放送されるＮＨＫのニュースは必ず見るようにしてきたが、ことしの４月から夜７時のニュースの演出が変わり不便に感じている。これまでは、番組冒頭にニュース項目が一覧で出てきていたが、いまはその紹介もなく急にトップニュースを伝えるようになっている。世の中で起きていることを確認するために、冒頭のニュース項目を見て大事なことを理解していた人も多かったと感じているので、ぜひとも戻してほしい。また、変更した理由・狙いを教えてほしい。続いて、番組改定の目玉でもある大河ドラマについて、2024 年に放送されるＮＨＫの歴史物は、紫式部など一部の世界に偏っているのではないかと心配している。ことしも大河ドラマでは徳川家康を取り上げている関係もあり、ＥテレやＢＳの歴史物も徳川家康に関連するものばかりになっている。ある程度盛り上げていかねばならないという

状況も分かるが、やり過ぎではないかという思いもある。大河ドラマで家康を取り上げるから、ＮＨＫが多角的に家康や江戸時代を取り上げることで勉強になるという考え方もあるかもしれないが、歴史好きからすると、このような方針が延々と続けられると困る。その点についてはどういう議論をして、今のような展開をしているのか教えていただきたい。最後に今年度前半期で最もよかった番組として、６月２０日(火)のドキュメンタリードラマ「ケーキの切れない非行少年たち＜前編・後編＞」（ＢＳ１　午後 8:00～9:39)を挙げたい。原作は 2019 年に発行され非常に話題を生んだ話で、日常生活を送るにはやや不自由、不便な層にいる人々が非行や貧困につながっているのではないかと問題提起をする内容だったが、刺激的なコンテンツを単にドラマにするだけでなく、ＮＨＫのような教養的かつドキュメンタリー的な要素を挟んでいた。これを見れば本をほとんど理解できるし、ドラマとしてもおもしろく、視聴して得られる満足度が非常に高い番組だった。本が出て４年が経過しようとしているが、なぜいまこれを取り上げようとしたのか、番組を作った苦労話も含めて確認したい。

（ＮＨＫ側）

ニュースの見せ方について、安心感も重要だが新しい演出を取り入れるといった工夫をした結果がこの演出だったのではないかと思っている。今年のトライアルについて、こういった声が上がったことは担当に伝えていく。また、大河ドラマの舞台が自分の住んでいる地域になることはめったにないことで、関連するテーマや舞台をほかの番組でも取り上げてほしいという、地元の皆さんからの声が多く寄せられている。ただ、そうした番組ばかり放送することで飽きたり嫌気を感じてしまったりするようなことがあっては、制作側や地元の人々にとっても本意ではないことから、バランスは大切にしていきたい。もう一点、「ケーキの切れない少年たち」のような、社会問題とその背景が非常に複雑でナーバスな問題を扱う作品は制作に時間がかかることが多い。作品性を壊さないようにと配慮すると、原作が出てからすぐに放送することは難しいのが実情である。

○　ＮＨＫの番組を見て、２点よい部分があると思っている。１点目は、新しいことにチャレンジしていこうという思いが非常に強い点である。デジタル化についても、ＱＲコードを使って番組内でいろいろな情報を取りに行けるようにする作りは進んだ取り組みである。実際に、ＱＲコードを読み込んだこともあるが、読み込んだ先のホームページが２種類あり、１つは番組ホームページの記事で、もう１つは動画だっ

た。記事については読み物の世界で逐語録のようなものになっていたことから、読み物としてもまだまだ工夫の余地があるのではないかと考えさせられた。動画についても、短く、ポイントごとに区分して、動画として見やすくするなどの工夫をしていくと、総合的に立体感が出て魅力が増すのではないかと思った。２点目は、継続性と情報の積み重ねという点である。昔の映像を取り上げて紹介する番組が増えてきているが、せっかくのアーカイブ映像でもあり、例えば、昔の画像と今の画像と比べると、こういう地域課題が見えてくるといった、アーカイブの持っている価値をより磨いて見せるようなつくりがあるとさらによくなるのではないか。アーカイブの効果的な活用をお願いしたい。

○　水害関連の防災や災害の情報の報道の在り方について、７月１３日(木)「緊急報告　令和５年７月記録的大雨」(総合 午後 7:30～7:57／九州・沖縄ブロック)の緊急報告を見た。今回、７月１０日の午前３時に線状降水帯が発生し、その大雨が降る中で自分も車を運転していたが本当に怖い思いをした。いろいろな恐怖を感じた中、今回の報道では河川の氾濫の状況など、ただ情報を伝えるだけでなく、災害情報の調べ方についてパソコンを使いながらテレビで伝えていたのは、リアリティーがあってよかった。線状降水帯が出てレベル５の緊急安全確保が出たとしても、報道を通してしっかりと視聴者に伝われば助かる命もあるはずだと感じている。災害に対する対策など、今回の対策や情報が避難に有効な手だてになったのかは気になっているし、今後もＮＨＫの報道を頼りにしていきたい。Ｅテレで放送している「ＮＨＫアカデミア」は、一流の方ばかりが出演しありのままの姿でしっかり話している番組であり、もっと多くの人に見てもらいたい。デジタルで配信もされていて、見られるための環境整備はできているが、その結果どのくらい視聴者が増えたのか気になっている。大学生に聞いても、ほとんどの学生がＮＨＫを見ていない。「ＮＨＫスペシャル」など、ＮＨＫでしかできない超大作ドキュメンタリーがいっぱいあり、教育的にも見せたい番組がたくさんあるのにお蔵入りしてしまう。デジタル化したことによって、ＮＨＫをふだんは見ない人たちに少しは広がっているのか、どういう影響を与えているのか、教えていただきたい。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫアカデミア」は 2022 年４月からスタートした番組で、人生 100 年のこれからを豊かに生きるために役立つ学びのコンテンツとして、ＮＨＫラーニングでも配信している。ウェブサイトは、過去コンテンツも含めいろいろなものを集めながら改修を進めているが、「ＮＨＫアカデミア」はその看板コンテンツの１つで、視聴者も少しずつではあるが着実に増えている。先生方とオンラ

インで直接話を聞いて質疑ができる番組として、申し込みもすべてデジタルで進めている。デジタルコンテンツに若い人が触れて、人生の喜びや学び、気づきなどをテレビ以外のコンテンツでも得られるようにしていきたい。

（ＮＨＫ側）

災害関係についてだが、レベル５になってから避難するのでは遅いため、その前に避難していただくためにどうすればよいのかと考えている。気象庁は線状降水帯の予測は半日前からと言っていたが、７月の大雨の場合はあの時間帯にあれだけの雨が降ることを予測することができなかった。レベル５になった状況下では外に出るのも危険であり、家の中で避難するよう呼びかけたが、そうならないためにも我々としても気象庁などと連携して、より正確で迅速な避難行動に結びつくような情報はどうしたら出せるのかを研究していきたいと考えている。

（ＮＨＫ側）

「命と暮らしを守る」をＮＨＫの使命として呼びかけてきたが、災害が発生し悪化するまでのスピードが速くなってきていることを私たちも本当に痛いほど感じている。被害が出た後に取材して伝えるという考え方から、いかに命を守るかという視点をより意識した災害報道に変わりつつある。今回、被災した朝倉市の方から電話をいただき、「ＮＨＫの報道を見て、主人の命が助かった」という温かいことばをいただいた。ただ、まだ報道が十分ではないという意見があることも踏まえて、よりよい報道方法を考えていきたいと思っている。

○　最近ＮＨＫの番組は非常にチャレンジングでおもしろいものが多く、自分が見たい番組にどうたどり着くのかが重要ではないかと思っている。もし、自分の興味があるテーマだと事前に知っていたら絶対に見たと思える番組を見逃し、あとあと気づくことが多い。全部インターネットに載せることも難しいのは分かっているが、関連するキーワードを登録しておけば、ＳＮＳなどで番組を通知してもらえるような機能があれば、少なくとも見逃すことはない。そういった情報発信ができないかは要望としてある。また、若者世代をどう取り込むかという点では、まずは見ればおもしろいと思える番組がたくさんあることから、そこにどうつなげていくかはいろいろな手を打つことが必要だと思った。今までと違うことにチャレンジすることで

話題になり、若者世代もＮＨＫはおもしろくなってきたと思うのではないか。

○　最近、おもしろいドラマがＮＨＫでも増えてきたという印象である。夜ドラ枠も、リラックスして楽しめる時間帯に設定してある。また、時代劇はぜひＮＨＫに頑張っていただきたいジャンルである。雲霧仁左衛門など昔の作品のリバイバルもよいが、新作に期待したい。主な視聴者層であるシニア向けには昔の作品が無難だろうが、大富豪同心のような作品がないと、そのうち時代劇文化そのものが絶滅するのではないか。さらに、地方発のドラマも、その土地ならではの文化風習や風景を楽しめておもしろいと思っている。基地問題に真っ向から取り組むドラマはＮＨＫでは難しいかもしれないが、切り口は違っても沖縄発のハイレベルなドラマはできるはずである。赤瓦屋根や青い海・青い空といった安直な沖縄イメージに頼らず、しっかり練った脚本でうならせてほしい。また、ニュース番組を見ていると、発表されたことをそのまま流す、政府の広報のようだと感じることがある。政治に関して、政局よりも政策を知りたいが、視聴者の意識調査等で政局を知りたいという声がそんなに多いのだろうか。政策の中身をふだんから報じていただけると、投票権を行使する際の判断材料になり、社会的な意義は大きい。

（ＮＨＫ側）

番組の改定と同時に、衛星２波の再編は楽しんで見てくださっている視聴者の皆様にとって大きな変化である。できるだけ皆様にストレスなく番組にたどり着いていただく、分かりやすく伝えていくことが大切だと改めて思った。皆様からの意見を本部に持ち帰り、丁寧な対応をしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　６月１６日(金)の長崎セレクト９０「ＮＨＫ特集　瞬間の大豪雨　長崎からの報告　（１９８２年)」(総合　19:57～20:42／長崎県域)を見た。長崎局は開局９０周年ということで過去の映像を使って長崎関連の番組を多く放送していて、今回は４１年前の長崎大水害について取り上げていた。当時の音声が番組で使われていたが、自分が災害のど真ん中にいたのを思い出した。９０年たっているからこそアーカイブがあり、その映像を使った番組を現在になって再度放送し、４１年後の今、改めて視聴者に考えるきっかけを与えられるのはアーカイブ映像のあるＮＨＫだからこそだと思っている。

７月７日(金)のザ・ライフ「老舗旅館で何が…レジオネラ菌の“３７００倍”の真相」を見た。前社長が亡くなったあとの再起の様子をそのまま放送していた。全く予

備知識がないまま取材をする方法と、結構調べて取材をする方法のどちらがよいのかいつも疑問に思っている。まっさらな状態で取材し、その観点から視聴者に知らしめるという考えがあってのことかもしれないが、取材を受ける側からしたらもう少し事前に勉強をしてから取材に来てほしいと思うこともある。どちらが正解かは分からないが、そういった取材の姿勢についても検討して、番組を放送してほしい。

７月１４日(金)の長崎スペシャル「令和を生きる昭和のアパートで」を見た。爆心地近くの浦上に戦後の復興の象徴として川口アパートという建物が建てられたが、３年後には取り壊しが予定されていて、アパートに住んでいる住民も少なくなり、その昭和の日常から長崎の歴史のかけらを探しに行くという内容で、今住んでいる人がどういう感じでいるのかをよい意味で緩く取材していた。長崎にいる我々でも現状を知らない人たちが多く、今回の取材がリアルタイムの放送だけでなく、また１０年後、２０年後にアーカイブとして、このときにこういう場所があったと思い出せるような生の声を取材し、将来に価値を生み出せる、そういった番組になってほしいという思いになった。

○　６月２５日(日)のＮＨＫスペシャル「“戦い、そして、死んでいく”～沖縄戦　発掘された米軍録音記録」を見た。毎年、６月２３日沖縄慰霊の日に合わせて放送される沖縄戦をテーマにした番組を見ているが、この番組はアメリカ海兵隊第六師団などが録音した沖縄戦当時の音声がこの番組のテーマとなっていた。沖縄県内に保存されている沖縄戦関連のデジタルアーカイブなどに日頃から身近に接していることから、ビジュアル資料の固定概念があり、素材が「音声」という切り口は新鮮に感じられた。報道の方法も時代によって媒体が違うという、当たり前のことに改めて気づかされた。また、番組ではイメージ映像をうまく使っていた。説明の要素も少なく、音声の雰囲気を損なわないものとなっていたため、より聴覚情報に集中することができた。シムクガマの話も入れることで、「住民を保護」という視点から見る人にも分かりやすくまとめられていた。「アメリカでは夕方仕事（艦砲射撃）が終わったら、艦上でジャズを流して踊ったり、ビールを飲んだり、楽しそうに遊んでいたのが島から見えた。」という話を聞いたことがあるが、途中でジャズを流すことでリアリティーも増し、ふだんの生活の一コマも取り上げられていた。７月１４日(金)のきんくる～沖縄金曜クルーズ～「戦い、そして、死んでいく　～沖縄戦　発掘された米軍録音記録～」(総合 後 7:30～8:40／沖縄県域)では、「ＮＨＫスペシャル」のリメイク版として放送していたが、ＮＨＫスペシャルではもの足りなく感じていた部分も補足されていた。その一方で、沖縄戦についてはある程度知識を持っている人が見るという前提で、全国向けには必要な説明をこの番組では省いていて、ひとりひとりの人間の素顔をイメージできる演出となっていた。スッキリと洗練された全国向けに対し、沖縄バージョンは少し泥臭い部分があるかもしれないが、２つのバー

ジョンを比較するおもしろさがあった。

○　６月２８日(水)のクローズアップ現代「“幸せ”で業績アップを目指せ　栗山英樹と“ウェルビーイング”」を見た。楽しいことが業績向上につながる幸福感を醸成する組織マネジメントについてしっかりとまとめられた、すばらしい番組であった。ただ、感心の高いテーマだっただけに、構成の点ではいろいろと気になる点があった。例えば、ウェルビーイングということばの理解度を深めるために、説明にもう少し時間を割いてもよかったのではないか。広がりのあることばであるだけに、今回の趣旨を反映した用語の共有がもう少しできているとその後の理解につながりやすくてよかった。また、前半には、コミュニケーションアプリと雑談自動販売機が出てきたが、そのツール活用というところが目立ち過ぎて、ウェルビーイングの本質的な課題が伝わりづらくなっていた。番組の最後に事例紹介として持ってきた方がよかったのではないか。また、見出しで「“職場の三角形”社員の幸福度アップ」と職場のコミュニケーションの在り方を表示していたが、製造会社の上司の方がインタビューの中でさらっと語っていた「人として、仲間としてつながる」ということばが本質のように感じた。ＷＢＣの熱狂の記憶もあって、栗山英樹さんの出演は番組の視聴を促す絶妙なキャスティングだった。しかし、ＷＢＣからひもとくというよりも、栗山さん自身のＷＢＣの観点から発言していた方がより落ち着いて番組を見ることができたのではないかと思った。課せられる役割が多い上司のウェルビーイングとして、組織の外でも何者でもない自分をたくさん持とうといった提言もあり、多岐にわたるきめ細やかな番組で非常に勉強になった。

○　７月４日(火)のクローズアップ現代「邪馬台国はどこに～日本古代史最大のミステリーに迫る～」を見た。非常に複雑な学説をコンピューターグラフィックや模型などさまざまな工夫を用いて、分かりやすく伝えていた。考古天文学という最新の知見を解説していて迫力があったが、今回の吉野ヶ里遺跡の発掘ではこの考古天文学との結びつきが一番の魅力でもあったことから、もう少しこの部分の詳細が見たかった。邪馬台国との結びつきを番組内で取り上げる必要があり薄くなったのだと思うが、より詳しい最新の知見などについて機会があれば、改めて放送していただきたい。

○　７月７日(金)のザ・ライフ「老舗旅館で何が…レジオネラ菌“３７００倍”の真相」を見た。旅館のその後をどのような視点で伝えていくのかと興味を持って見ていた。当時の記者会見を使用しながら前社長も認識不足で塩素も入れてなかったことや、すべて前社長からのトップダウンで指示があったことによって防げず、旧体

制の縦割りの部分が原因だったという真相などを伝えていた。実際に前社長も非を認めてはいたが、すべて前社長の責任と思える演出になっていて、少し違和感を抱いた。ただ、専門家によるレジオネラ菌に関する考え方や、町においても二日市温泉は大切な財産で、この大丸別荘の存在も大きかったという、それぞれ異なる角度から伝えていた構成はよかった。当時の経営状況を知らなかったという課題から、従業員全員で学び、お互いにコミュニケーションを取りながら取り組んでいる従業員の姿を取り上げることで、前向きに進んでいる様子が伝わっていたのもよかった。

○　７月７日(金)のザ・ライフ「老舗旅館で何が…レジオネラ菌“３７００倍”の真相」を見た。先代ではない、今残っている従業員が頑張っているということに重きが置かれていて、先代が悪かったと責任を押しつけるような演出になっていて、突っ込みが足りていなかった。残っている従業員たちには全く責任はないのかという素朴な疑問が生まれるくらい取材の詰めが甘く、批判は免れないのではという印象を持った。

６月２３日(金)のドキュメント７２時間「沖縄　オールナイトで弁当を」を見た。沖縄の普天間基地がある宜野湾が舞台で基地の世界が描かれるのかと思っていたが、夜にならないと働けない人や沖縄特有の芸能界に夢をかける人など、弁当屋によくこれだけドラマのある人が次から次によく訪れるなと驚くくらいの内容で、よい意味で裏切られた。非常に出来のよいドキュメンタリーだった。

７月１８日(火)のクローズアップ現代「食費節約で“低栄養”に！？～「値上げ時代」どう健康守る～」を見た。ＳＮＳでも話題になっていたが、「クローズアップ現代」とは思えない演出であった。深刻な話なのに最後が節約術にとどまっていて、桑子真帆キャスターの笑顔もかえって痛々しいメッセージになっていた。主婦の感覚からすると、東京に住んでいる制作者が意図する狙いとは違う形で受け止められているように感じる内容であった。

（ＮＨＫ側）

この番組は若手の女性ＰＤが制作した。提案を聞いたときは「ドキュメント７２時間」で成り立つのだろうかという心配もあったが、番組を見ていろいろな物語があるものだなと感心した。沖縄はユニークなキャラクターの方がたくさんいる地域だと改めて思った。

（ＮＨＫ側）

ザ・ライフ「老舗旅館で何が…レジオネラ菌“３７００倍”の真相」について、すべて先代のせいにしているような違和感を抱

いたという意見については、重く受け止めなければいけないと思っている。残された従業員たちの再建に向けた思いなどは、きちんと取材したうえで番組として伝えたと制作者から聞いているが、今後もより丁寧に取材をしていかなければならないと実感した。

○　７月１３日(木)の「緊急報告　令和５年７月記録的大雨」(総合 午後 7:30～7:57／九州・沖縄ブロック)を見た。７月１０日の線状降水帯発生からわずか２日間という限られた時間の中で、いろいろな切り口を短期間にまとめていた点については感心した。６年前の災害を受けた東峰村や朝倉、杷木地区が今回の災害ではどうだったのかともう一回同じ場所を訪ねていたが、前回災害を受けた地域が、来年以降どうなっていくのだろうかといった視点で非常に考えさせられる内容であった。寺内ダムについては 1978 年に建設されて以降初めて放流し、いまの所長があらゆる気象データから決断をしたということだったが、このダムの報道は今後もしっかり伝えていただきたい。アナウンサーがよく「何年に一度」「何十年に一度」の災害と言っているが、最近は毎年のように起きている。それを訴えていくためにも、気をつけなくてはならないポイントが整理され、非常によく理解できる番組であった。

○　７月１３日(木)「緊急報告　令和５年７月記録的大雨」を見た。７月１０日に発生した水害をわずか３日で、地元の声を拾いつつ番組としてまとめていたのには感心した。ただ、急に福岡県朝倉市にある寺内ダムから始まったため、この寺内ダムの意味合いをもう少し分かりやすく教えてほしかった。拡大筑後川流域というキーワードを、九州大学の塚原健一教授が説明していたが、地図だけでは分かりにくかったため、扇状地のように立体的に説明がされるとより分かりやすいように思えた。今回、大分県日田市では人的被害はなかったが、棚田や水路、山林などの１次産業にとっては生活の糧になる部分への被害は出ているため、そういった部分も引き続き取り上げていただきたい。災害が続いている中、次世代の人にも希望を持てるような意味も込めて番組づくりを心がけていただきたい。

（ＮＨＫ側）

緊急放流が今回のキーワードになっていて、そこをポイントとして押さえたかったため、寺内ダムを中心に取材を始めたという経緯がある。消化不良だったという指摘については、重く受け止め次に生かしたい。また、今回災害発生からわずか３日で放送したという時間が限られていたが、放送する以上はしっかりしたものを作るという認識で今後も番組を作っていく。

（ＮＨＫ側）

今回、この番組は緊急で立ち上げ、放送まで１日半から２日くらいの時間で、ニュースと制作で連携しながら放送に至った。評価していただいたことはうれしく思っている。

○　７月１４日(金)のくまもとの風「羽休めのアリトエ　色とりどりの思い」を見た。まず、熊本市東区にそのような場所があることを全く知らず、この場所が生きづらさを抱える人たちが集う場所であって、思い思いに絵を描いたり、シェアアトリエの店主と言葉を交わしたりすることによって、心が整理されて日常に戻っていくという、救いの場であるということが見ていて分かった。注意欠如・多動症と言われるＡＤＨＤが病気として認識されたのはここ最近のことだが、一定数存在しているという実情を知っておくのはとても重要だと感じた。

○　７月１８日(火)のクローズアップ現代「食費節約で“低栄養”に！？～「値上げ時代」どう健康守る～」を見た。深刻な貧困の話だったのに節約のレシピで締めくくられていて、急に番組が変わってしまったかと思うくらい、取材を受けられた方と内容のずれを感じるなど、番組の流れに疑問を抱く内容であった。節約レシピは民放含めてほかの番組で何度も取り上げていることもあり、「クローズアップ現代」が目指すべきところはそこではないと思った。問題の根本をいかに解決していくのかなど、問題提起をしながら緊張感を持った放送をお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

「緊急報告　令和５年７月記録的大雨」は、番組を制作している現場から要望があり、放送することになった。発災から２日から３日という短い期間の中で、どうして起きたのか、今後同じことが起きないためにはどうすればよいのかを、分かるように伝えたかったのだろうと思っている。災害関係の報道番組については、「これで終わり」ということは決してないと感じている。防災、減災、命や暮らしを守るための報道をこれからも続けていきたい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２３年６月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１５日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、事前に視聴した、【ＮＨＫ地域局発】ぶんぶん探検隊「別府市・南小学校区でお宝発掘！」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に７月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	古荘　貴敏	（株式会社古荘本店代表取締役社長）
副委員長	西野　友季子	（株式会社ニュー西野ビル代表取締役）
委　　員	乾　眞寛	（福岡大学スポーツ科学部教授）
	いのうえちず	（雑誌モモト編集長）
	大館　真晴	（宮崎県立看護大学　教授）
	久保田　正廣	（西日本新聞社論説委員長）
	合原　万貴	（マルマタ林業株式会社　取締役）
	陳　優継	（株式会社 四海楼　代表取締役社長）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社５代目技術継承者　デザイナー）
	吉水　請子	（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜【ＮＨＫ地域局発】ぶんぶん探検隊「別府市・南小学校区でお宝発掘！」
（総合　４月２７日(木)放送）について＞

○　取材範囲が小学校区という目の付けどころには、新鮮さを感じた。ただ、冒頭で登場した隊長・別府ともひこさんのお兄さんの出演は事前に仕込んでいたようで、ぶっつけ本番の演出が薄れているようにも感じた。タイムカプセルを探す場面も新鮮さがなく、結果的にはタイムカプセルも見つけられなかったことから、この演出はそもそも必要だったのかと疑問に思った。地域ならではのお宝を探すという流れで崇福寺の鐘の由緒や地元のグルメ、自然のすばらしさなど、小学校エリアでも掘り起こせばいろいろ出てくるという視点はよかった。ただ、旅番組がたくさんある中、この番組は地域に向いているという目的を達成できていないように感じた。旅番組や

ぶっつけ本番の醍醐味を感じられるような演出があると、よかったのではないか。

○　歩ける範囲の小学校区を探索するといった考えや、地元の人も知らない地域のお宝を探すというコンセプトはよかったが、冒頭の別府ともひこさんのお兄さんが出てくるシーンは事前に仕込んでいたようにも見えた。石垣もちや蜂蜜を紹介するような緩い旅番組の時間帯だけでなく、その土地に住む子どもたちが河内渓谷までの抜け道を教えてくれる姿や、温泉に入る「今日のちゃぽん」というコーナーでは、大分や別府らしさが出ていた。これからも新たな校区をまわる中でいろいろな出会いがあると思うが、いま一つもの足りなくも感じたところもあり、何か見応えのある場面を今後追加してほしいと思った。

○　別府出身の別府さんやゲスト隊員で現在大分に住む中島知子さん、また、大分出身の和田弥月アナウンサーという地元をよく知る３人が、柔らかく軽妙なトークで地元の人たちの話をうまく引き出していた。内成地区自治会長の園田喜久夫さんの「お宝って自分では意外と気がつかない」ということばには重みを感じた。地元に住む人々にとって、自分たちが考える宝だけでなく、外から見た人がどの部分を宝に思うだろうかといった面も同じくらい気になるのではないかと感じた。その意味では、１人くらい外部の人を出演者として呼び、外の視点からの意見も加えるとよりよくなるのではないかと思った。登場する地元の人々が発することばの中に、ヒントがたくさん隠れているのではと可能性を感じる番組であった。

○　制作者本人が粗削りで伸びしろしかない番組だと言っていたが、そのとおりだと率直に思った。ぶっつけ本番を売りにしているのであれば、より早いリズム感でストーリーがつながっていくような仕上がりにした方がよいのではないかと感じた。また、地元の話題を掘り下げていくために地元出身者を起用していたが、大分や別府市のことを全く知らない人に掘り下げてもらった方が、新しいものやおもしろいものが生まれて、ＮＨＫが狙っているぶっつけ本番感というのが出せるのではないかと思った。アポなしでいろいろなところに旅する番組が多く存在する中で、あえて大分局が新規参入しているのであれば、例えば次の訪問地を決めるときには、今回の旅で出会った人に紹介してもらうなど、民放がやっていたような手法を取り入れてもよいのではないか。ＮＨＫとして少し遊び心を出した演出にすると、番組を見る人に訴えかけることができるのではないかと思った。

○　歩ける範囲が舞台となっていて、画面下には地図を出すことでどこを移動しているのか分かりやすい演出となっていてよかったが、その地図に移動距離や移動時間などが追記されていたら、より分かりやすかったのではないかと思った。また、大分

出身で隊長の別府さんや副隊長の和田アナウンサー、大分に移住してきたゲストの中島さんの３人の中で、和田アナウンサーのコメントがなかった。それぞれが異なる視点を持っているのであれば、均等に話す機会があるとよかったのでないかと感じた。河内渓谷を案内した子どもたちのＳＮＳで小学校のＰＲをするために調べているといった話や、歩いて移動していたからこそ見えた猫の昼寝の風景など、旅番組ならではの演出には好感を持てた。また、好きな温泉を答えさせる人物紹介も、今回の舞台である別府らしさが出ていてよかった。しかし、内成地区の自治会長・園田さんの場面ではよいコメントを引き出せていたが、本来は棚田の風景を紹介していたはずなのにコメントの紹介にとどまっていたため、園田さんと棚田のつながりが見えるとさらによかった。

○　最初はこの番組に対して緩い印象を持ったが、その緩さが全国放送で求めるスピード感とは異なるもので、地方だからこそ出せる味となっていた。崇福寺の鐘の金属類回収令に伴う統計データなど出典元も丁寧に書かれていて、緩い中でも論理的な説明がありよかった。また、老舗和菓子店の作業所でレポーター３人ともフードをしっかりかぶっていた点は、食品衛生上の観点からも好感を持てた。しかし、自治会長の「お宝って自分では意外と気がつかない」ということばを引き出した場面では、宝ということばを使って聞き出すのではなく、自慢といったフレーズに変えるとよりよいキーワードを引き出すことができたのではないかと思った。地元の小学生が宝について「空気がおいしい」と答えていたが、何か言わされているようにも感じたため、「自慢を教えてください」という聞き方にしていたのであれば、より小学生らしい魅力を答えられていたのではないか。また、小学校区をまわっていくというコンセプトならば、その校区の校長先生に次の訪問先を教えてもらい、校長先生にずっとバトンを渡していくなどの工夫をすると、コンセプトをより伝えることができるのではないかと思った。

○　バラエティー番組として楽しめる内容だったが、別府さんのお兄さんが出演する場面は事前に仕込んでいるように感じ、子どもとの出会いも同じように仕込んでいたのかと疑問が残る演出であった。また、次回の訪問先やお宝情報を募集している点を踏まえると、校区内の中でもある程度目星をつけて本番に挑み、編集してきたように見えてしまった。「本日のちゃぽん」という温泉を紹介するコーナーでは、温泉のテロップが小さくどこの温泉なのかが分かりづらかった。今回メインで扱っていない内容でもあり、目立たせないようにしたのかもしれないがもっとアピールしていてもよかった。ただ、崇福寺のシーンでは、地域を昔から見守っている中心的な存在であることが伝わってきただけでなく、昔の写真や戦時中の説明も丁寧にされていて、とても分かりやすい演出となっていた。人と地域の思いを込めたローカル

番組で、地域の宝を地域ならではの目線で伝えていくことはよいことであり、もっと仕込み感がないぶっつけ本番で挑んだ番組をつくってほしい。

○　無理やりお宝を見つけ出したように感じる内容であった。別府さんのお兄さんが出てきた点や校区に特化する必要があったのかが分かりづらかった。行動範囲を広くしてさらにネタを増やすことができていれば好奇心をかき立てられ、もっと興味を持って見られる内容になっていたのではないか。校区に特化してお宝を見つけるのが大変ならば、お宝だけでも前もって下調べし、そこにたどり着くまでの道中で地域の人々と触れ合い、お宝のエピソードや地域のことを台本なしで届けていくような展開ができるのではないか。校区に限定して届けることが番組をつくっていくうえで本当に必要だということであれば、もっと内容を充実させることでよりよい番組になると思った。

○　都道府県や市町村でもない校区に限定したお宝発見という、新しい視点のある番組であった。河内渓谷を誇らしげに案内する子どもたちはとても魅力的だっただけでなく、一本筋だった頃の滝のモノクロ映像とともに解説を入れることで、簡単には得られない地域の情報を知ることもできた。石垣もちを作っている場面のシズル感も印象的で、このホームメイドのような温かさがお宝のお宝たるゆえんだと感じた。インタビューを通して気になることを掘り下げて宝物に行き着いていくといった手法を使ったからこそ、その土地に全く縁のない私でもお宝のように感じた。行動範囲を校区に絞り込んで探していく手段は、地域の人々の思い出など細やかな部分を見つけ出すには効果的で、校区ごとの集団意識にも働きかけやすく、予想外の出来事やおもしろいものの発見につながるのではと思った。ただ、別府さんのお兄さんが出てくる場面や、情報収集のために出していたＱＲコードを見ると、番組内でどこまで提示することが正解なのかを改めて検討するべきだと思った。また、隊員の方々はインタビュアーとして話を引き出し切れていない印象で、ここがもっと生きてくると地域の魅力を掘り起こそうとしている点が伝わるのではないかと思った。

○　実際に住んでいるとなかなか気づくことのできない地元の魅力に対して、「お宝は自分では気づかない」ということばが出てきた。あえて距離を取ることで地元のよさが分かるという話を聞いたこともあり、このことばは今後重要なキーワードになってくると思った。また、これだけコンテンツがあふれている世の中で、取材範囲を狭くすることで深く視聴してもらうという手法にも一つの可能性を感じた。この番組で今後、この校区で取材するという情報が事前に流れると、放送している時間帯は地元の人々がテレビにくぎ付けになると思った。そういった意味では、すごく

楽しみなシリーズであった。

（ＮＨＫ側）

別府さんのお兄さんのパートについては事前に準備した演出ではなかったが、多くの方が事前に仕込んでいたように感じたのであれば、撮影や編集の方法を反省するべきだと思った。出演していた子どもたちは、事前に保護者の許可を取った上で撮影しているが、もっと勢いのままに自然に伝わるようにするべきであった。また、出演者に外部の視点を入れるべきだという声や、お宝を確認するための尋ね方を変えるなど、いただいたアイデアを次回に生かしていくことで、長く愛される番組にしていきたい。「お宝って自分では意外と気づかない」という地域の人のことばには、この番組のキャッチフレーズにもなりうるのではないかというぐらい、胸を打たれた。引き続きこの気持ちを大切にして、番組をつくっていきたい。

（ＮＨＫ側）

地域放送局として、どういう内容を放送していくべきかを考え、一つ枠組みを決めて放送していこうとこの番組を立ち上げた。狭い校区を歩くことで、地域の日常やその幸せが何だったのかが見えてくると思い、段取り中心ではない方法で進めてきた。その結果、今回の番組でもたまたま遭遇したような話もあったことから、そのエピソードをちゃんと放送に入れるべきだと思った。魅力のあるものは近くに転がっているといったことを、番組を見ることで地元の人々が見つめ直す機会になればよいと思っている。隊員の中にまた別の視点を入れるなどして大分の魅力を掘り下げていき、温かみのあるよい番組だと思ってもらえる番組に育てていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　５月２６日(金)のかごスピＳｐｅｃｉａｌ「ここがヘンだよ！鹿児島のジェンダー」(総合　午後 7:57～8:42／鹿児島県域)を見た。今回は、海外でジェンダー学を学んだ女性や新聞社、行政、福祉関係、そして企業代表者と、異なるジャンルの方々がパネリストとして出演していた。前回とは異なり、ジェンダーがテーマだったこともあり女性を多くしたのだと思ったが、学生がいなかったのは残念で、１０

代、２０代の生の声を聞いてみたかった。さらに、鹿児島に住んでいる外国人が参加していたら、違う意見が聞けておもしろかったのではないかと思った。ジェンダー平等に関する職場の在り方をコンビニ会社の業務改革を例に紹介していたのは、参考例としてとても分かりやすかった。実際にどう取り組んでいけばよいか分からない人も多いことから、もっと取り組み事例が多く紹介されていれば、メリハリが出てよかったのではないか。また、タイトルにある「ここがヘンだよ」ということばの影響からか、ジェンターを推進する方の意見が多く議論にはならなかったという部分があり偏っているように感じた。ただ、こういう課題を取り上げることは、自分自身がどう思っているのかを考えるうえで重要であることから、この放送で終わりとするのではなく、引き続き何らかの形で議論を続けてほしい。

○　５月２７日(土)の長崎スペシャル「探求！おもしろ生き物研究」(総合　午前7:35～8:00／長崎県域)を見た。長崎にはおもしろい生き物の研究がたくさんあるという紹介から始まり、新たな発見から次の発見へとつながりを持って紹介していく番組の構成がとてもおもしろかった。ニホンウナギの稚魚が捕食者のドンコから逃げていくが、食べられたとしてもすぐさまドンコのエラから逃げられるように、あらかじめ逃避行動を取っていたという発見のほか、２つの研究結果も示されていたが、三種三様の研究結果は生態系を守る、いわゆる実用化に結びついていくという紹介で、非常によかった。本当に感心する内容であり、このあとどうなるのかと今後の展開が知りたいと思わせる番組であった。

○　５月３０日(火)の１００カメ「川崎フロンターレ　Ｊリーグ屈指の強豪　試合の舞台裏に密着！」を見た。試合をリポートするのは当然のことだが、その裏側にいる地域のサポーターが朝早くから集合して作業を始める姿というのはなかなか見ることのない一面で、100 カメだからこそ拾える絵がたくさんあり、新鮮であった。開幕から３０周年のＪリーグを題材にしながら、ＮＨＫの強みである機材の多さや定点で見ていくという番組のつくり方は、非常におもしろい切り口であった。また、６月３日(土)の１ミリ革命「みんなでローカルグッド」(総合　午前 11:15～11:40)でもＪリーグチームが取り上げられていて、アビスパ福岡の昨年の観客動員数がＪ１リーグの中で最下位の平均 7000 人という問題が、ちょうど 100 カメの内容と表裏合わさって、アビスパの課題に対する答えをすべて提供しているかのように感じた。これらの番組では、お互いのチームのよさや問題点を浮き彫りにしていて、よくつくられていた。ローカル局発信のネタを全国に広げていく発想もすばらしく、小さなきっかけで地元のサポーターやスポーツの文化が大きく動き出し、観客動員や収入、成績などにつながったとすれば、まさに「１ミリ革命」というネーミングにぴったりである。福岡局の岡野唯キャスターも登場し「大濠公園を走っています」という

朝の話から始まるローカル発らしい、非常によい番組であった。

○　６月４日(日)のＮＨＫスペシャル「アフターコロナ　人に会うのがツライ」を見た。新型コロナが５類に移行したことで全数把握が終了し、観光地に人が戻ってきているというニュースが流れてきたかと思えば、また全国で感染者が増えて医療現場がひっ迫してきているという情報もあり、果たして今アフターコロナと言い切ってもよいのかという点が引っかかった。コロナから解放された人々の楽しそうな映像とともに番組が始まる点や、にぎわいを取り戻した日常というナレーションには違和感を抱いた。病院などではまたまだ緊張が続いている状況で制限も多いことから、余計に人々の意識が低下してきているように感じている。そのため、コロナから解放されて楽しんでいる人たちだけでなく、危機感を持っている人もたくさんいるということを配慮した始まり方であれば、違った雰囲気になったのではないか。また、ゲストや専門家の発言も多様性に寄り添ったものではあったが、コミュニケーションで悩んでいる方々の例が多く盛り込まれていた内容だっただけに、軽い発言で締めるのは違うのではないかと思える、残念な終わり方であった。

○　６月８日(木)のあさイチを見た。「愛（め）でたいｎｉｐｐｏｎ　北九州の魅力に酔いしれる！」というコーナーでは、酒屋でお酒を飲む角打ちを取り上げていて、コロナが明けてから、100 軒近くのさまざまな形態の角打ちが営業していることを分かりやすく説明していた。また、その角打ちが今でも北九州の人たちが誇る生活文化であるという情報もあり、その理由が北九州の都市の個性と密接に関わっていたということが、とても興味深かった。2024 年１１月頃には、日本の伝統の酒造りがユネスコの無形文化遺産に登録される予定が濃厚だということもあり、さまざまなメディアが酒造りやクラフトビールに取り組む姿を取材し始めている。そのような中で、酒文化という生活文化に視点を当てて番組を制作していた点はおもしろかった。ただ、最後は角打ちのマナーや案内をすることにとどまり、魅力を掘り下げきれていなかった点は残念であった。

６月１４日(水)に吉野ヶ里遺跡の発掘に関するニュースを見た。発掘した結果、何も見つからなかったという内容だったが、あるなしの話にとどまらず吉野ヶ里周辺はふだん専門家しかできない発掘調査を体験型のツアーとして展開するなど、先進的な取り組みも行っている。もう少し取材をすれば新たな情報も出たのではないかと思ったことから、そういった取り組みについても吸い上げてほしかった。

（ＮＨＫ側）

副葬品や人骨は発掘されなかったが、吉野ヶ里を通して邪馬台国のことに思いをはせるきっかけにはなったのではないかと思っ

ている。今後の発見を期待している方も多いはずであり、ＮＨＫとして引き続き吉野ヶ里について取材していきたいと考えている。

○　６月８日(木)のＳＯＮＧＳを見た。５年の活動期間を経て一番人気があった時期に突然解散してしまったロックバンド・男闘呼組の特集だったが、たまたまチャンネルを合わせてこの番組に行き当たったことは本当にラッキーだったと、特別な感慨を持って視聴した。番組は、過去・現在・未来の時間軸で構成されていて、圧巻のアーカイブ映像ももちろんだが、それぞれの魅力だけではない、当時の男闘呼組を説明するうえで完璧なまとめ方であった。突然フェードアウトとした後の空白についても、進行の大泉洋さんが軽やかなトークで回していたのがとてもよかった。最初は、彼らも随分年を取ったなと思ったが、見慣れてくるとまるで同級生との再会のような番組でもあった。披露されたヒットナンバーは懐かしく感動するものであっただけでなく、これから人生 100 年時代に向けた新バンドに向かって再結成するということでプレーヤーとして成熟した姿も見ることができ、一気通貫した充実した内容で思い出に残る回であった。

○　６月９日(金)のザ・ライフ「自衛隊の素顔　安保“大転換”の中で」を見た。南西諸島は、日本の防衛の重要な転換点の最前線であり、それを適宜適切に取り上げていくのが公共放送ＮＨＫの大事な役割だとこれまでも言ってきたが、今回も見応えのある、２５分の放送尺からあふれるほどの情報量であった。琉球石灰岩という九州沖縄ならではの地理的な要因が自衛隊の一つのテーマになっているということを、夕方６時台のニュースでも取り上げて番組の告知にもつなげていた。今の防衛論議では新しい兵器が注目を集めているが、地上戦になったとき、多くの犠牲が出るのは工兵の現場の皆さんで、ここにスポットを当てて本音を聞くというアプローチはよかった。ただ、番組全体をまとめる形で最後に陸自の大幹部のＯＢである先崎一さんが出てきて、結局問われるのは国民の覚悟だというところで話がまとまっていた。先崎さんが言っているのは国会など安全保障論からの観点であり、番組のコンセプトからすると先崎さんではなく、もう少し現場感のある人の発言でもよかったのではないかと思った。

５月２２日(月)に鹿児島局のかごしまＷＥＢ特集に投稿された「世界自然遺産の島から持ち出される生き物たち」を見た。世界自然遺産に登録された奄美から、昆虫や貴重な植物がどんどん捕まえられ、島外に持っていかれていることを紹介していた記事だったが、条約でわなを仕掛けることが禁止されている中、新しい手口で生き物を捕まえては持ち出しているというつかみから入った記事であった。奄美支局に記者がいる意味が十分にあり、非常に興味深く印象に残る内容であった。今後もまた違う形で、この情報を発信していただきたい。

６月１１日(日)に再放送された映像の世紀バタフライエフェクト「独ソ戦　地獄の戦場」(総合　前0:25～1:10)を見た。今回は、ヒトラーのナチスとスターリンのソビエトの何百万人も亡くなったという独ソ戦を描いたものだったが、５月２２日の初回放送から６月１１日に再放送されるまでの間で、５か所もの内容を修正したとのことだった。５月の放送直後から専門家などから指摘があり修正して再放送をしたということだったが、ドキュメンタリーとしては深刻な部分の間違いが多く、ＮＨＫらしさを世に問いかけているような番組であるため残念に思った。

（ＮＨＫ側）

ザ･ライフは､昨年末の番組も作った報道グループが根幹になって取材を続けている。日本の防衛や南西諸島の防衛は継続して取材していくべきもので、九州・沖縄地域としても今回の番組は一つの成果であったと感じている。確かに２５分では短かったかもしれないが、伝えられることはしっかり伝えられたのではないかと思っている。元陸将の先崎さんの話については賛否あるかもしれないが、全体像をきちんと押さえるという意味でも必要であったと考えている。

（ＮＨＫ側）

今回担当したディレクターや記者は、長く自衛隊の取材を続けてきて信頼関係ができていた。ただ、それだけ信頼関係があっても自由に取材できるわけではなく、そこで出会った象徴的な人物にフォーカスしていくという状況であった。この人をフォローすると完璧なものが撮れるのではないかといった視点で、ベテランディレクターをはじめとする現場の判断でロケを進めていったと聞いている。ディレクターと記者の思いとして、現場の自衛隊員たちのルポが中心だったが現場だけではないという話をメッセージとして込めたかったこともあり、先崎さんにインタビューを申し込んだと聞いている。

（ＮＨＫ側）

これまで災害対応が中心だと思われていた自衛隊も、より実戦を意識するような雰囲気が出てきている。その点をいかに表現していくかと熟考したうえでつくった番組だと認識している。先崎さんのインタビューについては委員の指摘のとおりでもあるが、取材を終える間際の「日本人は何かあると極端に走る」という発

言こそが、この番組で伝えたい内容だったのではないかと思っている。これがよいとか悪いとかはっきりと断言はできないが、この点については触れたいといった制作者の気持ちが詰まっていたのではないか。

○　５月７日(日)のこころの時代「～宗教・人生～　心とは何か　脳科学が解き明かすブッダの世界観」を見た。題名にひかれて見たが、非常におもしろい番組であった。浅野孝雄先生という脳科学者と佐久間秀範さんという僧侶、仏教家との対話の中から心とは何かと、人間の根源的な謎に迫る非常に意欲的な内容だった。長い歴史の中で宗教と科学というのは対立構造にあったが、最新の量子力学の考え方や両方の立場から批判するような考え方もあり、見る人によっては非難される番組かと思ったが、ある意味チャレンジングな内容であった。非常に難解なことばも多く、何度か見返さないと理解できない部分もあったが、一つの投げかけとしてこういった番組を放送したのはよいことで、大変ためになった。

○　６月１１日(日)の財前直見のおおいた暮らし彩々　「２０２３初夏」を見た。ナレーションの福士蒼汰さんの姿は見えないが、たびたび自分の意見も語っていて好感を持った。また、大分県杵築市のきれいな風景や、山菜を取ってはそれをお弁当にして花見をする日々の営みなど、ぜいたくな時間をしみじみと感じさせてくれる番組であった。料理ができあがって食べるまでの姿も丁寧で、おいしそうに届けていた。七島藺を使って座布団を作っている場面もすごく分かりやすく、七島藺のよさも伝わってくるものだった。３０分と思えない充実ぶりで、県外の人が見てもここに行きたくなると思わせる番組であり、とてもよかった。

６月２日(金)の「あさイチ」を見た。プレミアムトークでは、最近ラジオ番組でも人気のジェーン・スーさんが出演していた。３０代から５０代までの女性たちがコメントを投稿していて、それに答えるジェーン・スーさんの掛け合いや華丸大吉さんとの掛け合いが、とてもおもしろかった。

○　６月１３日(火)の先人たちの底力　知恵泉（ちえいず)「首里城・紅型　沖縄への愛　鎌倉芳太郎」を見た。首里城を何度も救ってきた鎌倉芳太郎さんを紹介する番組で期待していたが、ところどころ気になる点があった。冒頭から紅型を着物と紹介していたが、正しくは着物ではなく染めの技法である。紅型という着物が廃れていくといった表現もあったが、染め技法であることから、正確には琉装という和服とは異なる文化があったということを適切に伝えてほしかった。また、何点か紅型の作品を紹介していたが、未成年の王族の少年が着ていた、黄色地鳳凰瑞雲霞文様紅型紋紗衣裳が王族の婦人用と紹介されていて、残念だった。さらに、紅型の技法を

紹介する際、型紙を切り抜くという軽い言い方をしていた。朧（うぶる）型という技法は、２種類、３種類の型紙を重ね染めしていくという、琉球王朝時代からある古典的な技法であるのに対して、紅型を全然知らない方がこの番組だけを見たら、朧型を鎌倉先生が考案したように見える内容になっていた。王朝時代の朧型と鎌倉先生オリジナルのデザインによる朧型を見比べる構成であれば、それだけですばらしい内容となっていたはずなのに、番組全体がもったいない演出であった。キャスティングも宮本亞門さんと田中律子さんのコメントには浅さが目立ち、琉球歴史研究家の上里隆史さんのコメントに随分救われたように見えた。知的エンターテインメントとして見た場合には、監修や裏取りといった部分をつくり込まれているほうが番組としての見応えははるかに上がったのではないか。番組の出来を上里さんに見てもらうなり、沖縄の染色の専門家に見てもらうとさらによかったのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

いただいた意見を大切にしながら、全国や九州沖縄ブロック、ローカル局の役割をしっかりと見つめ直していきたい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２３年５月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１８日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、７人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、事前に視聴した、ザ・ライフ「Ｚ世代のあなた　テレビ見てますか？」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に６月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　古荘　貴敏　（株式会社古荘本店代表取締役社長）
　　いのうえちず　（雑誌モモト編集長）
　　大館　真晴　（宮崎県立看護大学　教授）
　　久保田　正廣　（西日本新聞社論説委員長）
　　陳　優継　（株式会社 四海楼　代表取締役社長）
　　吉島　夕莉子　（吉島伸一鍋島緞通株式会社５代目技術継承者　デザイナー）
　　吉水　請子　（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜ザ・ライフ「Ｚ世代のあなた　テレビ見てますか？」
（総合　４月２１日(金)放送）について＞

○　若者たちの住まいや懇親会、情報収集の方法などリアリティーのある日常が映し出されていて、ＮＨＫとしてまずは取材相手を知ることに徹していた。また、それに対して評価をしない、まさに考える余白のある番組で、大上段に構えないスタンスに好感を持った。今回、発信側となっていた若者たちは、自己分析ができていて発言も明確で分かりやすく、それが番組としておもしろく仕上がった要因になっているように感じた。ただ、「彼らに負けないように番組づくりを続けていく」ということばで番組が締めくくられた点については、若者たちの自己開示への感謝の気持ちだったのか、テレビマンとしての矜持を示したのか、それとも多様性の尊重に向けた言い回しなのかがはっきりせず、やや消化不良であった。なぜＺ世代を知ろうとしていたのかをはっきり明言したほうが、番組としてすっきりまとまっているように思えた。

○　番組の終わり方があいまいで、結局何を伝えたかったのかが分からなかった。「テレビを見てもらえるようにＺ世代のことを知りたい」と冒頭でうたっていたが、テレビを見てもらうためにＮＨＫとして何をしていくのかといった点が全く見えてこなかった。掘り下げた内容を期待していたが、結局Ｚ世代の実態を１か月密着するだけで終わってしまい、もったいないと感じる番組であった。動画コンテンツだけでも多くの選択肢がある若者たちにとって、テレビは何を強みとして生き残ろうしているのか。「彼らに負けないように番組を作り続けていく」というひと言で終わっていたが、番組を作っている側がＺ世代の実態を知ってどのように感じ考えたのか、これからテレビをどう変えていこうと考えているのかといった本音の部分を聞いてみたかった。そういった深い考えまで追究した番組であれば、より見応えがあったのではないか。

○　ドキュメンタリー番組としての目的は達成されていて、長期取材を通じてのおもしろさはあったが、起承転結がないように思えた。最終的には多様性という形で結論づけられていたが、最近はそのことばが頻繁に使われていて、空虚なものに感じている。多様性ということばでまとめるならば、利己や利他をどう考えるかといった視点があるとよかった。また、1960 年代生まれは新人類、その後の世代はバブル世代とも言われてきたが、Ｚ世代とほかの世代を比較する演出があれば、番組の中でＺ世代が答えられなかった自分たちの世代に関する評価についても明確になったのではないか。さらに言えば、今回出演していた若者たちがＺ世代を代表しているかという点にも疑問が残り、さまざまなＺ世代を別の視点で再び取材をすると、内容をより掘り下げることができるのではないかと思った。

○　若者がテレビを見ない、特にＮＨＫは見られないということを番組のテーマにしてドキュメンタリー番組を作るという、ひと昔前なら考えられないような番組をつくった点は挑戦的でよかった。Ｚ世代とテレビの在り方について簡単には結論に到達しないという姿も正直で、テレビの現状のように思えた。簡単には答えの出ない問題だからこそ、ある意味受け手側に考えさせるつくりであったと感じている。ただ、出演していたＺ世代は学生の間に起業するといった意識の高い人たちであり、そうした一握りの人たちだけでテレビ離れやＺ世代を論じるには、無理があるように感じた。全体を広く捉えるという意味でも、違うＺ世代から見たテレビやＮＨＫの現状という追加の取材やアプローチがあってもいいように思えた。それが必要だと強く感じた事例として、４月２２日(土)のＮＨＫスペシャル「若者を狙う“闇の錬金術”　～調査報告　借金投資の罠（わな）～」では、一部の若者がネットなどの情報からローンを組んで投資したもののだまされ、自殺する若い女性がいるといった事件を取り扱っていた。この番組を見て、テレビやＮＨＫを見ることで世の中の現

実を知り、社会で生きていくために身を守るための知識やスキルを学ばなくてはならないのが、Ｚ世代であるように思えた。Ｚ世代はいろいろな考えを持ち、さまざまな人々の集まりであることを踏まえて、もっとマスとしてのＺ世代を捉えるような番組をつくることを期待している。

○　Ｚ世代の多様性など、若者たちの生活スタイルがよく分かるという意味で参考になる番組であった。ただ、Ｚ世代の特徴が何かと追い求めていく内容と思って見ていたが、政令指定都市のベンチャー企業に関わるＺ世代の特徴となっていて、真のＺ世代の特徴とは何なのかと疑問に感じた。中核都市や山間地域、漁村といった幅広いＺ世代のことばやライフスタイルも見てみたいと思った。また、Ｚ世代というと若者だという感覚のみで詳細が分からない年配層も多いことから、Ｚ世代の補足が必要であると感じた。例えば、Ｚ世代は生まれたときからインターネットやデジタル、ＳＮＳがあるような世代で、その人々のことばや生活を表しているというような説明が加わると、より多くの視聴者に理解されやすい番組になったのではないか。

○　前半のライフスタイルは、我が子を見ているような思いで共感できた。最近の若者たちの情報リテラシーのほうが自分の世代と比べて健全だと思っているが、おすすめ動画機能が非常に重宝されているという現実を見ると、情報としては偏りがあるように思えた。一方で、映像制作を担当する若者が「映像の力を信じている」というコメントをしていたが、とてもよいことばだと感じた。素人であっても、若い感覚で質の高い映像をつくり上げるなど、切磋琢磨していく世の中になってほしいと感じている。番組の締め方はいまひとつ納得できない部分もあったが、その中でＺ世代の彼らが「みんなに見てもらおうというのはナンセンス」、「Ｚ世代という言葉でくくるのは暴論」ということを言っていた。そうしたつかみどころがないように見えるキーワードの部分が、この番組の答えであるように感じた。テレビを見てもらおうという考えが意味のない状況になっている現在、このＺ世代を取材したＮＨＫ側の価値観や考え方を聞いてみたいと思った。

○　見る人によって、考え方や捉え方が異なるおもしろい番組であった。また、欲しい情報だけを取りに行く若者の姿勢に対して、これを続けてしまうとかなり偏った考えを持った人になってしまうのでないかと心配になる内容でもあった。特に最近はＳＮＳで華やかな世界ばかり目立ち、その世界が当たり前のようになっている。ＩＴ系の業界ばかり人気が出て、社会にとって必要な業種に若者が集まらないといったことにもつながり、将来の日本をどうするべきなのかと考えさせられた。オンデマンドサービスに対するテレビの存在価値を考えた場合、たまたま見ていた時にお

もしろい番組に出会うという、テレビならではのよさがあるのではないかと思った。さらに、テレビを見ているのかどうかについて、Ｚ世代だけでくくることには違和感を覚えた。テレビへの姿勢は、Ｚ世代だけではなく上の世代も変わってきているのではないか。さまざまな世代を研究して、視聴形態がどのように変わっているかを調査してもおもしろいのではないかと感じるなど、いろいろな視点から考えさせられる番組であった。

○　ふだんからＺ世代といわれる大学生と接している自分にとっても衝撃的で、昭和世代の大人世代とのギャップを痛感させられる番組であった。そもそも、テレビが邪魔で一週間で一度もテレビを見ないというＺ世代の常識論と、ニュースと言えばＮＨＫという世間一般の常識論とのずれの大きさやギャップの深さに驚いた。ただ、起業した若者たちを主役にするという考え方には疑問を抱いた。取材対象者の選択理由や位置付けは分からないが、彼らに１か月密着したことで、ライフスタイルや生活空間、通勤時間やオフタイムの過ごし方といった生活スタイルからの取材目線や着眼点は非常に斬新で、Ｚ世代の多様性を理解するのに十分な材料だった。受け取り側の余白という感覚表現もとても印象的な番組であった。

○　Ｚ世代のテレビ離れは聞いていたが、取材したメンバーのほとんどが見ていないという想像以上の現状に驚いた。テレビはゲームや目覚まし代わり、見る時間や欲しい情報が入ってくるわけではないし選べないなど、さまざまな理由でテレビの必要性を感じていない若者のリアルな声やライフスタイルなどが、番組を通して興味深く感じた。調査では半数近くが１週間のうちにテレビを一度も見ないという結果で、今回密着したベンチャーの若者たちをＺ世代とひとくくりにして紹介するのは、少し偏りがあるように感じた。ただ、一人一人を丁寧に取材したことで、テレビの考え方が多様であったのもおもしろかった。ネット動画やサブスクリプションなどの普及により、ニュースや情報収集の形は変わっている。また、ＮＨＫに対しては必要性を感じるが、受信料や固く暗いイメージがあることなど、これからのＮＨＫの在り方を変えていく時がくるのではないか。いろいろな価値観があって当たり前で、多くの人に見てもらうためでなく、テレビもメディアコンテンツの一つとして、今後は質で高めていく時代が来ているのではと考えさせられる番組だった。

（ＮＨＫ側）

取材した会社がＺ世代の若者たちを代表しているのかという点については制作側でも議論したが、番組としてひとつ舞台を設定し伝えていきたいという思いもあり、今回のような形でまとめた。テレビの見られ方について、ＮＨＫとしてどうしていくのかと

いった点については、簡単には結論が出ないというのが正直なところで、これからも考え続けていくしかないと肝に銘じている。Ｚ世代と世代でくくることが正しいのかは分からないが、テレビがどう見られているのか、今後どうしていけばよいのかという点は、引き続き取材をして伝えていきたい。

（ＮＨＫ側）

挑戦的なテーマだという意見もあったが、Ｚ世代だけではなく、テレビを見ないほかの世代も含めて、さまざまな問題意識を持って今後も番組をつくっていきたい。

（ＮＨＫ側）

ザ・ライフ「Ｚ世代のあなた　テレビ見てますか？」の中でいただいたＺ世代のことばをどのように受け止め対応していくのかといった点については、今後ＮＨＫとして考えていかなくてはならないことだと思っている。スポーツ中継のような、大勢でいっしょに楽しめるような番組ならば見てくれるのではないかと思っているが、いまの若者たちはテレビだけでは満足しないこともある。そういった点を解決するためにも、インターネットなど若者たちにも伝えられるようなものにも可能な範囲で広げていく必要があると思った。多様な視聴者のためには、多様な形で伝えることが必要だと考えている。

＜放送番組一般について＞

○　４月２２日(土)のＥＴＶ特集「ひとりだけど、ひとりじゃない」を見た。中高年の男性を中心に身寄りのない天涯孤独の人たちが集まって、当事者同士が互いに肩を寄せ合って生きていくという、鹿児島の「鹿児島ゆくさの会」の実態をドキュメンタリー調で描いている番組だったが、自分の知らない世界でとても勉強になった。グループのポジティブな面だけに目を向けがちだが、ネガティブな面も取り上げていて、よいところばかりに偏らない、きちんと暗部も紹介しようという意欲を感じられた番組だった。

５月１０日（水）の「おはよう日本」のリポートを見た。沖縄に配備が決まった海兵沿岸連隊という新しい組織が、フィリピンで訓練を行っているということだったが、この密着取材を申し込んで許されたということで、テレビという媒体でインタビューも含めてやり切ったというのは、とても挑戦的だと思った。４月の段階で「沖

縄ＮＥＷＳＷＥＢ」でも掲載されていて、沖縄の海兵隊の問題を勉強する中で進める取り組みと今後どう展開していくのかと考えていたら、「おはよう日本」の中で女性記者がコンパクトに分かりやすい解説をしていて、この沿岸海兵連隊は沖縄や奄美など日本で戦う部隊だということが、このリポートでよく分かった。

５月１７日(水)のクローズアップ現代「“誰も助けてくれなかった”　告白・ジャニーズと性加害問題」を見た。昨今話題になっている問題について、ＮＨＫは取り上げるのがやや遅れているのではないかと思っていたが、それなりに突っ込んだ取材をしていた。芸能事務所の社長が夢見る若者に対して、よこしまな気持ちで接していたということが構造的に長い間続いていたという事実は、できれば正面から取り上げたくない内容ではある。ただ、若い世代がメディア全体に対する不信感のようなものを持っている中で、日本のメディアにはタブーが多過ぎるという意見も出ている。ＮＨＫは音楽番組などでジャニーズ事務所のタレントを起用して、エンターテインメントの場を提供している側でもある。だからこそ制作者としてのＮＨＫが今回の問題をどう考えて、どのように受け止めているのかということを総括したコメントのようなものを、組織として出していくことが必要ではないかとも思った。報道機関として事実を追うことと、芸能番組やエンターテイメントを提供することの、両方を行う立場として、ＮＨＫの見解が問われているように思えた。

（ＮＨＫ側）

ジャニーズの報道に関してはタブー視することなく、事実をきちんと伝えていくことが必要だということで、放送しているものだと思っている。今回の報道が外国のメディアが発端になっていることについては、ＮＨＫのみならず日本のメディア全体として重く考える必要があるものだと認識している。

○　４月３０日(日)の「ＮＨＫスペシャル　“男性目線”変えてみた　第２回　無意識の壁を打ち破れ」を見た。女性にとって日々もんもんとしていることを拾い上げ、女性であれば１回は感じたことがある内容にうまく切り込んだ番組だった。紹介されていたさまざまな事例は、日本の中ではごく少数であり、これから変えていかなければならない問題であった。今後も引き続き番組として伝えていくことで、見ている人がこの問題を考えていくような機会を与えてほしい。ただ、こうした問題を取り上げると、女性優遇ではないかといった声が聞こえてくる。今回のようにタイトルの「男性目線変えてみた」ということばも、人によっては敬遠してしまうのではないかと思った。その切り込み具合が難しいと思う中、この番組は嫌悪感を抱くことはなく、バランスよくまとめられていて、多くの方に見てほしいと思える番組だった。

○　５月８日(月)のクローズアップ現代「どうする“集まりすぎる”客　観光地とオーバーツーリズム」を見た。観光に携わる身として、コロナ後の行動制限や水際対策の緩和により急激に動き出した国内外の観光客を受け入れる観光地の現状とオーバーツーリズム、そして持続可能な観光など、とても興味深いものであった。人手不足により客を受け入れられない飲食店や大型クルーズ船によって流入してくる観光客の受け入れ対策、また、マナー問題などを観光客の多い地域で取り上げていたが、これは全国的に起こっている課題である。現場の苦悩する様子は伝わったが、それに対しての取り組みの事例がもう少しあるとよかった。番組後半の、量から質へ転換させた地方の旅館や古民家を再生した旅館、ならびに新たな観光ルートの取り組みについては、これから求められるものの事例として魅力的であった。旅のスタイルも多様になってきていることから、街や地方などさまざまな視点から持続可能な観光の取り組みについて、今度取り上げていただきたい。

○　５月８日(月)のクローズアップ現代「どうする“集まりすぎる”客　観光地とオーバーツーリズム」を見た。　観光業に関わっていない人であればなかなか知る機会のない現場を取材していて、行政に携わる議員など、より多くの人に見てもらいたいと思える内容であった。単純にオーバーツーリズムとして捉えるだけでなく、まちづくりやまちの発展のために、交流人口は本当に必要なものであるという課題を共有するうえで、非常によい番組であった。課題解決に向けて地域ごとでいろいろな対応策があるが、その差を知るということも十分必要なことだと思った。コロナ以前にはパンク寸前であったオーバーツーリズムについて、コロナが少し落ち着いた今、何もしなければ、その状態が再来することを問題提起していた。

○　５月１４日(日)のＢＳ４Ｋ特集「沖縄の海　幻のジュゴンを追う」(ＢＳプレミアム 前10:30～11:29) を見た。最初はネイチャー系の特集かと思ったが、民俗学や歴史の話であり、登場人物も含めて番組で取り扱うすべての要素がよかった。出演者の中では特に、伊良部島のカニ漁師である吉浜崇浩さんが言葉の力を持っている人のように感じた。断片的なパズルが、ラストに向けて集約されていく点もテンポ良く進み、仕込みや作られた感じが全くなく、嫌みもそつもないよい番組であった。ジュゴンは神の使いであるという一面があり信仰の対象になっているところや、ジュゴンについて歌った古い歌などが強調されている点は、吉浜さんの言葉に集約されていくための布石のように感じた。ジュゴンに対するイメージはいろいろあるが、それを歴史や民俗学的、自然科学の視点も番組内では伝えていて、自然への畏敬の念が描かれていた。沖縄出身の新垣樽助さんのナレーションも、自然に聞こえてくるものでとてもよかった。

○　５月１４日(日)のＪリーグ２０２３　Ｊ１第１３節「アビスパ福岡」対「サガン鳥栖」（総合 後 1:05～4:00／福岡県域・佐賀県域)を見た。Ｊリーグ開幕３０周年の節目を記念する生中継で、1993 年Ｊリーグ発足当時の思い出深い映像やセレモニーの様子、そして全国各地のスタジアムをリレー中継でつなぐ演出は、特別な一日を演出する意義のある構成だった。インターローカルで対戦する両チームのホームタウンを同時中継で結ぶ企画は、ダービーマッチだけでなく、リーグ戦中継でも継続していくべきである。サッカーの試合そのものと地域や街の代表者という役割を、インターローカルによってホームタウンの魅力やサポーターの姿にもフォーカスした構成を今後も期待している。

○　５月１４日(日)のＮＨＫスペシャル「お祭り復活元年～にっぽん再生への道～」を見た。ＴＯＫＩＯの城島茂さんのナレーションには、人の気持ちを鼓舞する力があり、番組のコンセプトにも合致していた。存亡の危機にさらされている地方のお祭りの復活に向けて、登場人物たちが知恵を絞る中でどこか楽観的な一面を見て、自分の仕事と照らし合わせながらこの考えを忘れずに持ち続けなければいけないと思うことができた。鹿児島の学生たちがアップした動画では、ＳＮＳの進化とともに人々が見落としているような魅力を見つけて、改めて訴求していく力や、編集する能力を知らず知らずのうちに育んできたのかもしれないと、今の時代への希望も感じた。村の人たちであふれる最盛期のアーカイブ映像が効果的に使われていたり、地域の祭りの奥深い魅力や再生に向けた取り組みのすばらしさが散りばめられていたりして、気持ちを動かされる番組であった。課題解決の方法というのは、ダイバーシティやインバウンド、デジタルといった現代的なものが多いが、その根底を支えているのは未来に向けて明確なビジョンを持って取り組むことや、地域への愛着を持つことなのだという教訓を得られる番組だった。

○　５月１４日(日)のＮＨＫスペシャル「お祭り復活元年～にっぽん再生への道～」を見た。祭りを復活させようという新しいコミュニティーの創設や、次世代に向けた育成の取り組みなど、復活に向けたさまざまな動きについて情熱をかけて取材している点に感動した。祭りの復活のために、メタバースやダイバーシティ、インバウンドといった新しいツールを使って、さまざまな世代や職種を新しい方向でつないでいこうという新たな動きも浮き彫りになっていて、非常に参考になる番組だった。ただ、新しい方法論を取り上げるのも大変重要なことであるが、祭りを残すためにその地域に暮らす人々が一生懸命話し合い、伝統を続けるために伝統を壊すという、人々の情が通い合った部分も取り上げているとさらによかった。

○　５月１４日(日)のＮＨＫスペシャル「お祭り復活元年～にっぽん再生への道～」を見た。私の地元でも毎年開催されている祭りがあるものの、出場する学校の卒業生や特定の地域に住んでいる人でないと出られなかったり、女性は特定のエリアに入ってはいけなかったりする規制が残り、嫌気がさしていた。ただ、番組で取り上げられていた鹿児島や宮崎の祭りは、いずれも見に来た人も楽しめる祭りに様変わりしていることに驚き、地元の祭りも同じように変わっていく必要があると気づくことができた。一方で、その流れはよいと思うが、触れてはいけない神への敬けんが失われてしまうという一面もある。変わっていくべき点と残していくべき点のバランスが重要であり、地域の活性化にもつながるという学びのある番組だった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「お祭り復活元年～にっぽん再生への道～」について、祭りの伝統を壊すことで伝統を守っていくといった視点が必要であることは、以前に祭りの番組を審議会で取り上げた時にもいただいていた意見であり、そのことを改めて感じることができた。今回もいろいろな意見から多くの示唆をいただいた。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２３年４月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、２０日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、事前に視聴したＤｅａｒにっぽん「すべてを失った、この場所で～北九州・小倉昭和館～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に５月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	古荘　貴敏	（株式会社古荘本店代表取締役社長）
委　員	乾　眞寛	（福岡大学スポーツ科学部教授）
	いのうえちず	（雑誌モモト編集長）
	大館　真晴	（宮崎県立看護大学　教授）
	久保田　正廣	（西日本新聞社論説委員長）
	陳　優継	（株式会社 四海楼　代表取締役社長）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社５代目技術継承者　デザイナー）
	吉水　請子	（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜Ｄｅａｒにっぽん「すべてを失った、この場所で～北九州・小倉昭和館～」
（総合　３月２７日(月)放送）について＞

○　老舗映画館の館主・樋口智巳さんが、昭和館の火災とともに映り込んでいた姿は非常にショッキングな映像で、冒頭から一瞬にして引き込まれた。焼け残った映画館の看板が番組の末尾にも出てきて、この看板がまた何らかの形で現場に戻ってくると思わせる、短いながらもストーリー性がある番組であった。また、途中で紹介された高倉健さんからの手紙は、樋口さんの背中を押す存在でもあり、番組の一つの軸になっているように思えた。樋口さんのことばには説得力があり、存在感があった。エンディング曲も「魔法みたいに」というタイトルで思いが詰まっていて、「失ったからこそ大切だったものがある」という締めのナレーションが言い表すことをいろいろと考えさせられる番組であった。

○　旦過市場の火災と昭和館のことは、過去にもたびたびニュースでも取り上げられていたことから印象に残っていて、冒頭からぐっと引き込まれた。また、丁寧な取材で描かれているのも随所にかいま見えた。映画産業の在り方が時代とともに変わってきているという現実社会での課題もきちんと捉えつつ、情緒に流されるだけではないという番組の構成は非常によかった。チケット代金の返金を受け付ける中、集まってきた人たちがお金を寄付する場面もあったが、そのようなノスタルジー一辺倒ではなく、再建に向けて困難に立ち向かう樋口さん本人の折れない強さやしなやかな感じを自然に思わせてもらえる番組であった。昭和館が再建されたときには、続編として見てみたい。

○　非常に丁寧につくられた感動的な番組であった。昭和館の看板が焼け落ちていく様子を通して、昭和から令和へと時代が移り行く姿が見えてくるとともに、映画館からシネマコンプレックスやサブスクリプションサービスへ変わっていく時代の流れを象徴的に映し出していた。また、樋口さんの「人と人との交流の場を残す」ということばは、映画文化というよりも、人と人との交流が生まれる映画館文化であり、その環境を大事にする考え方がインタビューを通して浮き彫りになっていた。昨今、人と人とのコミュニティーを維持したり、持続可能性を維持するためにコミュニティーを維持したりすることが指摘されている。人と人とのつながりを残すことでどういう社会的効果を生んでいくのか、映画館を再建する様子を引き続き取材し続けてほしい。

○　冒頭の昭和館が燃えている場面から樋口さんが映っていて、いつからこの番組を考え始めたのだろうかと思っていた。感動的な内容で、訴えかけるものは大きかったが、樋口さんという個性の強い人の動きに寄り過ぎてしまっていたように感じた。昭和館が再建されていく姿を映すのであれば、土地や建物を持っている不動産会社の決断が重要になってくる。実際に、地主である不動産会社側はどのように思っていたのかといった一面も取り上げると、立体的に物事が見えてきたのではないか。今後、継続して取材を続けるのであれば、昭和の小さな映画館を基軸にし、映画だけでなく世の中やまちづくりなどをどう考えていくとよいのかという趣旨で番組を展開してほしい。また、大きな災害や事件となると、被害者の中でも有名な人や目立つ人にスポットライトが当たりやすくなる。旦過市場の火災は、ＮＨＫの北九州局にとっては大きなテーマになると思うが、取材が届かないけれど困っている人たちや、苦しんでいる人たちからの声を取り上げていってほしい。

（ＮＨＫ側）

旦過市場の火災直後から、「わたしの旦過市場」というコーナー

を「ニュースブリッジ北九州」の中で立ち上げた。旦過市場に思いを寄せる人や自分の思いを発信したいといった声をすくい上げ、約２分のコーナーで放送する企画を立ち上げたところ、いろいろな声が寄せられた。ペンネームで名前を出さなくてもよく、よりリアルな声を発信できた一方で、取材を受けたくないという人々の存在もあった。我々としては、ＮＨＫというツールを使って、自分たちの暮らしや生きがいのようなものを活性化できるハブ的な存在として捉えてもらえればと考えている。

（ＮＨＫ側）

昭和館だけでなく、地域のお店を経営されてきた方を主人公にした番組も作ってきた。「わたしの旦過市場」についても再建に向けてできた工事の壁に、視聴者から届いた思いでのメッセージを貼り出させてもらうなど、放送だけではないリアルの部分でも何かできないかと考えている。引き続き北九州局として、全力で支援していきたい。

○　樋口さんの心情が地元の人々のつながりや交流とともに描かれていて、非常によくまとまった番組であった。また、樋口さんの「初代がつくって、２代目が守ってきたものを、３代目が潰す役を引き受けた」ということばが、私には家業を受け継ぐ継承者の覚悟としてとても大きく響いた。ただ、すでに再建ありきのような形になっていたことが気になったほか、樋口さんの家族の思いも見えてこなかった。再建するにあたって、地権者やその関係者とのやり取りなど、もう少し掘り下げた内容があるとよりリアルで、家業を継承するような方が見たときに興味がわいたのではないか。また、番組の最後に再建を望む署名が突如出てきたことに対しても、後から無理やり組み込んだようにも思えた。

○　きれいに整った構成と内容で、出演していた方々の心の動きなどを丁寧に取材した番組であった。ただ、地権者や不動産会社の方が再建を決めた理由や背景、それ以外の再建に至る過程における周りの人々の動きなどもっと掘り下げてしてほしかったという点は少し心残りであった。再建が決まった段階であり、これから先もいろいろな課題があると思う。今後どのような未来を描いているのか、赤字続きだったところからこの先どのようなことに取り組んでいくのか。昭和館の再建に向けた取材も含め、今後もこうした番組の制作を期待している。

○　北九州市民としては、炎よりもがれきの映像の方が心に刺さり、身近な風景の喪

失を目の当たりにして悲しみがこみ上げてきた。番組は時系列が分かりやすくまとまっていて、館主の人柄や地域との関係性、経営者としての顔が的確に描かれていて、その人となりがリアルに伝わってくる構成であった。特に印象的だったのは、樋口さんの即座に的確なことばを選び取る能力を繊細にすくい上げていたことで、樋口さんが持っている力量や魅力が十分に伝わってきた点である。高倉健さんから贈られたことばも、樋口さんとシンクロするところがあるようにも思えた。経営者としての樋口さんの強さも圧巻で、再建を願う顧客たちの心を束にしていくオーガナイザーとしての力に感心した。運命を受け入れて立ち上がれるかどうかといったレジリエンスというところが、この物語の最大のテーマのように思えた。ただ、硬質なカルチャー発信をしているのは昭和館だけでなく、周辺にいる地域が育んできた市井の人々のインテリジェンスの部分でもある。この点は番組を見た人にどこまで伝わったのだろうか。他の地域の方がこの番組を見て、旦過市場がレトロな風情の映画館とコミュニティーを築いている高齢者の街みたいに映らないようにと願いたい気持ちになった。

○　旦過市場火災から１年ということで、現在の旦過市場がきれいになったと思う一方で、あの味わい深い市場が焼失したことに寂しさも感じた。しかし、時が経つとこういった場所が失われていくということに改めて気づくこともできて、感慨深く思えた。また、昭和館の再建は厳しいと思っていたが、再建が決定したことについては驚き、地権者がお金を出したのか、行政がお金を出したのかといった現実的なところが気になった。ただ、この番組は美しさや趣のある演出にこだわっている一面があり、再建に関するリアルな一面を入れてしまうとその雰囲気を壊してしまう部分もあって、あえて出さなかったようにも感じた。全体的には独特の雰囲気を持った、味がある番組に仕上がっていた。

○　火災で燃える昭和館を目の前にあぜんとする樋口さんの姿から始まるが、これを撮影したのは偶然だったのだろうか。また、これまで守ってきた映画館が目の前で燃えていくのはどれだけつらかったのかと考えさせられた。冒頭から引き込まれ、失意の中でも御客様や高倉健さんからのお手紙などを通して、少しずつ前に進んでいく樋口さんの姿が、短い番組の中にうまくまとまっている、見応えのある番組であった。タイトルも、この場所ですべてを失っただけではなく、この場所から未来へと続いていくといった意味が込められていることが、番組を見て感じ取ることができた。８３年以上続く老舗映画館を閉じる役目として引き継いだ樋口さんが、経営的にも困難な時に届いた高倉健さんの手紙の中のことば「自分に嘘のない充実した時間を」をきっかけに、映画館を改善していこうとお客様と接する様子はとても温かく、多くの人々に愛されるまちの映画館だったことが理解できた。番組では、映画

館の歴史や館主の想い、お客様や地域の人々の映画館に対する思いと深いつながりが伝わり、構成としてもとてもよかった。館主の熱い想いと、映画館にまた行きたいという人々の再建の願いが一つとなり、一歩動き出す様子に心動かされた。家業を継いだ同じ立場として自分自身に重なることもあり、すべてを失うということ、そしてそこから立ち上がっていく館主の強さと前向きな姿に感動し、勇気をもらえるすばらしい番組であった。

（ＮＨＫ側）

いただいた意見は、持ち帰ってディレクターやスタッフにしっかり伝えたい。不動産会社の決断について、経済は浪花節では動かないし、それで動いたところで続くわけがないというのは理解している。社長や経営者の決断も取材し、それをどのように盛り込んでいこうかとも考えたが､樋口さんを中心に描く形になった。不動産会社の経営者は、地域文化について非常に思い入れのある方で、樋口さんとも交友関係が十分にあったことから、経営難の時にも経営計画を一緒に練っていくなど、話しながら事業を進めていくことが大前提で今回の決断をしたと聞いている。そういった目線で見ていくドキュメンタリーや報道番組をつくることで、また違った一面の地域の交流づくりという意味で続編を作ることができるのではないかと思った。家族の取材についても、しっかり取材を続けていきたい。

（ＮＨＫ側）

いただいた意見を参考として、継続して取材していく。３月１７日(金)の＃てれふく「あの場所で、もう一度～北九州・小倉昭和館　再建への道のり～」では、樋口さんだけでなく地域の支えてくれている人々の思いがメインになっている。樋口さん本人も知らない、サポートしてくれる昭和館ファンの皆さんを描いていたことから、自分でも気付いていないバックグラウンドが見えたと樋口さんからも好評をいただいている。火災を見つめる樋口さんの映像が、どうして撮れていたのかという意見もあったが、樋口さんは地域でもとても有名な方で､昭和館の経営だけではなく、地域の文化活動などの場に顔を出されていたこともあり、すぐに見つけることができた。当日は緊急報道として動いたが、即座に取材させていただくこととなった。

＜放送番組一般について＞

○　３月２５日(土)に再放送された「プロ野球　マジックの継承者たち～ＷＢＣ栗山監督と名将のノート～」(総合 前 1:34～2:23)を見た。ＷＢＣ＝ワールド・ベースボール・クラシックの準決勝と決勝で日本人選手が活躍した名場面に繰り返し浸っていた中、日本が優勝した３日後に放送されたので非常に強烈だった。優勝するしないに関係なく、事前に栗山英樹監督に取材や準備をして作り込まれた番組であった。また、ほかのメディアでは話題にしていない、福岡でなじみの深い西鉄ライオンズの野武士軍団と言われた三原脩監督が登場し、栗山監督やＷＢＣとのつながりについても取材をしていたＮＨＫの取材力には驚いた。三原監督が当時のことを詳細に描いたノートが、現在はＷＢＣの栗山監督の元に現物が受け継がれているという流れも細かく描き、時代が変わっているにもかかわらず、その当時に三原さんが考えてきたことが、この時代のＷＢＣを戦う栗山監督にシンクロするのかと考えさせられる番組であった。４月５日(水)と１２日(水)のＮＨＫアカデミア「森保一さん（前編・後編)」も見たが、世界大会で日本代表の監督として戦ってきた２人に共通する部分はたくさんあり、その点も非常に興味深かった。監督として、スランプとの向き合い方や大きな決断をするときにはどんな心の持ち方をするべきなのかといった、あらゆる分野に使えるようなコメントが出てきて参考になる、すばらしい番組であった。スポーツに携わる者として、このような描き方をするのは、ＮＨＫならではだと感心した。インターネットで「ＮＨＫアカデミア」を調べたところ、この番組にはすばらしい方が多く出演している。また、動画も公開されていた。なかなか若い方が視聴しないＮＨＫのスポーツ報道やドキュメンタリーを掲載している「ＮＨＫアカデミア」は、「ＮＨＫラーニング」として学生たちにも見せていきたいと思った。

○　４月８日(土)のＮＨＫスペシャル「あなたの“まち”の選択は　統一地方選挙　首長たちの本音」を見た。全国の首長全員にＮＨＫがアンケートを取ったということだったが、こういった貴重なデータがあるならば、これに基づいた番組として投票日の前日ではなく、もっと早い日程で放送するべきだったのではないか。また、地方自治体の取り組みでおもしろいと思う内容をいくつか取り上げては、その自治体の首長とスタジオにいる４人の有識者と意見を交換していたが、やや型どおりの構成になっていて、出演していた４人のバックグラウンドも異なっていたことから、話が深まっていないように思えた。司会者含め出演している人のほとんどが東京出身である中、子育てや過疎化といった地方の問題を提示しても、当事者性が伝わってこなかったため、データが生かされていないという印象であった。地方の問題を扱うのであれば、例えば福岡局で収録するなど東京以外の場所で企画を立てて、そこ

で全国的な地方の問題を語るような手法にした方がよかったのではないか。

４月１５日(土)のドキュメント「シン・仮面ライダー」～ヒーローアクション挑戦の舞台裏～(総合 後 7:30～8:48)を見た。映画監督の庵野秀明さんに２年間密着したドキュメンタリーで、以前、アニメのエヴァンゲリオンでも、ＮＨＫはその制作過程に３年、４年密着する非常にすばらしいドキュメンタリーをつくっていたが、この番組はやや期待外れであった。結局、監督と現場のイメージが合わないという、そのやり取りに終始してしまって、今の時代で仮面ライダーを選んで放送する意味や、どこまで過去を参考にして新しい仮面ライダーにしていくのかといった作品としての核心に迫らずに、アクションシーンをどうするのかということのみに終始している印象であった。

○　４月１０日(月)の「クローズアップ現代　追跡“ＰＦＡＳ汚染”暮らしに迫る化学物質」を見た。沖縄では、ＰＦＡＳや有機フッ素化合物の汚染の問題は何年も報道されていて県民の認知度は高いが、全国的にはまだあまり知られていないように思えることから、基本的な情報を解説してくれる番組はありがたかった。ただ、専門家のコメントが概要を解説するのみであり、もう少し突っ込んで取材してほしいと思える内容であった。米国の国防総省のコメントが紹介されたが、米国内のことについては触れている反面、日本国内についての記述が全くないもので、もう少し突っ込んでコメントを取りにいくことはできなかったのかと疑問に思った。ＰＦＡＳ汚染の問題が世の中でどのくらい興味を持たれているのかは分からないが、今後はより長い放送尺で、きちんとした調査に基づいた報道番組をつくっていただきたい。

○　４月１４日(金)の長崎セレクト９０「“ユーミンの島”はいま」(総合 後 7:30～8:42／長崎県域)を見た。長崎の五島にある奈留島の高校生が、歌手の荒井由実さん（現在の松任谷由実さん）に校歌を作ってほしいと依頼したのがきっかけで、「瞳を閉じて」という歌が出来上がったという物語であった。最初に放送されたのが 1976 年の「新日本紀行　歌が生まれて　そして」、その後 1988 年に今度は九州特集「瞳を閉じて」が放送され、2023 年には長崎局の開局９０周年を記念して、３回目の番組が制作された。４７年前、３５年前、そして現在と、３本の番組を一つに合わせたような形で放送しており、この校歌の作成を当時依頼した学生の動きなど、一つのテーマで５０年近くの動きをまとめて取材していたのには感動した。長崎局は開局９０年を迎え、それだけのアーカイブス映像があり、これを有機的に使っていたのはとてもよかった。

○　４月１４日(金)のくまもとの風「岩合光昭の世界ネコ歩き～湯島～」を見た。岩合

さんの撮影方法も独特な中、この島だからこそ見ることができる猫の表情もあり、癒やされた。小学生の男の子が学校が終わってすぐ港で魚釣りをし、その魚を猫に食べさせている姿が、現代社会で失われてしまった人間の温かさは田舎に行くとあるように感じた。こういった子どもたちが、県外の学校に進んだときに、町で培ったその温かさを保っていられるのかとも考えさせられたが、日本の古きよきものを思い出せるとてもよい番組であった。一方で、230 匹の猫がいるということで、猫のトイレ問題や不妊治療とかどうなっているのかといった細かい部分も知りたくなった。

○　４月１４日(金)のかごスピ「コロナとエンターテイナー」を見た。今回番組で紹介された一つの飲食店が、コロナ禍に鹿児島市で初めてのクラスターが出て店名が公表されたこともあり、そのニュースは鹿児島ではかなり話題になっていた。天文館では周辺店舗やエリアでも風評被害などの影響はあり、店に対してもかなりの誹謗中傷がありながらも、現実を受け止めたうえで乗り越え、この店を残していかないといけないという前向きに先を見るママさんの思いを感じた。店は自分たちにとって「家」というスタッフとママさんが、お客様に楽しんでもらうために、普段は華やかな場の裏側で日々準備をしているといった姿に、親しみと天文館で店を続けていく思いを感じた。鹿児島の地方にある古くて小さな遊園地もエンターテイナーの一つとして取り上げられていたが、これについては少し違和感を抱いた。お客さんが来てから動かすという遊園地があることに驚いたが、これまで少ない従業員で対応していた状況で、客数が増えていく今後対応できるのかと心配になった。今回、番組をナビゲートした歌手のジミー入枝さんの「声で勝負する人間が、声を出せない」ということばも印象的で、コロナ禍の状況は厳しかったと思うし、今もまだ終わっていないことを感じた。普段は表の面しか見られることのないエンターテイナーだが、その裏にはさまざまな思いや地道な活動があることを知ることができる番組であった。

○　４月１５日(土)のＮＨＫスペシャル「羽生善治５２歳の格闘～藤井聡太との七番勝負～」を見た。羽生善治九段と藤井聡太六冠の王将戦七番勝負に密着し、両者がしのぎを削った生々しい戦いの様子と貴重な珠玉の戦いが引き出されていたが、それを通して現代社会を生きていく上での問題にひも付けて、解釈することができた。ＡＩを駆使して勝率がより高い戦法を選ぶのが現代的である中で、羽生さんが「ＡＩに頼り過ぎると多様性や創造性がなくなる」といったことばを述べていて、今後のＡＩ機能に対してどう向き合っていくべきかを考えさせられる、大変参考になる番組であった。しかし、一緒に見ていた家族にとっては難しかったようで、自分の解説を聞きながら見ていた。もう少し分かりやすく伝えられていたら、この番組をきっかけに羽生さんの思いについて考えるきっかけになったのではないか。例えば、メッ

セージの意味を分かりやすく解釈して、自分たちの問題に導いてくれるようなナビゲーターが一人いれば、若者や将棋に興味がない視聴者でも、二人が対決する様子のすばらしさが分かったのではないかと思った。

○　３月２９日(水)の「子育て　まち育て　石見銀山物語　“小さな奇跡”の１年」(Ｅテレ 後 10:00～10:59)を見た。町の人たちが自分の子どもだけでなく、みんなで町の子どもを育てていくという、温かなコミュニティーを目の当たりにして癒やしのひとときとなったが、振り返ってみると人生や生活に対する問題提起の番組だったのではないかと思った。400 人しかいない小さな田舎の町に住む人々がファッショナブルな方ばかりであることや、リノベーションされた古民家もおしゃれでかつ最先端であるなど、今の時代にとってアートの雰囲気が町の価値を引き上げるための重要な要素なのだと気付かされた。小さな町を経済的に成立させている、地元のグローバル企業の紹介もさりげなく盛り込まれていたり、新年になると家々に伝わるアーティスティックなしめ縄の映像が映ったりするなど、自然や歴史、文化など多様な要素が一過性でなく、時間をかけて培われてきた町のセンスなのかと考えさせられる背景も丁寧に描かれていた。地方創生や子育てなど、地方のあり方について考える機会が今後増えていくと思うが、その際に参考にしたくなる番組であった。

○　４月１日(土)に再放送された「ゾンターク～おどりのほし～」(３)・(４)(Ｅテレ前 9:20～9:50／九州沖縄ブロック)を見た。必修でダンスの授業が行われている中、授業でダンスを学ぶ学生たちには役に立つ番組だった。一方、専門的でハードルが高い内容になっていて、それ以外の視聴者にはなかなか難しい、ターゲット層が狭い内容の番組ではないかとも思った。幼い子どもに音楽を聴いてもらい、そのイメージをお兄さんとお姉さんがダンスにしてくれるというコーナーでは、急にお兄さんとお姉さんが町なかでダンスしている映像に移り、また、そのダンスも見よう見まねでやるのは難しそうで、子ども向きの番組というよりもダンスの世界観を見せるだけの番組のようにも感じた。もっと親しみやすくもっと身近にという趣旨があるのであれば、もう少し易しいコーナーがあってもよいのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

「ゾンターク～おどりのほし～」は、もっと親しみやすい内容にしてほしいといった意見が、他の視聴者からも寄せられている。開発番組としてこれからも改良を続けていく番組であるので見守ってほしい。子どもたちが踊っているＶＴＲを募集している、一方で高度なダンスをする方々にも見ていただける内容にしたいとも考えている。親子で楽しむこともでき、ダンスを極めたいと

思っている人たちも憧れるような番組に育てていきたい。

（ＮＨＫ側）

アーカイブスの映像を生かしていくといった話があったが、ＮＨＫとしても過去の映像はＮＨＫの財産であり、活用していこうと各放送局でも取り組んでいる。「ゾンターク～おどりのほし～」については、実際に子どもたちが番組づくりにどう関わっていくのかということも含め、今後は改良を加えていきたい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局